風の軌跡

第一話　卵盗り　Fake Egg

エーシェはドラゴンに噛まれた経験がある。

十年以上前の話だ。剣術修行の一環として養父と共に訪れた渓谷で、そこの主たる白翼竜（はくよくりゅう）に頭から丸呑みにされたのだ。

未だ四半世紀には満たないものの、彼女の人生において、それを越える恐怖体験は無い。

仰ぎ見るような巨躯。縦に鋭く裂けた金の瞳孔。皮膚を覆う硬質の鱗。耳元まで裂けた口にびっしりと生えた、鍾乳洞を思わせる太くて鋭い乱杭歯。

そんな生物が、子牛さえ丸呑みにできそうな顎をおもむろに開き、悠然と迫ってきたのだ。

悪夢としか思えないような光景に、当時、たった七歳のエーシェが卒倒したのは無理からぬことだろう。

幸いなことに、エーシェは死なずに済んだ。

いや、死ぬ必要がなかった、というのが正しいだろう。

何故なら、白翼竜に害意は一切なかったからである。それは、食べようとして行ったものではなく、親しみと茶目っ気を込めた甘噛みだったのだ。

もっとも、当事者たるエーシェがそんな事情をおいそれと納得するわけもなく――養父と白翼竜は誤解を解くのに多大な時間を費やした。説得に成功しなければ、彼女は爬虫類に対して一生消えない心の傷を負ったに違いない。

そんな出来事があったせいか、それ以来、エーシェはは大多数の生物に対して物怖じする事がなくなった。感受性豊かな幼年期に、ドラゴンに喰われかけるという前代未聞にして極限の恐怖を味わってしまったため、野生動物に関する危機感の一部が弛んでしまったのである。

エーシェを真に恐がらせた生物など、後にも先にもドラゴンか、ドラゴンじみた大型爬虫類だけである。養父と白翼竜の元を離れ、冒険者として身を立てた今でも、それは変わらない。

そして、しばらくの時が流れ――エーシェは、再びその恐怖と対峙することになる。

＋

「いやいや、まったく。あの時はホント参ったわよ」

見慣れた町並みを歩きながら、エーシェは言った。

まだ二十歳には届かないだろう、年若い容姿の少女である。動きやすいように結わえた蜂蜜色の髪に、澄み渡った青空のような双眸。眉目はすらっと整っており、まるで一流の彫刻家がこさえた女神像のようだった。

白生地の法衣（クローク）に、くたびれた真紅の外套。ベルトには長騎剣（ロングソード）が固定されており、腕は篭手、足は脛当（すねあ）てでがっちり固めている。

身体は剣を振るうに相応しく鍛えられ、引き締まっているが、胸や腰には女性らしい豊かな膨らみが見て取れた。

「本人は甘噛みのつもりでも、こっちはそう思えないの。ネコとネズミみたいなもんよ。ネコは遊んでいるつもりでも、追いかけられるネズミはそう思ってないでしょ？　あれと同じよ」

そう言うと、彼女は気だるげに肩をすくめた。声色がやや憂鬱感を含んでいるのは、その時の光景を思い出しているからだろう。

歩きながら、エーシェは露店の果物売りから果実を一つ受け取り、売り子に銅貨を投げた。服で果実の表面を拭き、皮ごとかぶりつく。爽やかな酸味と滴る水分。好みの味に、陰鬱な影が洗い流される。

空は快晴。時間帯はまだ朝だが、日の位置はだいぶ高い。

雑多な人間の集う辺境都市の街路は、一日の労働を始めた人々の喧騒で賑わいを見せていた。職種も様々だ。体格の良い傭兵を相手に剣を売り込む武器商の横で、飯屋の看板娘が負けじと声を張り上げている。

「あの後、しばらく爬虫類が駄目になりかけたのよね。まあ、五年以上も一緒に暮らしていればさすがに慣れるけど……あの時は死んだって思ったわ」

果実を齧（かじ）りつつ、エーシェは言葉を続けた。口の端から垂れた果汁を舐め取る仕草は、どこか艶っぽい。本人に自覚はないだろうが。

「いや〜、先輩の過去は壮絶っスねぇ」

相槌を打ったのは隣を歩く少年だ。名をランポという。

年の頃は十五、六歳。幼さの残る顔立ち。短く刈り込んだ黒髪に、太陽の息吹が染み込んだような褐色の肌。小柄な身体を軟革鎧で固め、折りたたまれた狩猟弓を携えている。お気に入りなのか、額には色褪せた黄色のバンダナが巻かれていた。

「オイラも場数はそれなりに踏んできたつもりっスけどね。さすがにドラゴンに喰われたことはないっスよ。仕事でも遭ったことはないっスね」

まあ遭いたくもないっスが、とランポは苦笑して付け加えた。

物々しい格好をした二人の職業は、俗に言う冒険者である。国事のみに従事する騎士団では望めない軽快な行動範囲で護衛や物資の輸送、凶獣の駆除といった民間が抱える大小様々な問題の解決を収入源とする――所謂『何でも屋』だ。

冒険者は一般的にギルド所属と自由契約（フリーランス）に大別され、エーシェとランポは前者だった。二人は最西端の辺境都市・アシュランの支部に所属しており、その仕事振りは同業者の中でもかなり上位に格付けされている。

二人はしばしばチームを組む間柄だった。戦闘技術を修得したエーシェと、狩人育ちで野外

活動に長けたランポ。得物の相性は悪くない上に、若くしてギルドのトップクラスに仲間入りをした者同士、お互いに親近感を持っていたのだ。

エーシェはギルド支部に行くところだった。請け負っていた害虫駆除の依頼を完了した報告と、その報酬を受け取るためである。その途中、行き先が同じだというランポと偶然出会い、そのまま肩を並べていたのだ。

「まあ、最近はドラゴンも見かけなくなったしね。遭いたくても遭えないか」

エーシェは果実から唇を離し、空を見上げた。釣られてランポも視線を上げたるその先には雲一つない青空。それだけだった。

「養父（とー）さんが若い頃は、まだ頻繁に空を飛んでいたらしいけどね」

「今じゃ想像もつかないっスね」

ドラゴンは、エーシェ達の代で既に幻となりつつある生物だった。強力な捕食者ほど、自然界では個体数が少なくなる。食物連鎖の原則だ。これから多くの人間は、彼らの姿を見ることなく一生を終えることだろう。

個体数の減少に人間は決して無関係ではなかった。未だに繁栄を続ける人類の文明は、自然界を圧迫する。消費量が増え、生産が追いつかなくなれば、生態系の頂点に近い者達から淘汰されていくのは当然の流れだ。

「でもアレに慣れれば、野熊なんて可愛いもんよ。良かったら紹介しようか？　ドラゴンとのにらめっこは精神鍛錬になるわよ？」

「ドラゴンと比べられたら、熊が可哀想っスよ。つか、最強の肉食生物を相手に比較しても仕方ないと思うんですが。あと、鍛錬ならもっと別の方法を探すっスからご心配なく」

こめかみに脂汗を浮かべつつ、ランポはエーシェの提案を謹んで辞退した。彼女の事情を聞いた上で、ドラゴンを精神鍛錬の道具にしようなど思えるはずがない。心境的に、冬の滝壷に飛び込んだほうがまだ生存の可能性があるだろう。

「……にしても、先輩にそこまで言わせるんですから、ドラゴンってのは本当に凄い生物なんですね」

エーシェは額に縦皺を寄せ、しきりに頷いた。

「ドラゴンはヤバイ。マジでヤバイ。凡庸な人間が百人がかりで挑んだって、勝てやしないでしょうね。きっと生物としての格が違うのよ、格が。うんうん」

「いやはや、ドラゴンだけは敵に回したくないっスね」

「まったくよね」

エーシェはしみじみと呟いて、残り少なくなった果実をかじった。

ギルド支部はもう目と鼻の先だ。

「諸君、仕事だ。ワイバーンの卵を盗って来てもらいたい」
という支部支配人の言葉に、エーシェとランポは絶句した。
経理課で経費手続きをしていた時のことである。
二人は、受付嬢からギルド支部内にある応接室に向かうよう指示された。重要な依頼の話があるとのことだ。エーシェは手続きもそこそこに、ランポを連れて早足で部屋に向かう。
だが、そこに待ち構えていたのは依頼人ではなく、支部支配人のベルクートだった。
長身痩躯の白皙、怜悧な風貌の青年で、切れ長の両目が知的な輝きを放っている。全身からは氷山を思わせる静かな威厳が滲み出ており、まだ二十代後半であるにも関わらず、長く伸びた頭髪は砂糖のように白い。
ベルクートは二人を応接室に通すと、絹衣の上着を翻して、優雅な仕草で椅子に腰掛けた。その流れるような立ち振る舞いは貴族の風格を感じさせる。部屋の内装は、木製のテーブルと椅子があるだけの非常に簡素な造りだが、そんなもので彼の品位が揺らぐことはなかった。
そんな彼の第一声が、先刻の「諸君、仕事だ」である。
「あの。ワイバーン、ですか？」
ベルクートと対面の席に腰掛けたエーシェが恐る恐る尋ねた。
ちゃんと聞こえていたのだが、聞き間違いになることを信じての問い返しだ。
「詳しく言ったほうが良いかね？　竜の成り損ないと呼ばれる、飛行性大型爬虫類ワイバーンの卵を盗ってきて欲しいのだよ」
ベルクートは眉一つ動かさずに、淡々と答えた。聞き間違いではなかったようだ。おまけに補足までされていては、もう悪足掻きもできない。
エーシェは頭を抱えた。つい今しがた、トカゲには関わらないようにしようと決意したにも関わらず、いきなりこれか。これでは彼女でなくとも落ち込みたくなるというものだ。
「竜種の産卵期は春から夏にかけてだ。気温も高くなった昨今、そろそろ産卵を開始している個体もいるだろう……む。なんだね、その顔は。この依頼は不服かね？」
心境をそのまま顔に出してゲンナリとしていたエーシェに、ベルクートは訊いた。その問いかけに、彼女は渋面を作って応える。
「不服ですよ。不満ですよ。不本意ですよ。そりゃあもう完璧に、これ以上なく切実に。竜種の領域（テリトリ）に足を踏み入れたがる人間なんて、普通はいませんって」
懇願するようにエーシェは言う。
竜種とは大型の高温爬虫類の総称だ。その中で、飛行能力を有するものは飛竜と呼ばれる。会話に出てきたワイバーンも飛竜の一種だった。
竜種は総じて縄張り意識が強い。特にワイバーンは、自らの領域に侵入するものを積極的に

排除しようとする傾向があり、極めて好戦的な性格をしている。巣も険しい森の中や山岳地帯にしか作らず、近づくのは容易ではない。

そもそもワイバーン自体が危険の塊だった。

炎を吐き、鋭い爪と牙を持ち、全身は強固な鱗で覆われ、尾には猛毒の針を備える。体長は成体で十メートルを超え、しかも、その巨体が空を舞うのだ。人間が太刀打ちできる相手ではない。まして、産卵期のワイバーンともなれば、その気性は想像に難くないだろう。

「お隣さんの鶏小屋から卵をちょろまかしてくるのとは訳が違うんですよ？　ワイバーンの卵を盗るなんて危険すぎます！」

「なるほど。確かに、ワイバーンの卵を盗ってくるなど、常人には不可能だろうな。しかし、だからこその君たちなのではないかね？」

机に肘をつき、ベルクートは指を絡めた。永久凍土を思わせる冷たい視線が、エーシェの空色の瞳に突き刺さる。

「民間では容易に解決できない問題を、利用者に代わって解消するために、このギルドは存在する。だからこそ我がギルドは冒険者を優遇し、高い報酬支払っているのだよ。そんな君たちにとって『できない』というのは、自身の存在否定に他ならない。解るかね？」

エーシェは彼の言葉に反論できず、小さく呻いた。見事なまでの正論だったからだ。

事実、ギルドは人材を重んじる。冒険者を自称する者なら誰でもギルドに所属できるわけではなく、厳しい採用試験に合格し、能力、人格共に認められた真の精鋭だけが組織への加入を許されるのだ。

優秀な冒険者しか登録を認めていないだけに、仕事の質は高いが、その反面、依頼料はどうしても高額になってしまう。

それでもギルドの客足は途絶えない。何故か。それは、いくら料金が高くともギルドに依頼すれば、確実に問題を解決してくれるという魅力があるからだ。

だからこそ、ギルドにとって依頼の失敗や拒否は命取りになりかねないのである。確実性を損ねた組織に、高い料金を払って依頼をする必要はどこにも無いからだ。料金と成果が天秤で釣り合っているからこそ、ギルドという営利組織は成り立っている。

「君にこの依頼を斡旋したのは、君が適任だからだ。ドラゴンの生態を熟知した剣の達人――望むべくもない人材だと思うのだがね。おまけに狩人出身のランポがいれば、野外での活動にも差し障りはあるまい？」

「オイラはおまけっスか」

「どうかね？」

ランポの抗議を無視して、ベルクートはエーシェに尋ねる。

「正直、受けたくないです。本当に私じゃないと駄目なんですか？　私より強い人なんて他にたくさんいるでしょうに」

その言葉に、ベルクートはかぶりを振った。
「戦闘力だけを見れば、君より上位の者はこの支部にも何人かいる。だが、相手が野生動物の場合、単純な戦闘能力だけでは采配の対象ならない。担当が竜種を知っているのと知らないのでは対応に大きな差が出る。私は、君の経験と直感を評価したまでのことだよ」
人間が人間以外の生物と戦うことは難しい。筋力も違えば、反応速度も違う。何より、共通した思考や価値観を持たない生物は、人間の予想を遥かに超えた異質な動きをするからだ。
その場合、技術よりも経験や直感が物を言うケースが多い。ワイバーンが相手ならば、確かにエーシェは適材適所なのだ。幼年期、飛竜の王たるドラゴンと生活を共にした稀有な経歴の持ち主なのだから。
微妙な表情のエーシェに、ベルクートは穏やかな声音で言った。
「もう一度言うが、私は君こそが適任だと考えている。私の方からは以上だ。どうする？」
そこまで言われても、なおエーシェは煮え切らなかった。もちろん、彼女にもギルド所属の冒険者としての誇りがある。
とはいえ、大きなトカゲだけは駄目なのだ。心の奥底に残るトラウマが頑なに竜種に関わることを拒もうとする。恐怖はない。だが、関わってもロクなことがないと彼女の実体験が告げていた。しかし、依頼を放棄すれば減点になってしまう――
そんなエーシェの深い葛藤を見透かしたように、ベルクートが一つ咳払いをした。
声音を整えて、そっと囁く。
「ちなみに、報酬は金貨三枚だ」
「引き受けましょう」
エーシェは即答した。
「よろしい。では、受領書にサインを」
机の上に用意されていた羊皮紙に、エーシェは滑らかに羽ペンを走らせる。
エーシェにもう迷いはなかった。
ちなみに、金貨は一枚で銀貨十枚分の価値を持つ、現状で最高の貨幣である。庶民の生活費の相場が、一ヶ月で銀貨四枚であることを考えると、かなりの大金だ。エーシェの目が眩んだのも無理はない。
「……というか、オイラの意見は？」
始終無視され続けたランポは、待合室の隅で静かに涙を流していた。

＋

その翌日。

支度を整えたエーシェとランポは、過去にワイバーンの目撃例があるロホの山岳地帯を目指して旅立った。ギルドのあるアシュランもかなりの僻地ではあるが、ロホ山付近は完全に人の手が入っていない未開地だ。麓（ふもと）に寒村が一つあるだけで、後は文明の形跡がまるでない。

二人は途中で通りかかった馬車に便乗させてもらい、麓の村を一泊して山道に入った。その間、情報を集めるのも忘れない。

村人の話ではどうやら、ロホ山の中腹を越えた辺りに巣があるらしいとのことだ。

次の日、二人は出発に際して荷物を簡単にまとめ直した。野外活動（フィールドワーク）は動きやすい軽装の方が望ましいからだ。残りは村人に預かってもらい、帰りに取りに来ればいい。

にも関わらず、エーシェは妙に膨らんだ鞄を背負って出発した。ワイバーンの卵を採集するのが目的なのだから荷袋は必要になるだろうが、既に中身が詰まっているのはどういう料簡なのだろう。

ランポは何も言わなかった。分野は違えど、彼女も一流の冒険者である。野外活動（フィールドワーク）の定石を知った上で、あえて携帯しているのだろう。しかし、中身は気になって仕方ない。

「それ、何が入ってるんです？」

「気になる？」

「そりゃ、まあ」

じゃあ、説明しましょう――とエーシェは鞄を下ろし、封を開けた。

中から取り出されたのは、一抱えほどもある大きさの果物の殻だった。それも二つ。形状は綺麗な楕円。それに黄がかった白い塗料が塗られている。パッと見、卵そっくりだ。

「これは？」

「偽物（フェイクエッグ）の卵よ。ワイバーンも、巣から卵がなくなると、やっぱり落ち着かないと思うわけよ。それで村とか襲われちゃ問題でしょ。だから」

「ああ。すり替えるんっスね？」

「そういうこと。ま、誤魔化せるかどうか判らないけど、やらないよりマシでしょ。苦労したのよね、卵っぽくなるように色塗るあたり」

エーシェは偽物の卵を鞄にしまうと、年寄り臭い掛け声と共に背負い直した。

「それにしても暑いわね」

うんざりしながら、エーシェは呟く。

ロホ山の麓から中腹は、広葉樹で埋め尽くされた密林になっている。

季節はまだ春過ぎだが、湿気が多いためか蒸し暑い。歩き始めてまだ一時間も経っていないというのに、エーシェは汗だくだ。手で扇いでみるが、気休めにもならない。

「これはきついわ……」

暑さにも寒さにもそれなりの耐性があるエーシェだが、湿気から来るじっとりした熱気だけは苦手としていた。暑さの質が違うからだ。

とはいえ、いくら汗が不快でも上着を脱ぐのは命取りにしかならない。林の中はやたらと蚊が飛んでいる。虫刺され自体はそう深刻な問題ではないが、病気を媒介していた場合が面倒なのだ。また、毒蜘蛛や蜂などに刺される危険性も考慮のうちだった。

「にしても、誰がこんな戯(たわ)けた依頼を寄越してきたんですかね？」

先行して、山鉈(マチェット)を片手に道を切り開いていたランポが言う。

冒険者にとって秘境の開拓は基本技能だ。一般人では迷った挙句に野垂れ死んでしまうような密林でも、彼女達にかかれば『少々視界の悪い森』でしかない。

特にランポは狩人の出身だ。山道や森林の踏破にかけてはエーシェよりも数段心得ている。足跡からここら一帯の動物の種類を見抜き、獣道を避け、山鉈(マチェット)で枝を薙いでは歩き易いように道を拓いて行く。

「お貴族様に決まってるじゃない。あれ？　気付いてなかったの？」

ランポと同様に山鉈(マチェット)を振るいながら、エーシェが気だるげ答える。

姿を見せない依頼人。代理は支配人(マネージャー)。目的の見えない依頼内容。破格の報酬。それらの情報からエーシェは依頼人に目星を付けていた。

「貴族？」

山鉈(マチェット)を振るのを止めて、ランポが振り返った。エーシェ同様、汗が滝のように流れている。狩人とはいえ、そればかりはどうしようもないようだ。

「そ。まあ、どこの誰かまでは特定できないけどね」

ギルドが発足して以来、この組織を特権階級の人間は大いに活用した。

害獣駆除であれ盗賊団の討伐であれ、金さえ払えば領民の不満を解消できる。加えて、彼らが保有する私設軍への被害は一切ない。仮に失敗したとしても、ギルド側から補償が受けられるのだから、利用しない筈がないのだ。

唯一の難問がその依頼料の高さだが――貴族とは、往々にして金だけは持っている人種なのである。難問は難問足りえなかった。

加えて、ギルドと貴族は切っても切り離せない関係にある。組織の基金はギルド本部がある領地一帯を統治する辺境伯の寄付によるものだからだ。貴族の依頼が不遇に扱われたとなれば、経済援助者(パトロン)たる辺境伯の面目に傷がつく可能性がある。

よって、支配人(マネージャー)の指示の元、登録冒険者は理不尽を感じながらも、時に貴族の為に働かなくてはならないのだ。

「まあ、依頼料自体は良いんだし、ギルド的に儲かるんでしょうけど……ちょっとは派遣される方の身にもなって欲しいわよね。ワイバーンの卵を盗って来いなんて、やってられないわよ」

「……金で釣られた人がよく言うっスね」

「――何か言った？」

ぞわり、と悪寒がランポの背筋を駆け抜けた。

密林は蒸して、汗がダラダラ出るくらい暑い筈なのに、何故かそれを感じない。代わりに場違いな寒気が徐々に背中を駆け上がってくる。

エーシェは微笑んでいた。花が咲いたような可憐な笑みだ。その手に、鈍く銀色に輝く山鉈（マチェット）さえ握っていなければ。

「……って、っていうか、ワイバーンの卵なんて何に使うんっスかね？」

ランポは慌てて前を向き、道を拓きつつ話題を逸らした。すると、エーシェは呆れ顔になって応える。

「あんたは普段、卵をどうするの？　被（かぶ）るの？　それとも穿（は）く？」

「やっぱり、食用なんっスね」

予想通りの答えが返ってきて、ランポは表情をゲンナリさせた。彼とて生粋の狩人だ。これまでに様々なものを食べてきたが、それでも爬虫類の卵となると最早ゲテモノ食いの領域だと思う。背に腹は変えられないが、それでもあまりいい気分はしないだろう。

「かなりの珍味らしいわよ。残念ながら、私は食べたことはないけど。あ、知り合いの薬術師（やくじゅつし）に言わせれば、長寿の妙薬にもなるらしいわよ。眉唾だけど、案外そっちかも」

「どっちにしろ、貴族の道楽ってことっスね」

道楽に命を賭けることになった、やるせない思いを山鉈（マチェット）に込め、二人はどんどん密林の奥へ踏み込んで行った。

その時、梢の隙間から覗く青空がふと陰った。二人の遥か頭上を、巨大な影が轟音を伴って通過したのだ。間髪入れず、もう一度。それに遅れること数秒、清涼な風が密林の隙間を吹き抜けていく。

「……今の見た？」

いつになく真剣な声で、エーシェ。

「はい」

「一体はワイバーンだったよね。先行していった青いのは？」

「ドレイクっスね。後ろに比べて、かなり小柄でした。間違いないっス」

ランポの動体視力は卓越している。いわゆる鷹の目という奴だ。彼の鋭い眼光は、通り過ぎて行った影を確実に捉えていた。

「ロホ山にはドレイクもいるのね」

ドレイクは飛竜の中で一番の小型種である。

体長は大きいものでも六メートル。青色の竜鱗は矢で貫けるほど薄く、火袋も毒針も持っていないので、ワイバーンと比べて危険度はがくんと下がる。外見は竜というよりも鳥に近く、ワイバーンとは似ても似つかない。

ドレイクならば、襲われても何とかできる。その自信がエーシェにはあった。しかし、依頼はあくまでワイバーン。しかも討伐ではなく、厄介なことに卵の採取だ。

「……でもまあ、ドレイクの卵を盗って来いって依頼よりマシかなぁ」
「ああ。『ドレイクの空白』っスか？」
「お。さっすが狩人。そーなのよね。あいつら、卵生かどうかも分かってないし」
ドレイクの成長過程には妙な空白がある。元々、竜種は危険の象徴ということもあり、生態情報はあまり集められていないのだが、中でもドレイクはその際たるものだった。
特筆すべきは巣と卵だ。現在、人間はドレイクの巣と卵、そして雛を育てる親竜の姿を目撃したことがない。それ故に、ドレイクがどのような巣を持ち、どのような卵を産み、どのように雛を育てるのか、まったく知られていなかった。
その成長過程における空白を、『ドレイクの空白』と呼ぶ。
「手に入れるのにとても苦労するっていうのは、ドレイクでもワイバーンでも同じっスけど」
「だったら、少なくとも実物があるほうに挑むのほうが堅実ってもんか。ま、頼まれた仕事をきちっと要求通りに仕上げるのも一流の勤めだしね。さて、腹も括ったことだし、先を急ぎましょうか！」
彼の背中を叩き、エーシェは山鉈（マチェット）を振りかざす。後はもう進むだけだ。

＋

それから数時間が過ぎ――密林を抜け、傾斜を登り、辿り着いた小高い丘の向こうで、二人は目的のものを見つけた。
岩のくぼみに敷き詰められた木の枝。その上に、濃い緑色の鱗で覆われた巨大な爬虫類が、翼を畳んでとぐろを巻いている。堅牢な外皮とは裏腹に、いたって柔らかそうな腹部で温められる、白い楕円形が見て取れた。
間違いない、ワイバーンだ。
「いるもんだねぇ」
近くの茂みに身を潜め、声を落としてエーシェが囁いた。
全身がピリピリと緊張する。眷属とはいえ、竜の名に連なる存在の間近にいることで、過去の記憶が彼女の神経を圧迫しているのだろう。
幸いなことに、近くに雄（おす）の姿はない。雌（めす）飛竜が黙って卵を温めているだけだ。
これはチャンスだ。
「どうします。戦いますか？」
折りたたみ式の弓を展開させながら、ランポが言う。その手際は素早く正確で、さすが狩人といったところだろう。
束の間、エーシェは黙考した。

まともにやり合うには危険すぎる相手だが、勝てる要素がまったくない訳ではない。どんな生物でも、急所をつけば倒すことができる。ワイバーンといえど、それは変わらない。

しかし、あのように巣に陣取った状態で下手に攻撃すれば、卵に被害が出る可能性がある。卵を採取するのが目的である以上、万が一を考慮する必要があった。

「……二手に分かれましょう。ランポは陽動。弓で攻撃を仕掛けてワイバーンを威嚇。巣から引き離して。その間に、私が卵を盗ってくるわ」

それがエーシェの結論だった。

「……なんか、オイラだけ危険じゃないですか？」

「世間的に、身体を張るのは男の役目でしょ。ここは大人しく尻に敷かれておきなさい。期待しているわよ」

にっこり笑って片目を瞑る。

これでやる気が出てしまうのだから、つくづく男という生き物は単純である。

＋

巣に近付く足音に気付いたワイバーンが、その巌（いわお）のような顔を上げる。

視線の先には、背丈が二メートルにも満たない二足歩行型哺乳類が立っていた。体長がその六倍近い彼女にとって、その姿はあまりにも矮小で無力に映る。

人間――ランポは、相対距離で二十メートルの地点まで近付くと、背中の矢筒から一本矢を取り出して弓に番えた。引き絞られる弦。少しも揺るがぬその眼差し。殺意を宿した鋭い鏃（やじり）は、飛び立つのを今か今かと待ち望んでいるかのように静謐に輝いていた。

「覚悟しな――オイラはお前を狩る者だ」

そう告げ、殺意が放たれる。

大気の金切り声。矢は、二十メートルの距離を一瞬で無力化し、乾いた音を立てて飛竜の皮膚に突き刺さった。

ワイバーンの瞳が細められる。僅かに燻る憎悪の灯火。

立て続けに、ランポは矢を放つ。二発。三発。四発。

ランポの放つ矢は、どれも分厚い鱗に阻まれ肉まで食い込まない。せいぜい、僅かに血が滲む程度だ。

ワイバーンは実質的に無傷だったが、そう何度も何度も矢を突き立てられるとさすがに鬱陶しくなる。加えて、彼女は卵のことで気が立っていた。すぐに立ち去るなら見逃してやろうと思っていたのに、なんと愚かしい猿なのだろう。矢など効かないと理解できないのだろうか。

「ほら、そろそろウザくなってきただろ？　良いんだぜ、我慢しなくても」

ランポは不敵な笑みを浮かべ、五本目の矢を番えた。狩る者と狩られる者の視線が静かに交差する。ワイバーンがゆっくり身を起こし、ランポの弦が一掃引き絞られ――

「来いっ！」

それを引き金にワイバーンが駆け出した。同時に、五本目の矢が額に突き刺さる。が、飛竜は歯牙にもかけずにランポ目掛けて突っ込んでくる。。

「だあああああ、畜生！　おっかねぇなぁ、まったくッ！」

すぐさま踵を返して逃げ出すランポ。不敵の仮面をかなぐり捨て、泣きそうな顔で全力疾走する。そのギャップが、なんとも情けなかった。

なんにせよ陽動は成功だ。問題は、怒りに燃えるワイバーンをどうやってやり過ごすかだが……まともな方法では駄目だろう。ただ走っているだけではいずれ追いつかれ、あの鋭い牙で襤褸々々の肉片に変えられてしまう。

「ええい――我思う故に我あり！」

走りながら、ランポは奥の手を口にした。

それは詞。それは口訣。

人間の深層意識でまどろむ神剣機関を叩き起こし、自らの精神を接続する為の自己暗示――即ち、呪文詠唱だ。

それを機言に、ランポのちっぽけな自意識は真我の海に飛び込んだ。そこは自己という殻を融解する強酸の大海。荒れ狂う波のうねりに身を焦がされながらも、彼の意識は海底を目指して奔り、疾り、走り続けて――やがて一つの歯車に辿り着く。

精神の奥底で異形の歯車が動き出した。軋みを上げ、石臼を挽くように鈍重に、けれど着実に神剣機関が流転り、車輪る。

「世界よ、事象の支配者が命じる！　神意に従い摂理の歯車を廻せ！」

紡がれる言の葉。それに応じるように、空間はランポに服従し、隷属し、支配された。

「我が求めは迅雷――【武御雷】！」

その詞を世界が忠実に反映した。事象が螺旋禍がり、有り得ざる現象が発芽する。

ランポの指先から、ワイバーンに墓標の如く突き刺さった五本の矢に向かって、まるで吸い込まれるように紫電が走った。

炸裂。雷鳴。

瞬間、ワイバーンは悍しい絶叫を噴き上げながら大きく仰け反った。バランスを崩し、無様に地面に倒れ込む。それでも慣性は止まらず、赤土を削り取りながら運動エネルギーが尽きるまで転がり続けた。

転倒はワイバーンの不随意運動、つまり痙攣が原因だ。

ランポが放った紫電は避雷針の役目を果たした矢を伝って、頑強な鱗を素通りして神経系に電流を加えた。その結果、不意打ちの感電に全身が痙攣し、均衡を崩して転倒したのだ。

しかし、竜種が相手では、この程度の攻撃は致命傷にはならない。せいぜい数分間、身体の自由を奪うだけだろう。

「いやまあ、命があるだけマシってことで」

ちゃっかり突進を避けていたランポが、未だに起き上がれないワイバーンの姿を見て、安堵の息を吐く。

役目は果たした。後はエーシェの仕事だ。

ワイバーンがランポに向かって突進したのと同時に、エーシェは茂みから飛び出した。荷物を抱えているにも関わらず、素早い身のこなし。瞬く間に巣との距離をゼロにする。

巣には直径二十センチほどの、やや黄ばんだ白い卵が三つ置かれていた。

意外にも、卵の大きさがまちまちだ。

偽物の卵（フェイクエッグ）に比べて大振りが一つ、やや小振りなのが二つという組み合わせ。もしかしたら、生まれてくる雛の性別で大きさが違うのかもしれない。竜種の生態は未知の部分が多いので、可能性としては十分有り得ることだ。

その時、後方で激しい地鳴りが響いた。どうやらランポが何か仕出（しで）かしたらしい。

恐らくは放電系の魔法を使ったのだろう、とエーシェは察した。自分ならそうするからだ。生半可な熱や冷気では竜の鱗は突破できない。使うとすれば、直に神経に訴えかける稲妻だ。

今のところ陽動は成功しているようだが、いつ回復するかわからない。エーシェはそそくさと背負っていた鞄を下ろし、詰め込んでいた中身を取り出した。

「ちょっと可哀想だけど……ごめんね」

心底申し訳ないと思いつつ、エーシェは小振りの卵と偽物の卵（フェイクエッグ）をすり替えた。大きい方だと鞄に二つ入りきらないからだ。

卵同士の接触で殻が割れないように布を幾重にも巻き、鞄に詰め込む。

余裕のある荷袋を選んだつもりだが、容量はギリギリだった。背負うとずっしり重い。当然だが、中身がスカスカの偽物の卵（フェイクエッグ）とは重みが違う。

「これを背負って、山を降りるのね……」

何とか作戦は成功したものの、帰りの徒労に嫌気が差してくるエーシェだった。濃厚な重みが鞄の肩掛けから伝わってくる。これを背負っての下山は疲れそうだ。いざとなったらランポに持たせよう。そう決めた。

その刹那、エーシェの全身に緊張が走る。

脊髄に氷でも捻じ込まれたかのような悪寒。どこからか鋭い殺気を感じる。一体どこから。

それに、この胸が締め付けられるような圧迫感は、間違いない。恐怖だ。久しく感じることのなかった感情が、彼女を動揺させた。

足元を巨大な影が横切り、はっと頭上を見る。そこにいた。翼を広げ、大気を泳ぐように滑空してくる巨大な影が。

雄のワイバーンだ。

その姿には見覚えがあった。密林で頭上を通り過ぎた、あの個体だ。どうやら向こうで伸びている雌の番（つがい）だったようだ。

「怒ってるよね、やっぱり……」

こめかみから脂汗が一筋流れ落ちる。

伴侶に狼藉（ろうぜき）を働き、巣を蹂躙（じゅうりん）し、あまつさえ卵を持ち去ろうというのだ。怒っていない道理がない。

などと考えている間に、ワイバーンはエーシェの真上まで近付いた。その羽撃（はば）たきによって巻き上がる砂塵と暴風。さながら台風の如き暴力だ。

エーシェは踏ん張って風圧に耐える。このまま仰向けに倒れてしまったら、背中の卵が割れかねない。倒れるわけにはいかなかった。しかし、荒れ狂う風の暴力に立ち向かうには絶対的に体重が足りない。彼女は腰の鞘から長騎剣（ロングソード）を抜くと、地面に突き立てて楔にした。

だが、それもいつまで持つか。

「くそったれ！」

エーシェの瞳が蒼輝を放った。

「我思う故に我あり（コギト・エルゴ・スム）」

紡がれる詞（コトバ）。覚醒する神剣機関（エインセル・エンジン）。

刹那――世界は主導権をエーシェに明け渡し、従属し、隷属する。事象は螺旋禍（ねじま）がり、彼女こそが律法となった。

分子運動制御。暴風は彼女を避けて流れ、無為の方向で四散する。その支配力はランポの比ではなかった。いや、そもそも支配という言葉さえ不適切だ。今や、彼女の意思こそが秩序なのだから。

ワイバーンは地に降りると、おもむろに顎を開放した。火炎袋と呼ばれる生体器官から精製、噴出される高濃度のメタンガスが発火器官を通じて引火。高温の火炎放射となってエーシェに襲い掛かる。

「我が求めは」

詠唱が終わる前に事象が変異した。エーシェを覆う空気層のエネルギーが略奪された。急激に分子の振動が減速させられたことによって生じた低温の大気が障壁（ダイヤモンドダスト）となり、火炎の熱を全て拡散させてしまう。

気流を制御し、大気中の熱量までも自在に操作する。そんな圧倒的な能力を見せ付けたエーシェは虚ろな眼差しをしていた。まるで、世界の全てを見通すような――

「先輩！」

声と共に飛来した矢が、ワイバーンの目を深々と射抜いた。堪らず絶叫する飛竜。その隙に、ランポが駆け寄ってきた。
「先輩！」
後輩の声に、ハッと息を呑む。エーシェの瞳に正気が戻った。
「先輩ってば！　今のうちに逃げるっスよ！」
「――え……あ、うん」
エーシェは神剣機関（エインセル・エンジン）の回転数を徐々に落とす。世界の拘束は解（と）かれ、異常は正常の前に駆逐されて行った。
それを確認する前に、二人は走り出す。
密林まで逃げれば、ワイバーンは追って来られないだろう。

＋

「いや、何とかなったわね」
拓いた道を駆け戻りながら、エーシェは言った。
「雄が戻ってきた時はヒヤヒヤしたっスよ。でも、良かったっス。無事に帰れて」
「しばらく、あの地域には近づけないわね。問答無用で食い殺されるわ」
卵を盗まれたとはいえ、麓に降りて無関係な人間に報復する智恵など、彼らは持ち合わせていまい。そのための偽物の卵（フェイクエッグ）だ。とはいえ、人間に対してある種の警戒心が芽生えたのは間違いないだろう。触らぬ神に祟りなし、である。
「ふっふっふ。これで金三枚よ、金三枚。何買おうかなぁ……」
うっとりと妄想の世界に旅立つエーシェ。それに乱歩は釘を刺す。
「分け前、忘れないでくださいよ」
「もちろんよ。あんたがしっかり陽動してくれたから上手く行ったようなもんだしね。ありがとね、ランポ。助かったよ」
「……にしても、鞄の膨らみから見るに、ワイバーンの卵って意外と小さいんっスね」
褒められて照れたのか、ランポは頬を掻きながら話題を逸らした。
「そうかな？」
「いや、予想よりはって程度なんっスけどね」
「どうも個体差があるみたいでね。卵の大きさがバラバラだったんだよ。これより一回り大きい卵もあったんだけどね。リュックに入らなかったから、小さいのにしたの」
そこで何かに感づいたのか、ランポは眉をひそめた。
「どうしたの？」

「あの、鞄が動いたんっスけど……」
その言葉に、エーシェは硬直する。
慌てて鞄を地面に下ろし、中から卵を取り出した。乱雑に巻かれた布の下、卵殻には大きな罅が入っていた。
間違いない。孵化が始まっている。
「ど、どうしようかっ？」
まさか孵化するとは思ってもみなかった。エーシェは助けを求めるようにランポを見るが、彼もどうしていいか分からず首を振る。その間にも、中の雛は必死に殻を押し破ろうともがいていた。
生まれてこようとしている命を否定するわけにもいかない。二人は手を出さず、じっと卵の行く末を見守った。
そして数分後。殻を押し退けて現れたのは、
『あれ？』
ワイバーンの雛――ではなかった。
鳥のような尖った嘴。仔犬よりもちょっと大きいくらいの体。青っぽい、まだ鱗が生える前の剥き出しの皮膚に、濡れぼそった一対の翼。
これは、
「……ドレイクの雛？」
生まれてきたのは、ワイバーンではなくドレイクの雛だった。トカゲではなく、むしろ鳥に近い顔立ちがその証拠だ。
しかし、何故？　ちゃんとワイバーンの巣から盗んだのに？
二人は呆然とする。そして、降って湧いた疑問に揃って首を傾げた。
「ああ、もしかして」
エーシェの脳裏に、ある仮説が浮かんだ。
もしかして、ドレイクの卵が見つからないのは、ワイバーンの巣に卵を産み落とすからではないのか？
そして、ドレイクが子育てをしないのは、そのまま孵化した雛を、ワイバーンが自分の仔として育てるからではないのか？
つまり、ドレイクには鳥類でいうところの托卵（たくらん）のような習性があるのではないか？
「辻褄は、合うわね」
エーシェはうわ言のように呟く。
思い返してみれば、サイズが一回りも違うのは明らかな不自然だった。色や形は同じだったとしても、同じ母体から生まれた卵の大きさがそう変化するとは思えない。あの時は、何だか適当な理由をつけて考えないようにしていたが、冷静になってみれば確かに可笑（おか）しい。

そこまで考え、エーシェはさらに絶望した。彼女が回収してきたのは、巣にあった三つの内、小さい二つだった。

つまり、もう一つの方もドレイクである可能性が高い。

いや、そうでなくても孵化直前の卵を献上するのはどうだろうか。調理する方も、食べる方も多大なショックを受けやしないだろうか。

いやいや、とエーシェは首を振った。

（そもそも鶏の卵とは違うって分かり切っているじゃない。そう、きっと竜の卵を食べることに意味があるのよ。だから、卵を割った瞬間、どろどろの竜の成りかけが出てきたとしても、きっとお貴族様は食べるわ。頭から。よし、おっけい。これでいこう）

エーシェは脳内で好き勝手に理由を捏造し、晴れやかな笑顔をランポに向けた。

生まれたばかりの雛を優しく抱え、そそくさと下山を再開する。

「ワイバーンの卵は手に入ったわ！　さあ、帰りましょう！」

「あ、あの。いいんっスか、これで？」

不安げなランポに、彼女は根拠のない笑顔を向けた。

「いいの。これはワイバーンの卵。そうでしょう？」

「ですが……」

「大丈夫よ。私たちが何も言わない限り、空白は守られるから。それとも、ランポはあそこに戻りたいのかしら？」

エーシェは山の頂を指差した。ランポは遠い目をして首を振る。

「……ですね。世の中には空白のままでいいこともありますから」

そして、二人は何事もなかったかのように下山を始めた。

時折聞こえてくる、ワイバーンの叫び声に耳を塞ぎながら。

余談だが。

やはり若干の負い目はあるのか、エーシェはこの依頼を終えてからというもの、苦情の報告が来ないか冷や冷やしていたという。

至福の一時というのは誰にでも存在する。

食事や睡眠、異性との交際や趣味に徹する時間。種類は多岐に渡り、上辺だけを見ても枚挙に遑がない。嗜好は人間の数だけ存在し、形もその時々で変化する。だが、その大半は種の三大欲求に根ざしたものがほとんどであろう。

その意味で、彼女の嗜好は非常に少数派であると言えた。場合によっては高尚と捉える事ができるかもしれないが、それは少なくとも今ではない。

「――ふふ」

倉庫を思わせる薄暗い店内で、エーシェは艶やかに微笑んでいた。

腰まで届く蜂蜜色の長髪。ほっそりした顔立ちに深く澄んだ空色の双眸。白い法衣の上から真紅の外套を羽織り、腕は篭手、足元は脛当てできっちり固めている。

ここまではいつも通りの出で立ちだったが、腰のベルトには何故か愛剣が掛かっておらず、鞘だけが所在なさげに吊られていた。

女だてらに冒険者などという荒っぽい仕事に就いているせいか、エーシェの腕や足は同年代の少女に比べてかなり引き締まっている。それでいて胸や腰は平均以上の膨らみを帯び、容姿にまるで隙が無い。その美貌と装備の物々しさを鑑みるに、正に戦女神と呼ぶに相応しい姿であった。

眉目の整った容貌には、我が子を慈しむ聖母のような笑みが浮かんでいる。全てを容認して受け入れる、限りない母性の微笑み。ただし、その腕に優しく抱かれているのは生後間もない赤子ではなく、洗練された一本の刀剣だったが。

「うふ、ふふふ……！」

艶かしい呼気。エーシェは剣の柄を優しく握り締め、覗き込むようになだらかな刀身に視線を這わせた。頬は種に染まり、瞳は潤んでとろんとしている。その虹彩に灯る喜悦の色彩は、何かに魅了された者が見せる輝きだ。

確かにそれは、見る者の美感を刺激する一振りだったかもしれない。

あくまで滑らかな刀身。緩やかに反った独特のライン。研ぎ澄まされた鋭い刃先には、どこか官能的な匂いが漂っている。機能美と装飾美が渾然と織り成すその外観は、専門的な知識を擁せずとも、素直に美しいと感じ取れる器量を備えていた。

エーシェは、鏡のように磨かれた刃の側面を指先で撫で、うっとりと息を吐く。

「あぁ……堪らないわ。この輝き、この波紋、この反り具合。やっぱり剣って最高よね。無骨で不細工な戦鎚や実用性だけが取り柄の槍なんかと違って、力強さの中にも気品と威厳を兼ね備えているっていうか……正に武器の王様と呼ぶに相応しいわよね！」

宙に剣を掲げ、エーシェは感極まったように嬌声を上げた。彼女の精神状態は、煌びやかな衣服や宝石の虜となった女性のそれと何ら変わらない。ただ、その対象がちょっとばかり特異すぎるのではなかろうか。

その様子を数歩離れて見守る、奇異の眼差しがあった。仕事仲間であるランポのものだ。

やや低めの背丈に、短く刈り込んだ黒髪と褐色の肌。使い古された軟革鎧（ソフトレザー）に身を包み、額には色褪せた黄色のバンダナを巻いている。

彼はエーシェの痴態を見て、申し訳ないと思いつつも、思い切り引いていた。

無理もあるまい。腕利きの冒険者とはいえ、年若い乙女が武器に欲情する姿など、一体誰が想像できるだろう。なまじ、エーシェを先達として尊敬していただけに、その落差（ギャップ）は凄まじいものだったに違いない。正に夢が壊れた瞬間だった。

「……オイラ、先輩がそこまで武器フェチだなんて知りませんでした」

何の躊躇いもなく剣に頬擦りし始めたエーシェに半ば戦慄しながら、ランポは言う。

「失礼ね。武器フェチじゃないわ、剣フェチよ」

「フェチの部分は否定しないんっスね」

こめかみに脂汗を浮かべるランポ。が、エーシェはそんな反応には目もくれず、剣への求愛を続行していた。さっきから、ずっとこの調子だ。

何かと依頼の絶えない冒険者ギルドにも、ちゃんと休日というものはある。仕事の質を維持する為に、職員には決まった日数の休暇が与えられるのだ。余暇は組織を円滑に運営するには欠かせない潤滑油なのである。

そんな休暇中の朝、エーシェとランポは馴染みの武器屋を訪れていた。

冒険者と武具は、切っても切り離せない関係にある。余暇を使って得物の手入れをするのは彼女たちの習慣であり義務だ。

武器の基本的な整備技術自体は二人とも身に付けていたが、時間が取れるなら専門家に診てもらうのが一番だと判断し、武器屋の門を叩いたのである。エーシェの腰に長騎剣（ロングソード）が掛かっていないのはそういう理由だったのだ。

二人がやって来たブルムベア刀剣工房は武具の製造と販売、そして点検を一手に引き受けるギルドの契約商店である。大小様々な武器が所狭しと並べられ、まるで物置の様に雑多な店構えをしているが、品揃えや手入れの丁寧さは歴代冒険者のお墨付きだ。

そして、その待ち時間。ランポは展示してある武器に身悶えるエーシェの意外な実態を目撃した――否、してしまったというわけだ。

「はぁ……もうダメ。指で刃先をなぞるだけで腰が砕けそう」

段々と発言が娼婦じみてきたエーシェ。ちなみにさっきから彼女が離さないのは、この工房で最も高価な一振りだった。値段に釣り合った文句なしの一品なのだが、彼女の財布ではとても買えない。まあ、だからこその妄執であるかも知れないが。

「いやはや、何と言うか。もはや変態の領域としか言いようが……って、あ、いや」
不味い。
つい本音が出てしまった、と思った時にはもう遅い。エーシェは常人では捕捉不可能な速度で身を翻し、ランポの喉元に剣を突きつけた。皮に接触する数ミリ手前で、切っ先が鋭い銀光を放つ。
「店長、ちょっと試し切りしてもいい？」
先刻とは一変して爽やかな笑みを浮かべたエーシェは、店の奥で長騎剣（ロングソード）を研磨している老店主に問いかけた。その間も剣はランポに向けられたままだったが、切っ先は微塵も動かない。鍛え抜かれた握力と膂力（りょりょく）が可能にした緻密な肢体制御は、積み重ねた努力の賜物である。
ちなみに店主の言葉は、
「死体はちゃんと片付けてくれよ、お嬢」
それだけだった。
「ちょっと待てぃ！」
ランポは世界の不条理に吼えた。吼えずにいられなかった。何故自分は剣を向けられているのだろう。ただ、正直に感想を述べただけなのに。
「刀は切れればいいのではない。悪を切らずに遠ざけるのが名刀なのだ」
急に真面目な口調になって名刀の条件を語り出すエーシェ。
「じゃあ、切っ先をこっちに向けないでくださいよ！」
「でも、私は切れ味が良い方が好き」
「ワケわかんねぇぇぇぇ！」
もう何がなんだか。
と、そこへ。
「――ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
愛らしい、少女の声が響いた。
「……ルクレール？」
エーシェは訝しげに視線を巡らせた。声は店の外からのようだ。耳を澄ませば、甲高い女声が徐々に近付いていることが聞き取れる。
そして音量が最高潮になった時、蝶番が壊れるのではないかと思わせる激しさで、工房の扉が開け放たれる。さすがに二人も驚き、入り口の方を見やった。
「えぇぇぇぇしぇちゃぁぁぁぁぁん！」
街路の砂塵を伴って飛び込んで来た小柄な人影。黒を基調にしたフリフリの衣装に身を包んだ十三歳くらいの女の子だ。喜色満面の表情でエーシェの名前を呼び、赤毛のツインテールを振り乱して店内に突入してくる。
「見ぃぃぃつけたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

と、元気良く叫びながら、女の子はエーシェの豊満な胸を目掛けて飛び込んだ――が、よく照準を定めずに跳躍した為か、その華奢な身体は彼女ではなく、その隣に立つランポの鳩尾（みぞおち）に吸い込まれた。

「ぶぼぁっ！」

情けない悲鳴を上げてランポは撃沈、床に仰臥（ぎょうが）する。

「あれ？　エーシェちゃんがランポちゃんになっちゃった？」

ランポの屍に馬乗りになりつつ、少女は愛らしく小首を傾げる。

「ランポちゃんはエーシェちゃんだったの？」

「そんなわけないでしょ」

「あ、エーシェちゃん！　今度こそ見っけ！」

女の子は呆れ顔で見下ろすエーシェを指差して笑った。日向（ひなた）の花がほころんだような微笑みは、こちらも笑顔で返したくなるほど輝いていたが、自分の代わりに犠牲になった同僚を思うと素直に笑えなかった。

「ルクレール、どうして貴女がこんなところに？　あ、いや。その前にランポからどいてあげなさい。圧死しちゃうから」

「む～、ルクレは羽みたいに軽いもん。ランポちゃんが軟弱なだけだもん」

突然乱入してきた女の子――ルクレールは頬をぷくっと膨らませて抗議するが、少しは自分に非があることを自覚しているのか、それ以上は文句も言わず、ランポの上から降りた。

「ランポ、生きてる？」

エーシェはしゃがみこんで、ランポの頬を叩く。

「……ええ、まあ。なんとか」

ダメージが相当深いのか、重病人とも思えるほどの遅さでランポは身を起こす。軟革鎧（ソフトレザー）の上からでもかなり効いた。あの頭突きは戦鎚（ウォーハンマー）並の威力だ。

「あたた……本気で死ぬかと思ったっス。ところで、受付嬢がなんでこんなところに？」

鳩尾の辺りを摩りつつ、ランポはルクレールに尋ねた。

彼女は二人が所属するアシュラン支部の受付を担当する職員である。愛らしい容姿と快活（かいかつ）な言動から『受付嬢』の愛称で慕われる看板娘だ。支部支配人（ギルドマネージャー）たるベルクートほどの権限は持ち合わせていないが、冒険者への依頼斡旋も任されている。緊急や秘匿の仕事は支配人（マネージャー）が直々に采配を振るうが、普段の仕事は彼女から請け負うものがほとんどだった。

「あのね、ベルクート様から、エーシェちゃんを呼んでこいって頼まれたの。どうせ武器屋にいるから引っ張ってでも連れて来いって」

にこにこ顔でルクレールは言った。自分で気付いているのかいないのか、支部支配人（ギルドマネージャー）の部分にかなりアクセントが掛かっている。もっとも、これは周知の事実なので、エーシェも余計な詮索はしないのだが。

「行動が読まれてるっスね、先輩」
ランポは失笑するが、エーシェに睨まれ口を噤(つぐ)む。
「何の用か聞いてないの？　見ての通り、私は休暇中なんだけど」
「ん～、ルクレにはちょっと分からないけど、ベルクート様のことだし、きっと凡人には理解できない深遠なお考えがあるんだよ。だから、一緒に来て」
ないない。そんなのない、とエーシェは手をヒラヒラさせる。
「なーんで私が、休日までベルクートに会わなきゃなきゃなんないのよ。パスよ、パス。明日は出頭するからって伝えて」
幸せな一時を壊された腹いせか、ぶっきら棒な態度でルクレールに言った。彼女は暫し笑顔のままだったが、徐々に言葉の意味を理解し始めると、顔をくしゃくしゃに歪ませた。
「ベルクート様に連れて来いって言われたの。言われたの！」
「う……」
いたいけな瞳でじっと見つめられ、たじろぐエーシェ。まったく痛む必要のない良心が鈍痛を訴え、情が激しく揺さぶられる。恐らく、あの計算高い支部支配人(ギルドマネージャー)は彼女の性格を見越してルクレールを向かわせたのだろう。だとしたら、末恐ろしい男だ。
長い葛藤の果て、結局根負けしたのはエーシェの方だった。
「……はいはい、解ったわよ。どっちにしろ、剣の手入れが終わるまでは待ち惚(ぼう)けだし、用件くらいは聞いてあげましょうかね」
「ほんと？　だからエーシェちゃん、大好き！」
その途端、ルクレールの表情に笑顔が戻った。日陰で萎れていた花が、光を浴びて元気になる様子はきっとこんな感じに違いない。不覚にも、ルクレールの笑顔に胸を衝(つ)かれてしまったエーシェである。
くそう。ベルクートの奴。覚えてろよ――と心の中でメンチを切ったが、果たしてあの冷徹な青年に効果があるかどうか。くしゃみでもしていれば良いのだが。
「やれやれ」
一度公言してしまった以上、ギルド支部に向かわねばなるまい。エーシェは一つ溜息を吐くと、埃を払って腰を上げた。
彼女は愛用の長騎剣(ロングソード)以外にも、予備の小太刀(ショートソード)や投擲用の短剣類も店主に預けてある。事実、全てを研ぎ終わるにはまだまだ時間が掛かりそうだった。
「というわけなんで、ちょっとギルドの方に顔出してきます」
一応、エーシェは奥の老店主に声をかけておいた。
「おう。剣、忘れずに取りに来いよ？」
「もちろんですよ」
「あ、ついでだからランポちゃんも来る？」

手持ち無沙汰になったランポに、ルクレールは尋ねた。しかし、真実、おまけのような口調で言われたことに彼は深く傷つき、はらはらと涙した。
「……やっぱり、オイラはついでなんっスね。まあ良いですけど。あ。あと、先輩。その剣は置いて行った方がいいっスよ。いや、マジで」
手に握られたままの剣を指摘され、エーシェは誤魔化すように口笛を吹いた。

＋

辺境都市アシュランの街路に建設された、冒険者ギルド支部の一室。簡素な机と椅子が置いてあるだけの応接室に、支部支配人（ギルドマネージャー）であるベルクートが優雅に佇んでいた。
長身痩躯の怜悧な風貌。知的な輝きを見せる黄金の瞳と砂糖のように白い髪が特徴的な美青年だ。金の刺繍が入った絹衣を纏った姿は一種の神々しさを漂わせており、彼がそこに在るだけで粗末な応接室が、まるで豪奢な宮殿のように美化される。
そんな応接室に渇いた音が二回響いた。誰かがドアをノックする音だ。
「入りたまえ」
雄大な氷山を思わせる威厳ある声に促され、応接室のドアが静かに開いた。入ってきたのはルクレール、エーシェ、ランポの三人だ。
「ベルクート様。エーシェちゃんとランポちゃんをお連れしました」
ルクレールは深々と頭を下げ、報告した。名詞のちゃん付けは相変わらずだが、声音は幼い感じが失せ、理知的なものへと変貌している。
「ご苦労、ルクレール君。すまなかったね、わざわざ迎えに行かせて」
「いえ、そんな！　ベルクート様のお役に立てるなら、ルクレはこのくらい……」
ベルクートの労いの言葉に全身が蕩けるルクレール。惚れているのは一目瞭然。そんな彼女を視界の隅に置き、彼は上品な仕草で椅子に腰を下ろした。
「さて。来てもらった早々で悪いが――諸君、仕事だ」
「失礼しました」
「失礼するっス」
完全に言い終わる前に、回れ右をして歩き出すエーシェとランポ。ルクレールが先回りして止めなければ、本当に帰っていただろう。それくらい潔い方向転換だった。
「……支配人（マネージャー）。私たち、仮にも休暇中なんですが？」
ルクレールの頑張りに免じて部屋に戻ったエーシェたちだが、表情までは優れない。冷淡な顔つきのまま指を組むベルクートに仏頂面を突きつける。
「無論、知っているとも」

「知ってて呼び出したんかい！」
半眼で睨みつけるエーシェ。ベルクートは柳のようにそれを躱す。
「私とて心苦しいさ。だが、人手が足りんのだ。今日のところは我慢してくれたまえ」
冒険者ギルドが抱える課題の一つに人員不足というものがある。
精鋭のみを採用し、質の高い仕事を行うのが経営方針のため、登録冒険者の数はあまり多くないのが実情だ。それに対して依頼は山積み。一人当たりの仕事量が増えるのは当然の帰結といえた。
「どうせ、暇だったのだろう？」
「暇じゃありません。有意義な時間の最中でした」
武器屋でのエーシェの痴態を思い浮かべつつ、先輩にとっては有意義な時間だっただろうな、とランポは回想する。武器に愛着を持たない彼には退屈な時間だったが。
「ふむ。武器屋に入り浸るのが有意義な時間とも思えんがね」
「うっ、どうして私の憩いの場を……」
「まあ君の異常な性癖はともかく、依頼の話を進めるとしよう」
エーシェはもう反論しなかった。こういうことはこれまでにも何度かあったし、早急の依頼なら片付けなければならない。それに、どうせ断れば『減点』だ。
「宙に浮いている依頼はいくつかあるが、とりあえず君たちに担当してもらいたいのは今から提示する二つの内のどれかだ。一つは民間からの調査依頼。もう一つは王立学院の」
「じゃあ民間の方で」
再び言葉を遮って、エーシェは即答した。
「先輩、まだ内容も聞いていませんが？」
ランポの問いかけに、エーシェは肩をすくめた。
「聞く必要ないの。どうせ生き物の捕獲でしょ。しかも蜘蛛とか蛇とか、毒持ちの」
王立学院は様々な学部の研究機関を擁した、この国における最高学府だ。その薬学部は有毒生物の捕獲をギルドに依頼してくる、少し厄介な依頼人として知られている。
『解毒薬を研究するために毒を作る』という実験が昔から行われており、そしてその毒を作るために有毒生物を研究する、というのが彼らの言い分だ。
「あれは命懸けだったなぁ……」
エーシェはしみじみと述懐した。
彼女は以前、王立学院の依頼を請け負った経験がある。森や草原を駆けずり回って蛇や蜘蛛と格闘し、危うく死にかけたことも度々あった。当時はまだ駆け出しで、依頼を断ることなどできなかったが、今なら仕事を選べるくらいの余裕はある。
「君の予想も概ね間違ってはいないが……いや、まあいい。では、民間の依頼を受けるということで受理して構わんな？」

「私はね。ランポもそれで良い？」
「良いですよ。オイラも蜘蛛は苦手ですし」
二人が合意したことを確認すると、ベルクートは改めて口を開いた。
「よろしい。では、依頼の説明をしよう。今回の依頼人はモラド村の村長で、その依頼内容は村近郊にあるオランの森の調査になっている」
それを黙って聞いていたエーシェは、僅かに眉をひそめた。
モラド村といえば、アシュランの更に西側にある、狩猟で生計を立てている寒村だ。村人の男手はほとんど狩人であり、言い換えるなら未開野の専門家である。
そんな村から、よりにもよって『森を調査してくれ』と依頼が来た。何か厄介な問題が発生したと考えるのが妥当だろう。
「モラド村の住民は、件の森で日々の糧を得ている。その日も大人数で狩りに行き、成果はあまり芳しくなかった。そこで、普段はあまり踏み込まない森の奥地へ手を伸ばし――そして、事件は起こった」
「事件？」
ランポが怪訝そうに復唱する。
「その場に居合わせた狩人、そのほとんどが一斉に気を失ったのだそうだ。原因は不明。何の予兆もなく意識を失ったらしい」
エーシェは絶句した。どうやら、厄介程度で済まされない、不可解な事件を受け持ってしまったようだ。今更後悔しても遅いと理解して入るのだが。
「原因はなんなんですか？」
「それを調べるのが君たちの仕事だ」
にべもなくベルクートが言い、そして続ける。
「負傷者は何人かいたが、死者は出なかった。その怪我も、昏倒時に頭をぶつけたり舌を切ったりする二次災害だ。だが、それ以来、村人達はすっかり気味悪がってね。糧を得るには森へ入るしかないのだが、やはり抵抗があるようだ」
「つまり、満足に狩りができないってわけか。これは大打撃っスね」
狩人出身で気持ちが分かるのか、ランポは深々と頷く。
「そうだな。まだ危機的な食糧難には陥っていないが、いずれは突き当たる問題だろう。食料に関してはいくらでも打つ手はあるが……人間という生き物は、今までの生活をいきなり変えることは出来ないからな。事態の回復が一番望ましい」
「つまり、直に森へ行って、村人の気絶の原因を探って欲しいってことですね？」
これまでの話をエーシェが要約した。それにベルクートが首肯する。
「その通りだ。きっかけが分かれば如何様（いかよう）にも対応できるからな。本当に怖いのは、何が原因か分からないことだ」

それはもっともだ、と二人は黙って頷く。
「現地では、君たちにも同様の危機が降りかかることが予想される。そこは持ち前の技能を駆使して、依頼達成に全力を尽くしてもらいたい。以上、何か質問は？」

＋

依頼を請け負ったエーシェとランポは、手入れが終わったばかりの武器を装備してモラド村に向かった。
彼の村は、最西端の都市アシュランから更に西へ十キロほど進んだ辺境地にあるという。
ギルドから貸し出された馬を駆り、数時間かけてモラド村へ到着した二人は、依頼主である村長の自宅を訪れた。依頼内容の確認と現地情報を収集するためである。
応対した老齢の夫人にギルドの紹介状を見せると、彼女は「お待ちしておりました」と深々と頭を下げ、二人を家へ招き入れた。
質素だが清潔な客間に案内され、椅子に腰掛け待つこと暫し。村長のラムレイが現れ、二人に歓迎の言葉を口にした。
「ようこそ、いらっしゃいました。何もないところですが、くつろいでください」
「ありがとうございます。ですが、お気持ちだけで結構ですので」
エーシェは挨拶をそこそこに仕事の話を切り出した。
さすがと言うべきか、彼女の対応は手馴れていた。礼を逸さないまま、会話を進めていく。依頼内容の確認を行い、これまでの経緯を把握し、同時に生の現地情報を得るために聞き込みも欠かさない。
「この辺りも、だいぶ賑やかになりましてな」
ラムレイは、自慢の白髭を撫でながら語り始める。
「十年程前まではまだまだ木々が生い茂っていたのですが、人が増えるに連れて伐採量が増えましてね。動物の数もめっきり減りました。今でも食うには困らんのですが、昔の姿を知っているだけに、少し寂しい気もしますな」
アシュラン地方が未開拓だったのはもう三十年も前の話だ。
かつては緑で溢れていた土地も人間が住むに連れて開拓され、近年、人間から離れるように多くの動物が辺境の奥に引っ込んでしまったという。
「とはいえ、我々としても、狩らねば生きていけません。先刻申し上げた通り、この近辺には鹿や熊といった大型の獲物がおりませんから、狩猟区を引き伸ばして、森の奥まで行くことにしたのですが……」
「そこで原因不明の気絶が多発する、と？」

エーシェが言葉を引き継ぐと、ラムレイは重々しく頷いた。
「そうなのです。しかも、何の冗談か、森へ調べに行った者は何も異常らしい異常は見当たらないといいます。以来、若い衆は気味悪がって狩りに出ようとしません。私も強制はしていません。今のところ死者が出ていないのは不幸中の幸いですが、万が一のことがあってはいけませんからな。しかし、いつまでも手を拱(こまね)いたままではいられません」
村長の説明は、ベルクートから聞いた概要とほぼ同じものだった。
「う〜ん。ランポ。同じ狩人出身として、何か思い当たることはない？」
エーシェは難しい顔付きで、隣席に座るランポの方を見る。
「こんな事態に遭遇したことはないので、なんとも。踏み入れた者が気絶する森っていうのがさすがに……」
「だよねぇ」
エーシェも野外活動(フィールドワーク)は得意な方だったが、ランポほど場数は踏んでいない。そんな彼が首を傾げる不可解な事件なのだから、もはや彼女ではお手上げ状態だった。
最も厄介なのは、現地の声を聞いても原因がまったく思い浮かばないことだ。村長や村の若い衆に話を聞いても、全く要領を得ない。当事者達にも何が原因となっているか理解できていないのである。まあ、だからこそ彼女達にお鉢が回って来たのだが。
「とりあえず、現場に行ってみましょう。どうも話はそれからみたいだし」
村での情報収集にそれほどの価値を見出せなかったエーシェは、実際に件の森に行ってみることにした。

＋

馬を村に預け、二人はオランの森へ続く細道を歩く。
できればガイドを調達しかったが、村人の森に対する不信感は思いのほか強く、断られてしまったのだ。仕方なく、二人は仕入れた情報を頼りに森まで向かう。
件の森は、村から半刻ほどの場所にあった。
深い森である。鬱蒼(うっそう)と茂った木々。空を狭める梢の天幕。羊歯(しだ)や苔が生える柔らかい地面は足場が悪く、湿気が多かった。とはいえ、以前踏破したロホ山の密林に比べれば、まだ快適な旅路と言える。
森は不気味な静寂で満ちていた。生き物の気配がない。どうやらラムレイの言う通り、大型の動物はもっと奥の方に移動しているらしい。確かにこの有様では、この周囲で狩りを行うのは難しいだろう。二人は茂みを掻き分け、更に奥へ踏み込むことにした。
それからしばらくして、

「先輩、鹿の足跡があるっス」
地面に伏せて足跡を調べていたランポが、地面の一点を指差して言う。エーシェが視線を凝らすと、偶蹄類（ぐうているい）の足跡が残っているのが見て取れた。状態から察するに、そこを通過して半日といったところか。
「じゃあ、きっとこの辺が問題の場所なんでしょうね。ランポ、何か分かる？」
そっと左手を長騎剣（ロングソード）の柄に添えながらエーシェは尋ねる。ここからは未知の領域だ。いつ何が起こるかわからない。
「そうっスね。とりわけ、目に見える異常がないことは分かりますよ」
彼女の問いに、ランポは肩をすくめて答える。
二人が見た限り、ここは何の変哲もないただの森林だった。人食いの獣もいなければ、有毒の胞子を撒き散らす危険な植物の群生地でもない。視界の隅では、極彩の蝶々がひらひらと宙を舞い、一見してのどかな空気が流れている。
それをぼんやり見ながら、ランポは呟いた。
「蝶なんか飛んでるし、平和なもんっスね。この森の、どこに人間を気絶させる要因があるんでしょうか？」
「それが、さっぱり分からないのよねぇ」
エーシェは不満げに頭を掻いた。
結果には必ず原因がある。この場で何人もの村人が気絶したというのが事実なら、その原因となる何かがなくてはならない。現場に来れば何かが見えてくると思ったのだが、まるで想像の埒外だった。
「昆虫とか動物とかによる危害が原因なら、ここまで大騒ぎする必要もないしね。原因は明確なわけだし、痕跡も残るし、何よりそういう証言があって然るべきだし」
「……あと考えられるのは……環境的なものっスかね」
「ちょっと漠然としすぎているけどね」
エーシェは不自然に立ち止まったランポを気に掛けることなく、詮索を続行した。茂みに顔を突っ込み、見えない何かを探す。
「原因は必ずある筈なのよ。人間を気絶させた何かが。私は花粉を想定してたんだけど、どうも見当違いだったみたいね」
刹那、エーシェの背後で何かが倒れる音がした。
「今、何か音がしなかっ――」
肩越しに背後を見たエーシェは、言葉を失った。
思考は完全に停止し、書き殴った推測と仮定は白紙に戻る。心臓の鼓動が激しくなり、どっと吹き出た冷や汗が背筋を流れていく。
彼女が見たもの。それは、うつ伏せに倒れるランポの姿だった。

「な……ちょっと、しっかりして！」
悲鳴を上げたくなるのを必死に堪え、エーシェはランポに駆け寄った。上体を起こして安楽な姿勢を取らせてから、手早く状態確認を行う。
ランポの顔は青ざめ、だらしなく開いた口の端からは泡が零れていた。全身は弛緩し、意識を失っているようだが、ちゃんと呼吸はある。外傷も見当たらず、命に別状はなさそうだ。
ただ問題は、何が原因でこうなったか、だが。
「これが、問題の気絶だっていうの？　でも、これって……」
エーシェは怪訝そうに眉をひそめた。彼女はこの症状に見覚えがある。決して稀有ではない疾患だ。十年以上生きていれば、一度くらい目にする機会があるだろう。
ランポの症状は一般的に癲癇と呼ばれる、脳細胞の異常な発火が原因で発症する意識障害と不随意運動だ。疾患の原因は脳の損傷や神経の異常と見られているが、多種多様な誘因があるので、根本的な原因の特定は難しい。
何が起因で意識を失うかも解らない癲癇は、昏倒や痙攣で頭部を強打したり、舌を噛み切ったりして死に至るケースがある。もし持病として抱えているのなら、冒険家業を営む上で重い枷となるだろう。
しかし、エーシェはランポに癲癇の発症例があるとは聞いていなかった。しかも、これほど重たいものなら自己申告はあって然るべきだ。彼がそれを怠るとは思えない。
ということは――
「ランポを昏倒させた原因が、今ここにある？」
漠然とした不安に胸中を募らせるも、エーシェは取り乱さないよう精神を強固に保つ。気絶現象が起こるのは実証された。後は原因の特定だ。
ここで原因を見極めなければ、また同じことが起こってしまう。自分もランポの二の舞になってしまうかもしれない。そうなる前に原因を特定せねば――
（一体何が……何が原因なの？）
エーシェは周囲に視線を巡らせた。
一片の異常さえ逃すまいと、殺意に似た輝きが碧眼に宿り、空間を駆ける。
その視界の隅で何かが光った。さっきの蝶だ。翅が木漏れ日を反射したのだろう。風変わりな蝶である。赤と青の二枚羽。左右非対称の翅はどう考えても畸形しているのに、平然と空を泳いでいた。
焦燥が増す。蝶なんか相手にしている場合じゃない。急いで昏倒の原因を探さねば。
「ああ、もう！」
さっきから目の前を飛び回る蝶が鬱陶しい。視界の隅をひらひらと飛び回る、赤と青に輝く翅を持った蝶の群れ。翅の表面には金属を思わせる光沢が走っており、羽ばたく度に反射光が彼女の瞳を突き刺した。

蝶が放つ色彩は燦然（さんぜん）と輝く赤、あるいは陰鬱（いんうつ）な青の光沢だった。
翅の表面にある複雑な多層膜に光が干渉し、角度に応じて違った色になる、いわゆる構造色（こうぞうしょく）による偏光現象だ。
エーシェの周囲を踊るように蝶の群れが寄って来る。翅が羽ばたく度に赤と青の極彩が目まぐるしく変化した。最初は煩わしかったが、徐々にその美しさに目が釘付けになる。そうさせるだけの魔性の何かが宿っているのだ。

畸形。畸形の蝶。歪んだ翅。極彩の蝶。捻れた翅。たくさんの赤。たくさんの青。逆転する赤。流転する青。刹那の内に循環する赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青と赤と青——

「うッ……！」
瞬間、エーシェの目の前で火花が散った。
こめかみに針を打ち込まれたような鋭い痛みが走ったと思ったら、間髪入れず悪酔いした時のような吐き気と眩暈が襲い掛かってきた。喉元から込み上げてくる吐瀉物の酸味と、食道が焼け付く不快感。
視界は激しく明滅し、鋭利な刃物を捻じ込まれるような痛みがこめかみに走る。次いで激しい嘔吐感。堪らず膝をつき、胃の中の物を全てぶちまけたいという衝動に耐え忍ぶ。
「そういう……こと、か……！」
奥歯が欠けるほど強く噛み締め、エーシェはじっと地面を睨んだ。視線はそのままで、止まない頭痛と胸に圧し掛かる不快と吐き気に堪えながら、思考を開始する。
全身から噴出す脂汗が滴り、顎を伝って土に吸い込まれていった。しかし、顔を上げることは許されない。あの光を見てはいけないからだ。
そう、あの蝶こそランポを、いやモラド村の人々を昏倒させた元凶だったのである。
金属のような光沢の赤と青。極端な構造色を持つあの蝶は、羽ばたくことでその二色を激しく点滅させていた。それを注視することで、視神経を通じて過剰な光刺激が脳細胞に加えられ、一種の癲癇放電を引き起こし——一種の光過敏性発作を誘発させたのだ。
エーシェは軽度で済んだものの、長時間、あの点滅を見続ければ重度にも成り得る。
魔性の誘惑を振り切り、直ぐに目を逸らしたのは彼女の直感に他ならなかった。あの畸形にしか見えない奇妙な翅も、獲物の注意を惹くために自己進化を繰り返した結果かもしれない。
翅に反射させた光で強制的に人間に癲癇を引き起こす魔蝶（まちょう）。それは可憐な外見とは裏腹に、知的な殺人技巧を遺伝子に宿した脅威の生命体だったのだ。

対抗策としては、単純に光の点滅を見なければいい。しかし、視覚に依存して行動する人間にとって視界を封じられることは拘束されるのと同義だ。それに対して魔蝶はただ姿を見せるだけでいいのだから、狩りというよりは最早一方的な虐殺に近い。

「なんて、厄介な……」

小さく呟いて、エーシェは瞳を閉じた。苦痛を無視し、まるで瞑想するような穏やかな表情を作る。意識は喪失していない。ただ奥へと向けられただけだ。自己と、自己の発端になったあるモノの向こう側へと。

エーシェが動かなくなってしばらくすると、無数の蝶が茂みの奥から姿を現し、二人の周りにゆらゆらと集まってきた。悍(おぞま)しく点滅を繰り返しながら群がる様は、死骸に群がる蟻を髣髴(ほうふつ)とさせる。

信じられないことだが、これこそが魔蝶の狩りなのだろう。そもそも、翅の構造色を防御としてではなく攻撃として使ったのだ。そんな機能を持つ種の主食が、花の蜜である筈がない。

狼が牙を持つのは獲物を狩る為。ならば、彼らの牙はその翅だ。彼らは異形の比翼で獲物を昏倒させ、その間に全身の体液を吸い尽くす、吸血生物なのである。

何十匹という蝶が音もなくエーシェの肉体に取り付き、静かに牙を伸ばす。彼女は振り払おうともしなかった。意識は内へ沈んでいく。このままでは、針のように尖った口先に少女の柔肌が凌辱(おか)されてしまう。

その刹那。

「我思う故に我あり(コギト・エルゴ・スム)」

その詞(コトバ)を口にした瞬間、エーシェの中で何かが覚醒した。

力強く噛み合った摂理の歯車が神意に従い重々しく動き始める。世界は法則の主導権を彼女に明け渡し、従属し、隷属する。事象は螺旋渦(ねじま)がり、彼女の恣(ほしいまま)に世界が組み変わる。

エーシェの望んだのは灼熱。

分子運動の加速。世界呼吸の加速。周囲の気体分子は彼女の意志に従い、身悶え、その姿を紅蓮へと変質させる。

これは、人智を越える超常の力。

過度の精神集中と魔蝶の光で疲弊した目じりの毛細血管が破れ、ぷっくりと血が滲む。表面張力を失って頬の稜線を朱の雫が滑り落ちて行った。

エーシェは血涙を拭うことなく呪紋詠唱を高らかに続ける。

「我が求めは赤熱――【陽炎(かげろう)】！」

瞬間、大気が赤熱した。

空間を支配する少女に同調した熱気流は、焼滅の意志の従い、群がる魔蝶を貪欲に飲み込んでいく。発声器官を持たない魔蝶は、声にならない断末魔を上げながら重力の網に捕まり、力なく堕ちていった。

瞬間的に加熱された空気は数秒後、美しくも悍しい魔蝶の群れを完全に駆逐し、消し炭と共に大気に還った。熱波の拡散でランポに群がっていた数匹も燃え尽きたが、当の二人は火傷一つ負っていない。それは、彼女が事象変換を加熱だけに限定したからだ。

物体の発火には熱と酸素、可燃物が必要不可欠である。とはいえ、いくら熱を加えてもそれが瞬間的なものでは、熱伝導率の問題で燃えることはない。

だが、魔蝶の鱗粉は極めて発火性の高いものだった。それが熱気流に触れたことで起爆剤となり、自らを火炙(ひあぶ)りに処したのだ。無論、エーシェがそのことを知っている筈はない。加熱を選択したのは計算してのことではなく、彼女の直感が成さしめた絶技だった。

焦げ臭い匂いが周囲を支配する。エーシェは恐る恐る顔を上げ、周囲を確認した。魔蝶の姿はない。どうやら一掃できたようだ。

ようやく一息ついた彼女は、纏わり付いた熱気を払うように金の長髪を掻き上げると、陰鬱な調子で呟いた。

「今回も……何とかなったかな」

時間をかけて身体を起こすと、重たい足取りでランポの隣に歩み寄った。胸に蟠った不快感や頭痛はまだ消えていない。安楽な体勢で休息する必要があるようだ。

隣から呻き声が上がった。どうも重度には至らなかったらしい。しばらくすれば意識を取り戻すだろう。

「まったく……誰よ、蝶と平和を結び付けて考えた奴は」

憎まれ口を叩きつつ、エーシェは流れた血涙を袖で拭った。

後日、アシュラン支部の応接室。

「なるほど、それが事件の顛末か」

エーシェからの報告を聞いて、ベルクートは静かに頷いた。

「ワイバーンの時もそれなりに危険でしたけど、今回も別の意味で危なかったです」

椅子に座って、ルクレールが淹れた茶を飲んでいたエーシェが仏頂面で言う。ちなみに出席しているのは彼女だけだ。ランポは念のために宿で休息を取っている。

あの後、エーシェはランポの意識が回復するのを待ってオランの森から離れた。事情を話してランポを村長の家に預け、報告のために一足先に帰ってきたのだ。

「世の中は広いんだね。まさか人間が蝶に殺されかけるなんて！」

ルクレールは感心したように頷く。相変わらずの可憐な笑みだが、実際に殺されかけた身としては安易に笑い返せない。

「ルクレールの言う通りね。色んな物を見てきたつもりだけど、世界には、まだまだ知らないものがゴロゴロ転がっている。今回は、それは改めて認識させられたわ」

「エーシェちゃん、井の中の蛙〜」
「お黙り」
ぴしゃりと言い放つ。
「辺境は広い。それに比べて我々人類は矮小だ。まだまだ我々の知らない生物が存在することは充分に在り得るだろう。重要なのは」
「それが依頼に絡む場合、対処の仕方は冒険者次第――って言うんでしょ？」
「その通りだ。……ところで、エーシェ」
ベルクートはエーシェをちらりと見た。
「何です？」
「いや、蝶は本当に全部焼き払ったのか、と思ってね」
意図の掴めない質問に、エーシェは目を瞬かせる。
「ええ、まあ。目に見えている限りは魔法で焼きましたけど。モラド村の人達にも事情は説明しましたから、そろそろ対策が取られてるんじゃないでしょうか。それが何か？」
「いや、それはそれで良いことなのだがね」
そう呟いて、ベルクートは卓上の書類にもう一度目を通した。
それは今回、エーシェとランポが選択しなかった、王立学院からの依頼書である。
（さて、これをどうしたものかな）
依頼書を眺めながら、ベルクートは珍しく表情を曇らせた。まさか、このような偶然があるなどとは、さすがの彼にも予想できなかったのだ。
その紙には、挿絵と共にこんな文章が書かれていた。

辺境の森林に生息しているといわれる、赤と青の色彩を持つ蝶を捜して欲しい。
旧アシュラン地方の森林でしか確認されなかった希少種である。無傷で捕獲した場合は一匹につき銀一枚の相場で追加報酬を支払う。

注意事項。
その鱗粉は非常に発火し易いので、絶対に火は近づけぬように。

王立学院生物学部

第三話　君の名前　Your Name

我輩は雛(ひな)である。名前はまだない。

つい最近、その事に気が付いた。きっかけは些細な事である。知己の肌に一本だけ長い毛を見つけた時のようなそれとなさで、何の前触れもなく思い至ったのだ。

由々しき問題だと認識するのに時間はさして要らなかった。気付かなければ幸せだったかも知れないが、気付いてしまった以上、無視できる話ではない。

名前は自己と他者を区別する最も基本的な概念である。命名は個性の確定であり覚醒。自分が自分で在るという証明に他ならない。

しかし、我輩にはそれがない。この身に名前がないのなら、自身を何と定義すればいいのだろう。どうやったら自己を表明できるのだろう。

我輩は考えた。いくら悩んでも答えは出なかった。当然だ。名前がなくては自己定義も自己証明も成り立たない。存在の容認には、それを支える名義が必要不可欠なのだから。

故に、我輩は渇望する。

名前が欲しい！　誰か我輩を名付けてくれ！

名は与えられるものだ。自称は単なる自己満足に過ぎない。命名は、されることにこそ意味がある。自他を区別する概念だからこそ、その刻印には、自分以外の言霊が必要なのだ。

……だというのに、我が飼い主ときたら！

我輩を名付けるべき立場にいながら一向に名前をつけようとしない。いつも我輩のことを君、君と代名詞で呼ぶ。彼女がちゃんと名付けてくれたなら、こんな悩みを抱えて憂鬱になることもなかったのに。

我輩は飼い主に名前で呼んで欲しい。そして、我輩という存在を承認して欲しいのだ。

その為には、まず名付けてもらわなければならない。

本来なら、彼女に「名付けてくれ」と伝えれば済む話だ。だが、それは叶わない。我輩は人間の言葉を語る嘴(くちばし)を持たないからだ。

我輩は人類ではなく――ドレイクであるが故に。

少しばかり、我輩の身の上を話すとしよう。

父は隻眼の鷹狩り。母は雲の踊り子。その三つ目の卵から孵化したのが我輩だ。

もっとも、両親に会った事は一度もない。というのも、ドレイクの繁殖はワイバーンの巣に托卵(たくらん)することで成されるからだ。我が種の習性には、端(はな)から親による子育ての仕組みがないのである。余談だが、この生態を人間の大部分は知らないらしい。

ドレイクである我輩が親竜の顔を知らないのは当然なのだが、その情報は我輩の遺伝子の中にしっかりと刻み込まれていた。

子孫を残せたのは優秀な個体の証明であり、その血を引く仔には先代から培ってきた知識が本能として受け継がれるのである。我輩が両親に会わずして親を知るのはそういう理屈だ。

だが、それは産みの親に関してのこと。

種が異なるとはいえ、ワイバーンに育てられれば彼らを親と思うし、親愛の情も湧く。その雛たちとも兄弟同然に仲良く育ち、独立できる年齢になったら共に翼を並べて巣別れをする。最終的に利用する／されるという間柄になるものの、それまでは仲睦まじい親子関係を構築するのが我々の生き方だ。

……と、聞こえは良いかもしれないが、事実上、我が種の行いは寄生であって共生ではない。図々しいと思われても仕方がないが、これも生存競争を勝ち抜くための智恵であり戦術なのだ。こうでもしなければ、自然界で生き残ることはできない。

もっとも、初期ドレイクの卵はワイバーンのそれに比べて小さく、柄(がら)もかなり異なっていたため、しばしば目利きによって排除されていた。それに対抗した偉大な先達は、形状や模様をワイバーンの卵と似せ、見破られないように生殖機能を変化させたのである。その結果、現代のような托卵行為が可能となったのだ。

このような自然界の仕組みを共進化(きょうしんか)と呼ぶ。

共進化は、自然界では珍しくない進化法だ。花と蜂の関係を思い浮かべるといい。あれは正に共進化の典型である。そんな身近なところにも確固とした生存戦略が息づき、種を維持しているのだ。少しは勉強になっただろうか。

……話が逸れてしまった。路線を戻そう。

以上を踏まえてなお、我輩に親はいない。

孵化した時、羊水に濡れた我輩を優しく取り上げてくれたのは、巌(いわお)のような外観をしたワイバーンではなく、年若い人間の少女だったからだ。生まれた場所も木の枝で組まれ、鱗を敷き詰めた巣ではなく、湿気を含んだ土砂の上だった。

孵化したばかりでまだ視覚が完全に機能しなかったが、耳に入る梢のざわめきと鼻腔を刺激する草の匂いで、ここがドレイクの生まれる場所ではないと本能的に理解した。

『ドレイクの雛……？』

我輩の姿を見て、眼前の少女は戸惑っていた。理由は知らない。どうして、我輩がこんな場所で生まれたのかも。遺伝子に刻まれた予定表では、ワイバーンの巣で孵化しなければならない筈なのに。戸惑いたいのは我輩の方だ。

『辻褄は、合うわね』

一体何の辻褄が合ったのだろう。我輩にも解るように話して欲しい。当然、我輩の思いが伝わる筈もなく、少女はぶつぶつと何かを思案し、やがて首を振った。

そして、何かを吹っ切ったような底抜けに明るい声で、
『さあ、帰りましょう！』
と宣言し、我輩を優しく抱えて下山の準備を始めた。
我輩は逃げ出すべきだったのだろう。相手はドレイクでもワイバーンでもないまったく別の種族。無事に育ててくれる保障など何処にもないのだから。
しかし、我輩は逃げられなかった。この時ばかりは本能を恨もう。どうやら我が種は、産まれて最初に目に映ったものを親と認識してしまうらしい。そうでなければ、多少姿が似ているからといって、別の生き物を育ての親として認めるはずがない。
とはいえ、まさか翼はおろか、鱗や嘴さえ備えていない二足歩行の哺乳類にも適用されてしまうとは。
どうやら刷り込みという奴は融通が利かない本能らしい。あるいは、我輩が生物相（システム）における例外（ゆらぎ）なのか。どちらにせよ、不本意極まる事態だ。
あろうことか、少女も我輩を育てる気でいるらしかった。
酔狂というか、随分物好きな人間もいたものだと感心してしまう。それとも、そんな飼い主に拾われたことを幸運と捉えるべきか。
果たして、我輩はロホ山岳から遠く離れた人間の集落で暮らすようになった。清潔だが狭く古い宿屋で、どうにも捉え所のない少女――エーシェと共に。
飼い主のおかげで食事には困らなかった。寝床はいつも綺麗に整っており、彼女の良い香りに包まれて眠るのは悪くない感覚だ。まだ部屋から出して貰えないが、人間に踏まれても死なないくらいの身体になれば、外に連れて行ってくれると言っていた。今のところ不満はない。むしろ、快適な住み心地と言える。
唯一、不満を挙げるとすれば、まだ一度も名前で呼ばれないことぐらいだった。

トントン。
乾いた音。控えめな、けれどしっかりと室内に響く絶妙なノック。
それにより我輩は目を覚ました。
欠伸を一つ。瞬きを二、三度。それから大きく翼を伸ばして、周囲を確認する。
床に脱ぎ捨てられた衣類。壁に立てかけられた刀剣の数々。窓の隙間からは、柔らかい曙光（しょこう）が差し込んでいる。その眩さに目を細め、もう朝だと実感した。
眠気覚ましに首を勢い良く振り、我輩はふかふかの毛布から立ち上がる。そろそろ暑くなる季節だ。
ここは、辺境都市のやや中央に位置する〈馬の蹄亭（ひづめ）〉。冒険者ギルド・アシュラン支部が提携して経営を行っている宿屋の一つである。

我輩の『巣』は二階の東端の部屋だ。エーシェが寝泊りをするのもここである。
エーシェはアシュランの出身ではない。生まれはもっと北方で、実家もその辺りにあるという話だ。ギルドは彼女のように決まった住居を持たない冒険者に対して、格安で宿泊施設を提供している。食費を含めても一般的な宿屋より遥かに安上がり。精鋭だけが登録を許されるギルドならではの待遇と言えるだろう。
トントン。
繰り返されるノック音。しかし、それも二度までだ。反応がないと判断すると、ノックの主は扉を開けることなく去って行った。
いつもの光景だ。あの寡黙な従業員はエーシェに朝を知らせるためだけに、貴重な時間を割いて二階へ上ってくる。その気遣いが心憎い。しかし、本当にノックでこの眠り姫が起きると思っているのだろうか。部屋に入って、直接声を掛けてやれば確実なのに。
いや、忙しい朝方に起こしに来てくれるだけでも有り難い。贅沢は言うまい。ここまでしてもらって起きないのだから、これは自己管理が出来ていない我が不肖の飼い主の責任だろう。
内心で呆れながら向けた視線の先。我が飼い主は、あの従業員の気遣いを見事に無碍にして、今も惰眠を貪っている最中だった。
ベッドに扇状に広がった絹糸を思わせる蜂蜜色の長髪。思わず頬擦りしたくなるような滑らかさを秘めた白磁の肌。豊満な局部とは対照的に引き締まった瑞々しい肢体。端正な美貌は無防備な寝顔を晒しており、夢の淵でまどろむ女神を連想させた。
しかし。
毛布を蹴飛ばし、仰向けのままだらしなく足を開いて、色気の欠片もなく豪快に寝息を立てている姿を見てしまうと、前言を撤回したくなるというものだ。
寝巻き代わりに着ている白地のワンピースは、寝返りで裾が盛大に捲れ上がっており、隠す隠さないの次元を超越していた。ここまで開けっ広げでは、もはや扇情的だとか官能的だとかいった表現すら不適切に思える。
主従のよしみで弁護しておくと、エーシェの普段の寝相はここまで酷くはない。修練によって培われた彼女の鋭敏な感覚は、睡眠中であっても必ず一部が覚醒しており、最低限の緊張を保っているからだ。
しかし、極端に心身が疲労していると緊張を持続できず、こうなってしまう。
同年代の少女と比較して、圧倒的に強靭な体力を持つ彼女だが、連日の依頼続きで相当参っているようだった。
疲れているのは分かるが……そろそろギルドに顔を出す時間だ。このままでは遅刻してしまうだろう。飼い主に恥をかかせるのは我輩の本意ではない。不肖とはいえ、この我輩の飼い主なのだから、尚更だ。
従業員のノックも効果はない。ならば、我輩が起こすしかないか。

我輩は皺の寄ったシーツを軽やかに飛び越え、我が主の顔に歩み寄った。幸せそうに緩んだ頬を嘴で強めに突付く。陶器のような肌に僅かに痕が残ったが、これくらいでないと起きないだろう。

「うにゅう」

どこか小動物を思わせる鳴き声。刺激で脳が覚醒したのか、エーシェはうっすらと眼を開けた。長い睫毛の向こう。青空の色彩を宿した双眸が現れ、視線が交差する。

「キミか、おはよう」

おはよう、寝惚け眼（まなこ）のエーシェ。いつまでも我輩を他人行儀に呼ぶ、愛しの飼い主よ。

そろそろ名付けてくれないと、こうして起こす気も失せてしまいそうだよ。まあ愚痴っても彼女には届かない。もし届くなら、いちいち名前で悩むこともなかっただろうに。

……にしても、エーシェの無関心振りはどうにかならないものか。もしかしたら、彼女は我輩を名付けていないという自覚がないのかも知れない。だとしたら、名付けてもらうのは事実上不可能ということになる。

ならば、まずエーシェにその事を認識させることからだ。その為の方法は……例えば、彼女の仕事場に行き、第三者に我輩のことを指摘させる。多くの場合、我輩は彼女が飼育する愛玩動物として認識されるだろう。

そうなれば、第三者が飼い主に最初に問うのは我輩の名前の筈だ。そうして初めて彼女は我輩に名前がないことに気付き――晴れて命名の時を迎えることになる。

そうだ、そうしよう。

「……それじゃ、お休み」

おい、寝るな！　我輩が思案している間に、寝返りを打って反対側を向くんじゃない！

我輩は反対へ回り込んで、先程よりも強く頬に嘴を突きつけた。

「あいたっ。むぅ……起きる、起きるってば。だから頬っぺた突付かないでよ」

我輩の攻撃から逃れるように、エーシェはのろのろと上半身を起こす。

――と、そこで一時停止。開いたと思った瞳はもう半分以上閉じかけている。かくん、と頭が下がった。既に意識はすっかり向こう側だ。

今日の彼女は一筋縄ではいかないらしい。

こうなったら強攻策だ。我輩はエーシェの身体を駆け上り、大きく開いたワンピースの胸元から内側へ滑り込んだ。

少女特有の何とも言えない香りが鼻腔を突くが、構わず我が身をくねらせ、豊かな胸の谷間に潜り込む。

「ひゃんっ！」

途端、エーシェは艶かしい嬌声を上げた。

「ちょ、やっ……キミ！　起きる、起きるから！」

刺激に対して反射的に身を屈めたエーシェ。その拍子に柔らかな膨らみに挟まれ、身動きが取れなくなってしまう。まあ、どっちにしろ、ちゃんと目が覚めたようなので我輩も動くのを止めようと思っていたところだから丁度良い。

その隙を逃さず、エーシェの手が伸びる。我輩は猫のように首根っこを掴まれて、服の中から引きずり出された。彼女の眼前に吊られ、ジト目で睨まれる。

「もうっ……起こしてくれるのは嬉しいけど、年頃の女の子にそんなことすると、嫌いになっちゃうぞ？」

寝言は寝てから言って欲しい。こうでもしないと起きなかったくせに、その言い草は何だ。いや、実際に寝てもらっても困るのだが。

「あ。でも、結構陽が昇っている。急いで支度しないと」

窓から差し込む日差しの明るさに気付いたエーシェは、ようやく事情を飲み込んだようだった。慌てて起き上がると、我輩をベッドに放り出して手早く着替え始める。この程度では翼は折れたりしないが、もう少し丁寧に扱って欲しいものだ。

一旦歯車が動き出せば、エーシェの行動は素早く、正確に加速する。

寝巻きのワンピースを床に脱ぎ捨てると、落ちていた白い法衣を拾って袖を通し、赤い外套を羽織る。腕は篭手、足元は脛当て。踝の固定具に投擲用の短剣を仕込み、腰に革のベルトを巻きつけ、愛用の長騎剣と予備の小剣を装着して準備完了。

最後に両頬を叩き、残った眠気を完全に吹き飛ばした。

「うし。今日も頑張りますか！」

意気揚々と部屋を出る間際、エーシェは我輩の方を見た。

「じゃあ行ってくるね。お留守番、頼んだよ」

にこやかに手を振り、エーシェは部屋から出て行った。

彼女の仕事場へ行くには、我輩もこの部屋から出る必要がある。一人でドアを開けられない我輩は、誰かが出入りする時にしか抜け出すチャンスはない。

しかし、それは今ではなかった。

彼女の目の届く内は、どれだけ出ようとしても即座に捕まってしまうからだ。

だから、我輩は外へ飛び出したい衝動を抑え、扉が閉まるのをじっと見守った。

チャンスはその後だ。

エーシェが発った後、従業員が部屋を掃除しに来る筈。その時を見計らって、外に出よう。

無事に出られたら、目指すは冒険者ギルドだ。

＋

意外と何とかなるものだ。
ドアの前で待ち伏せ、寡黙な従業員が入室するのと同時に外へ抜け出した我輩は、特に捕まることなく宿の外へ辿り着いた。誰も我輩の存在など目に入っていないようだ。
それが人間の視野という奴か。高い視点を持つが故に、足元の小さな存在に敬意を払わない傲慢さ。いつか足元をすくわれるだろう。まあ、今はそれに感謝しているが。
しかし、ここからどうしたものか。冒険者ギルドはどこにあるのだろう。我が飼い主の話では〈馬の蹄亭〉から近いらしいが、明確な位置が分からなければ向かいようもない。
さて、どう行動しよう。愚図愚図（ぐずぐず）していては、道行く人に踏み潰されない。
「あれ？　お前は先輩の……」
ふと視界が陰り、頭上から声が降ってくる。どうやら、人間全てが足元に無関心というわけではないらしい。
エーシェのしなやかな指先とは違う、ゴツゴツした太く逞しい指がそっと伸び、地面にいる我輩を拾い上げる。たちまち視点が高くなった。全てを見下ろすような感覚に我輩は驚嘆する。なるほど、これでは傲慢にもなろうというものだ。
「やっぱりそうだ」
我輩を持ち上げた人間と目が合う。短く刈り込んだ黒髪。褐色の肌に、艶やかな黒瞳。使い古された軟革鎧（ソフトレザーアーマ）に狩猟弓という組み合わせ。
額には色褪せたバンダナを巻いており、精悍な顔つきは人懐っこい笑みを浮かべていた。
この少年には見覚えがあった。
確か、名前をランポ。
エーシェの同業者だ。我輩が孵化した時も、視界の隅にちゃっかりいたような気がする。
「なんて酷い言われよう。オイラ、そこまで存在感ないっスかね？」
……なに？
「ふふん、驚いてる。驚いてるっスね？」
我輩の表情が解るかのように、ランポは不敵な笑みを浮かべた。
こいつ、まさか我輩の言葉が解るのか？
「狩人出身を舐めないで欲しいっスね。人間だって長く森で暮らしていれば、ふつーに動物と会話できるようになるっスよ？」
自慢げに鼻を鳴らすランポ。実際、我輩も大したものだと感心してしまう。
鳴き声の高低や音程。表情。狩場の雰囲気。小動物の動向。そのような言語を介さない言語体系――感覚言語（ソロモンワード）は地味だが、野外活動（フィールドワーク）における危険感知能力としては一級品と聞く。それを理解するこいつは、間違いなく狩人（ハンター）として優秀な部類に入るだろう。
ただし。
「ママぁ。あのお兄ちゃん、鳥とお話してる～」

「こら、見ちゃいけません！」
……あ、ランポの目から涙が。
「まあ、端から見ればただの独り言なんっスけどね」
うむ、そうなるだろうな。そうなると思っていた。実に外さない奴だ。
それにしても、これは僥倖だ。こんなところで我輩と意思疎通できる人間に出会うとは思ってもみなかった。おまけに飼い主の同業者。これは正に渡りに船だ。彼にギルドまで案内してもらおう。
「え、ギルドに行きたいんっスか？」
傷心から立ち直ったランポが、我輩に問いかける。我輩は嘴を開き、そうだ。エーシェに用があるのだ、と伝えた。
「う～ん、確かにこの時間なら、まだギルドにいるかも。おけ。じゃあ掴まってな」
ランポは我輩を肩に乗せると、ギルドに向けて歩き始めた。
「……ところで、お前の名前って何だっけ？　さっぱり記憶がないんだけど」
つくづく思う。やはり、名前は必要だ。

＋

ギルドまでは本当に近かった。人間の足なら歩いて十分も掛からない距離だ。
ただ、我輩だけなら辿り着く前に死んでいただろう。辺境都市というだけあって、朝の街路は行き交う人々で賑わっていた。もし、我輩が愛らしく路面を歩こうものなら、たちまち踏み潰され、生涯を終えていたに違いない。それくらい混んでいた。
商店街の喧騒から少し離れた路地に冒険者ギルドはある。といっても、支部だけあって大層な外観をしているわけではない。一般の民家に比べれば大きくて立派な門構えだが、どこかくたびれた老舗のような印象が漂っている。
最近は暖かくなってきた為か、正面の扉は開放してあった。ランポは靴の泥を落としてそのまま入室する。
彼が最初に向かったのはギルドの受付だ。奥の机でせっせと書類整理をしている少女の前に立ち、
「おはようございます、受付嬢」
と、爽やかに挨拶した。すると、机上で書類と格闘していた少女は視線を上げ、可憐な笑みを浮かべる。
「おはよ、ランポちゃん！　今日も元気かな？　ルクレは今日も元気だよ！」
少女は元気一杯の挨拶を返す。その笑顔の眩さはまるで陽光に煌めく野花のようだ。

面識はないが、我輩には誰か分かった。彼女はルクレールだ。
受付嬢の愛称で慕われるギルドの看板娘の話は、エーシェから聞かされたことがある。
外見の年齢は十二、三歳。鮮やかな赤毛（キャロティ）のツインテールに猫を思わせる少し吊り気味の瞳。染み一つない、透けるような白い肌。フリルがたくさん施された愛らしい衣装は、その童顔と体型に良く似合っていた。
「オイラも元気っスよ。ところで、先輩は来ました？」
「エーシェちゃんなら、ついさっき単独（ソロ）で運び屋になったよ。モラド村のラムレイさんの所までね。中央に住んでいるお孫さんからの贈り物が、本部から回されて来たの」
……惜しい。
ルクレールの『ついさっき』がどれだけの時間を表しているかは解らないが、どうやら僅差で入れ違ってしまったようだ。
これでは『第三者に我輩のことを指摘させて、名前を付けていないことに思い至らせる作戦』に支障をきたしてしまう。
「あそこは行商の交易ルートから外れてるっスからね。村人も自給自足してて、外部から支援を必要としないし。届け物しようと思ったら、冒険者に頼むしかないですからね」
「ギルドの方針だから仕方ないけど、小包一つであの料金は取りすぎたかなぁ。もう少し早く小包が届いていれば、魔蝶事件の時に一緒に運べて、幾らか払い戻しができたのに。お孫さんには悪いことしちゃったよ」
「世の中ままならないもんです。というか、魔蝶事件って呼ばれてるんですね、アレ」
我輩の思案を余所に、二人は会話に花を咲かせている。ちょっとした疎外感だ。なまじ我輩と意思疎通できる人間と出会ってしまったから、なおのことその感覚が強い。
「ランポちゃんには嫌な思い出かな。ところで、その肩に止まってるのは鳥さん？」
「――あ、いけね。忘れてた」
ようやくランポが我輩に意識を向ける。まったく、しっかりして欲しい。この中で意思疎通ができるのはお前だけなのだから。
「お前、先輩に用があるんだったよな。入れ違いになったけど、どうする？」
既に発ってしまっているなら仕方がない。どうせ報告に戻ってくるのだ、無理して追う必要もないだろう。
「じゃ、先輩の部屋に戻るか？」
いや、できればここで待ちたい。不特定多数が集まるこの場でないと意味がないのだ。我輩の目的を達成させるためには。
「……何だかよく解らないけど、動物厳禁じゃないし、別に良いんじゃないっスかね？」
「へー、ランポちゃん、鳥さんとお話できるんだ。顔に似合わず、可愛い特技だね。ルクレ、感心しちゃった！　ねぇねぇ、触っても良い？」

ルクレールは机から身を乗り出してランポの肩に細い指先を伸ばすと、ちちち、と舌を鳴らした。どうやら、我輩のことを本当に鳥だと思っているようだ。いくら人類が我が種の生態に疎いとはいえ、これほどまでか。

とはいえ、エーシェが戻るまで待たせてもらうのだ。機嫌は取っておくに越したことはないだろう。我輩はランポの肩から飛び降りると、ルクレールの腕に止まってやった。

「きゃー、きたきた！　君は賢いね！」

呼びかけに答えた我輩にルクレールは満面の笑顔を見せた。このくらいのことで喜んでくれるのか、人間というものは。実に単純な思考回路をしている。

が、それも束の間。

「あにゃ？」

きょとん、とルクレールは目を瞬かせた。大きな瞳で我輩の姿をじっと注視する。

「可愛いけど……鳥さんにしてはなーんか違和感。どうしてだろう？」

彼女は小動物のように愛らしく小首を傾げた。可笑しいのは解るのに、それが何によるものか特定できないのを不快に感じているのだろう、眉根を寄せしきりに唸っている。

「――それは、彼に羽毛ではなく鱗が生えているからではないかな」

そこへ新たな声が割り込んだ。氷のように冷たく澄んだ男声。

声の主は長身痩躯の青年だった。白皙、怜悧な風貌。砂糖のように白く滑らかな頭髪に黄金色に沈んだ知的な双眸。上品な絹衣を翻し、優雅な足取りで二人に近付いてくる。

「ベルクート様！」

「おはようございます、支部支配人（ギルドマネージャー）」

彼の登場に、二人はそれぞれの反応を示した。ルクレールは敬愛の念を露わに、恭しく頭を垂れるのに対し、ランポは軽く会釈するのみだ。

「うむ、二人ともおはよう」

支配人と呼ばれた青年は淡々と言葉を述べた。このそっけなさ。ベルクートか。

彼とも面識はないが、名はエーシェから聞き及んでいる。

ベルクート＝ファーキン。

アシュラン支部における最高権力者であり、姓名を持つ特殊な出自だそうな。

采配を振るう腕は確かだが、厄介な依頼をやたらと自分に押し付けるという悪癖持ち――と我が飼い主は言っていた。

なるほど、確かに一角の人物のようだ。気配からしてランポなんかとは質が違う。

「……悪かったっスね。どうせ、空気っスよ。存在感ないっスよ」

唇を尖らせるランポ。いかん、聞こえていたか。どうせ人間には聞こえまいと思って、なんでも口に出す癖が付いているようだ。直さねばな。

「ルクレール君、エーシェはもう発ったかね？」

ベルクートは二人に肩を並べると、用件を切り出した。どうやら我が主に関係があることのようだ。
「あ、はい。少し前に。どうかされましたか？」
「いや、私としたことが依頼の受託書を渡し損ねてしまってね。まあ、絶対に必要なものではないし、エーシェにも何かで代用するくらいの機転はあるだろう」
そこまで言うと、ベルクートはルクレールの腕に止まる我輩に視線を向けた。猛禽類を思わせる、鋭くも理知的な瞳に射止められ、身の鱗が逆立つ。
「ところで、ランポ。君は珍しいものを飼っているな。鱗の生えた鳥とは、まるで竜種だな」
「ははハ。鳥と竜は別物ですヨ、支配人」
渇いた笑い声を上げ、肩をすくめるランポ。明らかに不審だ。
「だが、鱗の生えた鳥などおらんよ。となると竜と考えるのが妥当だろう。ふむ、顔立ちは蜥蜴（とかげ）ではなく鳥類に近いようだ。ドレイクか？」
その指摘にランポの肩が僅かに跳ねる。
彼の鷲のような瞳はそれを見逃さない。きらりと目尻が光った。そして実に興味深そうに、
「冗談のつもりだったが、どうやら当たってしまったようだ。言ってみるものだな」
「え？　……えええええええっ！」
ルクレールが素っ頓狂な声をあげた。我輩も大変驚いている。エーシェとランポ以外に我輩の正体に思い当たる人間がいるとは、思ってもいなかったからだ。
それはそれとして、彼女の声は些（いささ）か大き過ぎた。余りの音量に、周りで作業をしていた人々の顔が一斉に我輩たちに集中する。
普段から溌剌（はつらつ）とした言動のルクレールだが、憧れの上司の前で大声を出したのはさすがに恥ずかしかったのか、頬がパッと朱に染まる。
「ドレイクって、雛と卵は未発見の筈ですよね？　この仔がそうだって言うんですか？」
失敗を繰り返さないよう、若干音量を落としてルクレールが尋ねる。ベルクートはその問いに答える代わりに、脂汗を流すランポの肩をやんわり叩いた。
「詳しくはランポが説明してくれるだろう。何故、そんなものがここにいるかをね。私も非常に興味がある」

＋

我輩の生い立ちも含めて、ランポは事情を説明した。
「――なるほどな。ドレイクはワイバーンの巣に托卵をするのか。だから、ドレイクには巣も子育ても必要ないと」

「卵を産み落とした瞬間を見たわけじゃないですから、断定はできませんが、先輩が言うにはそうなんだそうです」
「へぇ〜、ドレイクって賢いんだねぇ〜」
始終、ルクレールは目を丸くして頷いていた。ドレイクを卑怯ではなく賢いと捉える点は我輩として嬉しい感想である。もし我輩が人間なら、頭を撫でているところだ。
「竜種の生態は王立学院でもまだ完全に解明されていない。ワイバーンとドレイクは人間さえ襲う凶暴な肉食獣だからな。迂闊に研究対象にできんのが未解明である主な理由だ。この仮説を発表すれば、生物学史に旋風を巻き起こせるな」
腕を組んで冷静に分析するベルクートに、ランポがおずおず進言する。
「虫のいい話かも知れませんが、この事は学院の方には回さないで頂けますか？　先輩はこのことは黙っておくつもりだったらしいんです。もし、このことが知れたら、実験用にこの仔が連れて行かれると思って」
……いかん。涙が。思わず目頭が熱くなってしまった。
ただの職務怠慢かと思ったが、我輩のことを考えた上での判断だったのか。さすが、愛しい我が飼い主だ。不肖というのは取り消そう。
ランポの言葉にベルクートは薄く笑みを浮かべた。唇が少し動いただけだったが、それは氷の仮面に刻まれた確かな微笑だ。笑うのか、この青年は。
「彼女らしいな。この仔を育てるという判断も。何も知らず巣から放り出されたこの雛に自分の過去を重ねているのだろう。……安心したまえ、告発などせんよ」
「いいんですか？」
「意外かね？　だが、考えてもみるがいい。彼女の仮説が事実だったとして、それを証明する為に、学院は巣の調査を依頼するだろう。好奇心は猫をも殺す。個人としてもギルドとしても、あまり関わりたくないのが本音だからな。黙っておくに越したことはない」
ベルクートは肩をすくめると、皮肉げに呟いた。
「よかったね、君！」
ルクレールはにっこり微笑んで、我輩の頭を優しく撫でた。まったく同感である。我輩は良い飼い主に恵まれ、彼女は良い職場に恵まれた。これほど幸せなことはない。
「とはいえ、喜んでばかりではいられん。幸い、マリュートカ侯爵――ごほん。お貴族様からの報告がきていないが……結果的にあの依頼は失敗ということになるからな」
「すいません」
ランポは申し訳なさそうに頭を下げた。エーシェがこの場にいないのは不可抗力であるが、彼だけを謝らせるのは胸が痛む。
しかし、ベルクートは彼を特に責めなかった。それどころか、
「まあ、私も無理を言ったからな。バレなければいいさ」

そんなこと平然と述べる支配人の態度に、我輩もランポもポカンとする。
「なんか……意外っスね」
「私は経営者である前に人間だ。ワイバーンの巣窟から生きて帰った英雄に、もう一度逝って来いなどと、酷なことは言えんさ」
「良かったね、ランポちゃん。怒られなくて。ところで、この仔の名前なんていうの？」
――キタ。
惜しい。惜しすぎるぞ、ルクレール。その質問はエーシェの前で言ってくれ！
「ランポ、エーシェは何か言っていたかね？」
「う～ん、どうなんでしょう。でも、先輩が名前で呼ぶところは見たことないっスね」
「もしかして、まだ決めてないのかな？　どうなの？」
ルクレールが我輩に問いかけてくる。まさに、その通りだ。それこそが我輩の目的なのだ。だから、我輩ここにいる。と言っても、その旨が彼女に伝わったかどうか。
「あ、名前がないって言ってるみたいっスね」
と思ったと同時に、即座にランポが通訳する。本当に便利な能力だ。我輩が人間と間接的にでも会話できるだ日が来るとは……まるで夢のようだ！
それを聞いたルクレールは、にこりんと顔を輝かせ、拳を宙に突き上げる。
「じゃあ、みんなで名前をつけてあげようよ！　第一回、名付け親決定戦！」
……えっ？
「お、いいッスね！」
「さすがに命名権はエーシェにあると思うが、まあ、レクリエーションとしては愉快かも知れないな」
な、何だ、この展開は。その、あれだ。みんなの気持ちは有り難いが、我輩を名付けるのはエーシェだけの特権であってだね？　そういう発言は彼女が戻ってからして欲しいというか、聞いているかね、君達？
それにランポはともかく、ベルクートが乗り気でいるのはどういう料簡だろう。仕事しなくて良いのだろうか。エーシェから聞かされる管理職の多忙さは、実はまったくの嘘っぱち？
そんなこんなで、我輩の主張を完全に無視した命名大会が開催された。
もっとも、我輩の意図を汲める人間などこの場に一人しかいない。我輩の主張など、あってないようなものなのだが。
「終わらせる者という意味でチェルミナートルというのはどうだろう？　竜種が持つ、破壊的な攻撃力にピッタリだと思うのだが」
「でも、ドレイクは竜種の中でも小型種ですから、力強さよりもその俊敏性にこそ重きを置くべきっスよ。オイラなら、天駆ける稲光ってイメージでフルミーネにしますね」
「ルクレはね、ルノーがいいな。この仔、ちっちゃいし」

ああ……もう聞いていないな、これは。
「でも受付嬢、腐ってもドレイクですから、数ヵ月後にはでっかくなるっスよ？」
「あ、そっか。それじゃあ、シュナイダー！　なんか強そうだし、これにしようよ！」
おー、と元気一杯に拳を振り上げるルクレール。しかし、二人は決定を渋った。無論、私も何となくでは納得できないので、却下させて頂きたい。確かに響きは格好良いが。
「では、ドレイクの優秀な格闘性能にちなんで、ジェラーヴリクはどうだ？」
「いやいや、やっぱり空を飛ぶんだから風にあやかりましょう。鋭い西風、ゼフィーロ。これでどうです？」
むむぅ、それは確かに良い響き――はっ！　いかん。いかんですよ。我輩はエーシェに名付けて貰うと決めたのだ。そんな浮気のような真似は許されん！
「燕のようなしなやかさ、ラーストチュカはいかがなものか？」
「じゃあ、いっそルクレの名前をあげちゃおうかな！　ルクレール・アジュールっていうのはどう？　なんかこう、ドカーンって火を吹きそうなイメージで！」
「いや、ドレイクは火袋持ってないから、ドカーンはないと思うっスけど……」
などと、どうでもいい議論が延々と繰り返された。その凛とした声が遮るまでは。
「みんなして、受付の前で何話してるの？　邪魔なんだけど」
三人同時に背後を振り向く。そこに、既にアシュランを発った筈のエーシェが怪訝顔で立ち尽くしていた。
「は、早かったね、エーシェちゃん。もう届けてきたの？」
我が主の、不意打ちの登場に動揺しながらも笑顔を向けるルクレール。咄嗟の対応でも完璧な微笑みを作れるのは、やはり職業柄か。
「そんな訳ないでしょ。モラド村まで馬使っても一時間は掛かるんだから。ちょっと忘れ物を取りに来ただけ――って、あれ！　なんでっ？」
ルクレールの肩に止まっていた我輩を発見したエーシェは声を張り上げた。まあ、彼女が戸惑うのはもっともだ。本来なら、我輩は彼女の部屋から出られないのだから。
「君の雛が遊びに来ているぞ」
「しかも、私のってバレてるし……ランポ？」
凶眼を向けられたランポは、視線を逸らして後頭部を掻きつつ、おずおずと答えた。
「あー、宿屋の前でちょろちょろしていたのを捕まえて、ギルドまで連れてきました」
「なんで部屋に戻さなかったのよ？」
「いや、なんか先輩に用があるみたいで」
「は？」
もしかして、我が主はランポの能力を知らないのだろうか。彼の発言に眉根を寄せ、不可解そうな表情をする。

「それより、エーシェ。この雛には名前はないのか？」
「え、名前ですか？」
「そうだ。ランポの話では、まだ名前を決めてないそうじゃないか」
ベルクートに感謝を。実に絶妙なタイミングでこの話題を切り出してくれた。彼に感覚言語が備わっているとは考え難いが、何にせよフラグは立った。これでエーシェは、我輩に名無しだと気付くに違いない。
……違いないのだが。何故、我が飼い主はそんなに首を傾げているのだろう。
ここは、『あ、そう言えばまだ名付けてなかった！　私ってばうっかりさん☆』と手を叩くところではないかね？
「だから、ルクレ達でお名前決めてあげてたの。一杯候補が出たんだよ。えっとね……」
指折り名前を挙げていくルクレールを手で制し、エーシェは困ったように口を開いた。
「あの、申し訳ないんですけど……この仔の名前ってもう付けてありますよ」
『え？』
我輩は目を剥いて絶句する。他の三人も同様だ。
そうか、我輩がそうと気付いていないだけで、我輩は既に名付けられていたのか！
「そ、そうだったんっスか……な、なんていう名前なんです？」
「キミ」
『……はい？』
我輩と三人は異口同音に問い返すと、エーシェは面倒臭そうに頬を掻いた。
「だから、キミって名前なんです。ほら、この仔、卵から生まれたでしょ？　だから卵の黄身に引っ掛けてキミって」
駄洒落かよ！
と、突っ込む以前に我輩は愕然とした。
既に名付けられていたのもかなり衝撃的だったが、何より、そんな下らない言葉遊びで命名されていたとは思わなかったのだ。
というか、紛らわしい！
我輩は絶望した。あの三人はそれなりに意味を込めて名前を考えてくれたというのに、よりにもよって我が飼い主が一番適当な名前の付け方をしたことに！
もう嫌だ、こんな飼い主！
我輩はルクレールの腕から飛び降りると、そのまま出口へ駆け出した。
「あ！　ちょっと！　キミ！」
うるさい。うるさい。その名で呼ぶな！　そんなのは我輩の名前じゃない！
誰か、誰か我輩に名前をつけてくれ！
ちゃんとした名前を付けてくれ！

＋

「待って！」

毛布を蹴飛ばして、エーシェはベッドから跳ね起きた。息を荒げ、遠ざかる雛の小さな背に手を伸ばす。

「私が悪かったから行かないで！　ちゃんと名前を付けるから――」

エーシェの指先が掴んだのはささやかな空気の感触だけだった。これでは駄目だ。彼女は身を乗り出して、大切な何かを追い求める。

そして、何度も手を握ったり開いたりしている内に気が付いた。自分が追い求めているものが唯の幻だったということに。

「あ、あれ……？」

手を虚空に伸ばしたまま、きょろきょろと寝惚け眼で辺りを見渡す。寝癖のついた金髪がそれに合わせて力なく揺れた。

寝巻き姿の自分。床に脱ぎ捨てられた衣類。壁に立てかけられた刀剣の数々。窓の隙間からは、柔らかい曙光が差し込んでいる。

――部屋だ。

エーシェが目を擦っても、頬をつねっても眼前の風景は変わらなかった。間違いない。ここはギルドではなく、彼女が借りている〈馬の蹄亭〉の一室だ。

「……どういうこと？」

とりあえず口にしてみるが、何となく見当は付いていた。これは、もしかして。

「ひょっとして、夢……？」

狐につままれたように、彼女は呆然と呟いた。その疑問に答える声はない。確かな事はただ一つ。枕元に丸まって寝息を立てている雛の存在だけだ。

その光景に、エーシェは安堵した。あの出来事が何であれ、雛はちゃんとここに居る。ならば、あれはきっと夢だったのだろう。あるいは彼女ではなく、雛が見た夢だったのかもしれない。それが何らかの要因で彼女の精神と共感し、夢に反映された――

「まさかね」

自らの幼稚な憶測に、エーシェは渇いた笑いを零す。

真実がどうであれ、確証がなければ夢と一緒だ。すべては夢。どんな矛盾も不条理も、目が覚めれば朝靄（あさもや）の様に消え往（い）くのみ。それが夢というものなのだから、現（うつつ）に生きる者はいつまでも幻想に捕らわれてはならない。

――でも、まあ。

「あー、うーん……改名を考えておくのもアリ……なのかな？」
と、誰に話し掛けるわけでもなく、エーシェは呟いた。
それが、まどろむ雛の耳に届いたかどうかは定かではない。

第四話　影法師　Doppelganger

自分自身に襲われるとは、ついぞ夢にも思わなかった。
白く滲(にじ)んだ黎明(れいめい)の空。太陽がまだ昇りきらない早朝。
廃墟のように静まり返った街路の一角で、エーシェは短く息を呑んだ。
その険しい視線の先。路面に漂う薄霧のヴェールの向こう側。狼狽する彼女を、一対の視線が真っ直ぐに見据えている。女性の人影だ。
白夜に照らされた蜂蜜色(はちみついろ)の長髪。白い法衣(クローク)に真紅の外套。だらりと下げた右手には抜き身の長騎剣(ロング・ソード)。そして、見る者を魅了する空色の瞳――！
そこにエーシェがいた。紛れもない彼女自身の姿がそこに在った。
「やあ」
もう一人のエーシェが口を開いた。彼女そっくりの、いや、彼女そのものの声音。口元には嘲笑が刻まれ、瞳には明確な黒い感情が張り付いている。
即ち、敵意が。
「やっと逢えたね、エーシェ。とっても嬉しいよ」
じゃり、と砂が鳴いた。確固たる質量を持った影(エーシェ)が一歩、踏み出したのだ。
これは夢でもなければ幻でもない。鏡でもない。明確な意志と肉体を持った二重影(ドッペルゲンガー)。有り得ざる異常。有り得ざる怪異の具現。
「こいつが……影法師(かげぼうし)」
動揺するエーシェとは裏腹に、霧の向こうから現れた少女は、にやり、と凄絶な笑みを浮かべた。唇の隙間から覗く白い犬歯が、血に飢えた獣のそれを髣髴とさせる。
唇を嘲笑に歪め、影(エーシェ)は予備動作もなく彼女に向かって跳躍した。
朝霧に、白銀の軌跡が踊る――

＋

「影法師(かげぼうし)？」
午後を少し過ぎた、冒険者ギルドの執務室。
渡された依頼書に視線を這わせていたエーシェは、見慣れない単語に眉をひそめた。
真っ直ぐに伸びた蜂蜜色の長髪と陶器のように白い肌。曇り一つない空色の瞳。誰もが羨む女神の美貌(かんばせ)……なのだが、身に纏っているのはいつもの法衣(クローク)にくたびれた赤外套(レッド・ジャケット)、腰には長騎剣(ロング・ソード)という、お世辞にも色気のない格好。

いっそドレスでも着せてしまえばどれだけ似合うことか。異性ならば、いや、同性でも一度は思わずにはいられない。もっとも、本人が拒むので、中々実現しない艶姿（あですがた）だろうが。
「変な名前。こいつが犯人なわけ？」
彼女の訝しげな視線は、執務机に山のように積まれた書類と格闘している若き支部支配人（ギルドマネージャー）に注がれている。
「うむ、巷ではそう呼ばれているらしい」
テキパキと書類を処理、検分しながらベルクートは応えた。
佐藤か、そうでなければ節減を思わせる完璧な白髪に、氷像にも似た怜悧な風貌。猛禽類を髣髴とさせる黄金の瞳が、手元の資料を鋭く射抜いている。とても二十台とは思えない威厳と貫禄を備えた青年だ。
もっとも、そうでなければ二十五という若輩の身で、高い事務処理能力を求められる冒険者ギルド支部の支配人など務まらないだろうが。
「自分とまったく同じ姿のモノと遭遇する――ここ最近、そういった事件がアシュランで多発している。それに関する調査の依頼だ」
「見間違いじゃないの？　似たような顔の人間なんて、結構いるもんだよ？」
「報告では、他人の空似（そらに）というレベルではないそうだ。その時、身に付けていた服飾や小物も同一で、まるで鏡を見ているような感覚だったそうだ」
書類の山から目を離さず、淡々とベルクート。にべのなさは相変わらずだ。
「聞いたことないけどなぁ」
エーシェは怪訝そうに後頭部を掻いた。貸家とはいえ、彼女もアシュランを拠点に活動する冒険者だ。街に異常があれば、それなりに感付きそうなものなのだが。
「……で、私にその調査をやれって？」
「そうだ」
「街中で起こった事でしょ。そんなの自警団に頼めばいいじゃない」
エーシェは不満げに唇を尖らせる。
辺境都市を守るのは主に自警団の役目だ。この地方を治める辺境伯は、街の治安対策に並々ならぬ力を入れており、正規の教育を受けた王国兵に匹敵する猛者を揃えたという。街の治安が高い次元で維持されているのは、彼らの活躍があってこそである。
特に〈剣十字（ソードクロス）〉と呼ばれる第一特務部隊は、一個小隊で正規兵の二個中隊を相手に出来るという怪物部隊であり、自警団とは名ばかりの私設武装組織（プライヴェート・アーミー）と噂されている所以（ゆえん）でもある。
「人的被害も出ていないし器物の破損もない。明確な脅威と判断できるまで自警団は表だって行動しないそうだ」
「まあ、気持ちは分かるけどね」
確かに気味の悪い出来事だが……事件という器だろうか。実際、自分のそっくりさんに遭遇

するだけで、それから危害を受けたという報告は皆無だという。強いて挙げるなら、逃げようとして転倒し、膝を擦りむいたり、腰を強打したりと自爆的なものがほとんど。未知なる現象だが事件性はない。傍観を決め込んだ自警団の対応も分かる。
「でもって、自治体からギルドにお鉢が回ってきた、と。まあ、私ら何でも屋みたいなもんだしね。お金積まれちゃ、やるしかない。信用があるのも考え物だよね」
エーシェは皮肉げに笑った。だが、どこか楽しげな表情。ワイバーンの卵盗りしかり、魔蝶しかり、彼女は何かと不可解な事件に首を突っ込む運命にあるらしい。
それが避けられぬ必然というのなら、せめて前向きに考えよう。たった今、エーシェはそう割り切った。こういった気の持ちようも、彼女の強みの一つだろう。
「おっけ、引き受けましょ。でも、具体的には何をやったらいいわけ？」
「最終的には影法師の排除なるだろう。それにはまず影法師が発生する原因を突き止める必要があるな。何にしても情報は不足したままだ。まずは奴と接触するところからだろう」
そこで、ベルクートは作業を止めた。ペンを置き、机の引き出しから一枚の地図を取り出す。それはアシュランの地図であり、紙面には詳細な書き込みがしてある。
「住民の証言を元に、これまでの出現地と情報をまとめておいた。出現地に法則性らしきものはなかったが、どうやら朝方に現れるのは共通しているらしい」
地図を差し出され、エーシェは目を丸めた。紙面を指差し、
「……これ、あんたがわざわざ作ったの？」
「そうだが、何か？」
「いや、いつもルクレとかに資料を作らせるから」
エーシェの言い分は正しかった。支配人ともなると、その業務は多忙を極める。個々の依頼を自身で担当できないからこそ、ルクレール達が雇われていると言っても良い。
苦笑を浮かべて、ベルクートは書類で埋まった執務机を指した。いくら彼の手際が良いとはいえ、すべて終わらせるにはまだかなりの時間が必要だろう。エーシェは、現場担当なので書類仕事とは縁がないが、見ているだけでもうんざりする。
「少しばかり興味が湧いてね。自分でやってみたら、他の仕事が停滞してすっかりこの様だよ。まったく、好奇心は身を滅ぼすな」
「そう思うなら、もうちょっと依頼を選んでよ。働かされる私らの身にもなってよね」
ジト目で睨まれ、ベルクートは片頬で笑った。
「……しかし、あれだ。君は他人がいないと口調が戻るな」
「あれ？　戻ってた？」
きょと、とエーシェは目を瞬かせる。
「自覚がないのか？　この部屋に入って来た時から、既にいつもの口調だったぞ」
若干、呆れた気味にベルクート。

彼が指しているのは、エーシェの砕けた物言いのことだろうか。
確かに、いつもの彼女とは何かが違う。普段ならば、彼の前では敬語を使っていたはずだ。だが、今日はそれがごっそりと抜け落ちている。ランポやルクレール達と話しているような、気安さと人懐っこさが前面に押し出されていた。
「あぁ……」
エーシェは頬を人差し指で掻くと、
「やっぱり他人の目があると自然と気が引き締まるのかもね。二人きりは駄目だわ。畏まりたくても、つい昔の感覚に戻っちゃう」
そう照れたように笑った。
「私はどちらでも構わんよ。元より、君から始めたことだ。ギルドに所属しているうちは公私を分ける、とな。とはいえ、昔馴染みに敬語を使われるのも意外と落ち着かないものだ。いつでも戻っていいぞ」
「何だよ。いつも『ギルド所属の冒険者に相応しい品格を身に付けろ』って、口酸っぱくして言ってる癖に」
エーシェは再度、子供のように唇を尖らせた。
「それはそれだ。仕事でちゃんと振る舞えているのなら、私の前では、どんな喋り方をしても構わんと言っているのだ」
「考えとく。ま、こんな早くにボロが出るようじゃ、どっちみち長続きはしないかな」
エーシェは肩をすくめると、受け取った地図を懐へ嶋って踵を返した。
「影法師って奴が朝方に出るんなら、今日はもう無理だよね。だったら、一旦〈馬の蹄亭〉に戻って休むよ」
「それが良いだろう」
言って、はたとベルクートは頤を上げた。
「ああ、エーシェ。言うまでもないだろうが、この件はあまり口外しない方針で頼む。下手に影法師について聞き込みをして、かえって住民の不安を煽るのは好ましくないからな」
エーシェはドアノブに手をかけた状態で停止。僅かに宙を仰ぎ、肩越しに、
「じゃあ、直に遇って見極めろってこと？」
「そういうことだ。では、健闘を祈る」
そう言って、ベルクートは意識を机仕事に没頭した。男にしては細く長い指先がテンポ良く書類をめくってはサインと検分を繰り返す。
エーシェはその邪魔にならないよう、そっとドアを開けた。

＋

「はっ――！」
「ちぃっ！」
影法師の鋭く、研ぎ澄まされた剣閃をエーシェは辛うじて躱した。
バックステップで距離を取りつつ、反射的に腰の鞘に手を伸ばす。
フックの固定を解除。戒めを解かれた鞘を左手に収め、右手で長騎剣を引き抜いた。
影法師が追いすがる。エーシェは鞘を地面に放りつつ、新たに繰り出された敵の剣戟を自らの剣で受け止める。甲高い金属音と共に橙色の火花が散り、朝霧に吸い込まれた。
続く二撃目、三撃目を紙一重で躱す。そしてやっと生まれた僅かな隙に、
「せいっ！」
強引に反撃をねじ込ませる。
呼吸。握り。踏み込み。間合い。剣筋。その全てが、まぎれもない彼女のものだ。自分自身と闘うなど夢想だにしていなかったが、自分だからこそ読めるタイミングもある。
「ふっ！」
だが、それは敵対する彼女も同じ。躱し様、反射的に放った一撃を完璧に見切られ、切っ先はかすりもしない。
避けられた瞬間、エーシェは大きく後方に跳躍、間合いを取った。
追撃はない。向こうも様子見のようだ。
「……へぇ、思ったより驚いてないね？」
影法師は楽しげに笑った。まごうことなき、彼女の声音で。
「これでも十分驚いているつもりだけど」
長騎剣を正眼に構えつつ、冷静を装ってエーシェは応えた。内心では――
（ベルクートの奴……何が人的被害はない、よ。敵意丸出しじゃない！）
と、今日も机仕事に追われるだろうベルクートに毒を吐いている。いっそ、仕事に忙殺されてしまえば良いのに。
その悪態は動揺の表れだと、薄々彼女も気付いていた。自分とまったく同じ存在に斬り掛かられ、冷静でいられる精神とはどのようなものか。
掻き乱される心を必死に押さえ込み、エーシェは声音を落として問いかける。
「……何者なの？」
眼前の自分は何者なのか、その正体を見極める必要がある。
どういう存在なのか。知能を持っているのか。意志疎通は図れるのか。そもそも、この街に現れた理由は何なのか。
それら一切合財ひっくるめた『何者か』という問いだった。
「さて、何でしょう？」

歌うように影法師は疑問を投げ返す。質問に質問で返されても、エーシェの感情は微塵も揺らがなかった。いや、そう装った。元より返事は期待していない。事件がそう簡単に解決するなら、ギルドに依頼など回ってこないからだ。

「最初は性質の悪い悪戯かと思った。世の中には、本当に変装の上手い奴がいるからね」

「なるほど、変装。常識的な推測だと思うわ」

影法師は冷笑で応える。

「けど、人間のやることには限界がある。体格や声、太刀筋まで完璧に模倣できるなんてまず有り得ない。人間の仕業とは考え難い……」

「それじゃあ、私は人間じゃないってこと？」

明け透けに言われ、逆にエーシェは言葉に詰まった。人としての意思、人としての肉体を持つ生命は人間ではないのか。

だが同時に、目の前の存在は有り得てはならないモノだ。彼女は人間が変装したものではない。そんなことは剣を交えればすぐに分かる。あれは自分だ。しかし、自分以外のエーシェが在っていい筈がない。だが、それでは目の前の自分をどう説明する。

その矛盾。その在り方が、エーシェの強靭な精神に一本の亀裂を入れた。

「あんた、一体……！」

「言っているでしょ、私はあんただって。あんたが持っている力そのものだってね！」

影法師が疾走る。瞬く間に距離を詰め、気合を練りこんだ一閃がエーシェを狙う。迫る斬撃をギリギリで回避。休む間もなく、追撃の刃が閃いた。

「凄いね、私って！　こんなに疾く動ける！」

「くっ！」

雨のように降りかかる鋭い銀閃。迫る刃に刃を合わせる、一つずつ捌いていく。

相手は自分だ。手の内は分かっている。なら、防ぐことも容易い。しかし、それは向こうも同様だ。どれだけ斬撃を重ねても、一撃たりとも命中しない。

同じ姿。同じ武器。同じ太刀筋。

洗練された殺陣のように一部の狂いもない死闘に、エーシェは動揺を隠せなかった。本当に自分自身と戦っているような錯覚。己と同じ顔をしたモノと対峙することが、これほど痛烈な違和感になるとは。

「しまっ――！」

雑念が度し難い隙を生んだ。高い音を立てて、エーシェの長騎剣が弾き飛ばされる。

影法師は一気に距離を詰める。丸腰のエーシェでは、もう攻撃を防ぐことは出来ない。

よしんば躱せたとしても、手数で押されれば、やがては切り裂かれるのは必然だ。

掲げられる長騎剣。地平線から顔を出した陽光の洗礼を受け、煌めく刃金。必殺の一撃が、エーシェの頭蓋に振り下ろされる。

――どっちだっていい。

その結論に至った時、彼女の中で何かがカチリとはまった。瞬間、精神の深奥で眠っていた何かが覚醒していく。

それは事象の歯車。人間の深層意識でまどろむ神剣機関（エインセル・エンジン）。

「我思う故に我あり（コギト・エルゴ・スム）――」

それは契約の詞（コトバ）。世界は主導権を明け渡し、従属し、隷属する。事象は螺旋渦（ねじま）がり、いまや彼女こそが律法となった。

「魔法か！」

影法師の表情が、初めて変貌する。明確な焦りと恐怖。しまった、と思った時にはもう遅い。剣技の性能に溺れて、不用意に近付きすぎた。彼女が踏み込んだ場所は、既に死の領域だ。

「世界よ、事象の支配者が命じる。神意に従い、摂理の歯車を廻せ！」

エーシェは左手の人差し指と中指だけを立て、振り下ろされた剣の刃先にあてがった。指と刃が接触する瞬間、空気の絶叫が迸る。

「我が求めは慟哭（どうこく）――【鵺（ぬえ）】！」

口訣（こうけつ）により結晶する変異事象。力場（レイヤー）内で散々螺旋渦（ねじま）げられ、改竄（かいざん）され尽くした法則は、爆発的な衝撃波を伴って解放された。

鼓膜を劈（つんざ）くような空気の摩擦音を伴い、影法師の長騎剣が切断された。回転しながら高々と舞う、折れた刀身。影法師は驚愕の表情のまま凍りついた。

エーシェが使ったのは最高位の流動系戦術魔法だ。音叉（おんさ）状に展開した力場（レイヤー）に同一の周波数を持たせ、その共鳴効果による超音波ブレイド（ハーモニックスカルペル）で対象を切断する近接魔法。音波拡散の関係で有効射程は一メートル前後だが、近接戦で使う分には何ら問題はない。鉄をも切り裂く不可視の刃は、文字通り最強の剣だ。

「どうやら、私がエーシェみたいだね」

エーシェは油断なく、指先を影法師に突きつけた。目に見えないだけで、そこには音波の刃が展開してある。指を少し動かすだけで、首でも腕でも自由に刎ねることが可能だ。まさに王詰（チェックメイト）みである。

「私なら、相手が誰であれ深追いはしない。自分が相手ならなおさら。私には、魔法っていう奥の手がある。あんたは、私の性能に気を取られてばかりで、戦術にまで思考が追いついていなかった。つまり、あんたは私じゃないし、私はあんたじゃない」

「……だったら、どうだっていうの？」

「あんたの正体は人間に擬態できる何かって話になる。でも私は、姿を自在に変え、人語を喋る生物の話なんて聞いたことがない」

そこで一度、エーシェは言葉を区切った。
「もう一度聞くわ。あんた、何者？　何が目的なの？」
「――私を倒せたら聞かせてあげる」
離脱を図ろうと、影法師が大きく後退した。それより先にエーシェが動く。彼女の動きに合わせて超音波ブレイドが空間を疾駆、影法師の胴体を腰から真横に切断する。
だが、
「あははは！」
上半身と下半身に分断されながら、影法師はむしろ優雅に笑った。
地面に叩きつけられると同時に、どろりと影法師の輪郭が溶けた。まるで熱した鉄板に放り込んだ飴細工のように、どろどろと形を喪失していく。やがて、エーシェの姿をしていた正体不明の存在は、銀色の水溜りとなって一つに統合された。
「こいつ、まさか――シング！」
エーシェは影法師の正体に思い至った。
シング。それは辺境を旅する者の間で囁かれる怪異の名だ。
単細胞生物（スライム）。泥人間（マッドマン）。生きた水（リヴィング・ウォーター）。語り部によって細部は異なるが、形が不定形という共通項を持つ。彼女はこのぶよぶよと蠢く銀の粘塊に、伝承の真実を見た気がした。
影法師が動く。重く、ぬらりとした不気味な移動はまるで水銀の流出を思わせた。
銀の粘塊は全身をバネのようにたわめ、復元力を利用して高く跳躍した。
あらゆる生物と一線を画す、異形の移動法。それは空中で大きな布ように広がり、エーシェを押し包むように雪崩れ込んできた。
「くっ！」
エーシェは反射的に指を振るうが、そもそも水を『斬る』ことは不可能だ。いくら斬り付けようと、線の攻撃は面に遠く及ばない。その大部分は無傷のまま、粘塊は津波のように彼女に圧し掛かり、そのまま押し潰してしまう。
「きゃっ」
バランスを崩し、背中可から転倒。背中を強打した。息が詰まる。同時に粘液が全身を締め付け、仰向けの状態でエーシェを拘束してしまう。
「くそっ！　我が求めは灼ね――ぐむっ！」
詠唱が中断する。シングが粘液の一部を手の形状に変容させ、エーシェの口を塞いだのだ。言葉はおろか、呼吸すらままならない。このままでは遠からず意識を失うだろう。
数秒を待たずして、エーシェの全身がどろどろに覆われた。毛穴という毛穴から異物が入り込んでくる生理的嫌悪感。全身を舐められる感触に背筋がぞわりと震え、未知の感覚に鳥肌が立つ。精神の集中は途絶え、神剣機関（エインセル・エンジン）の回転数が徐々に落ちていく。
あもはやここはシングの胃袋の中だ。そうしたら自分はどうなる。食われるのだろうか。

こいつが食事の人間を襲うのだとしたら、何故、人気(ひとけ)のない早朝に現れたのだろう。
どうして、これだけの攻撃性がありながら、民間の被害がまったく出なかったのだろう。
どうして、シングは彼女の時だけ襲い掛かってきたのだろう――？
（そんなの知るか、くそったれ！）
エーシェは全身を圧迫する液体の感触に苦悶する。
シングの捕食器官がどこにあるかはさておき、まず圧死させるつもりらしい。あるいは窒息死か。何にしろ、得物の喉元に噛み付いておきながら、食い千切らない肉食獣はいない。
（死んで、たまるか！）
エーシェの思考が怒りに染まる。不条理を真っ向から否定する超高温の激情。停まりかけていた神剣機関(エインセル・エンジン)が唸りを上げ、世界法則を再び螺旋(ねじふ)伏せる。摂理の歯車が輪廻(まわ)っている限り、彼女はまだ事象の支配者なのだ。
刹那、閃光が絡み合う二人に迸った。
「あああああああ！」
シングが吼え、凄い勢いでエーシェから剥がれた。一気に三間の距離を駆け抜け、それから様子を見るように沈黙した。ぶよぶよと小刻みに震えているのは動揺の表れか。
「詠唱破棄の放電系……自分もろとも、私を撃ったんですね……」
鈴を転がすような声が粘塊から響いた。それがアレの肉声なのだろうか。
エーシェはそれに応えない。いや、応える余裕がなかった。拘束による酸欠で疲弊した身体に酸素を補給するため、犬のように呼吸を繰り返す。
先程の閃光。あれはエーシェが、自分を中心に放電系の魔法を発動した光だったのだ。
生きた水(リヴィング・ウォーター)の異名が示す通り、電気との相性は最悪だったらしい。
荒れ狂う電流の中心にいたのにも関わらず彼女が感電を免れたのは、いつも身に付けている赤外套(レッド・ジャケット)の絶縁効果のおかげだった。
火蜥蜴(サラマンダー)と紅蚕(べにかいこ)の繭(まゆ)から採れる生糸を織り込んだ生地は、高い耐熱性と耐電性、耐刃性を誇る強力な防具なのである。
「自らを省みない大胆な戦術、実に見事です――と、言いたいですが、ちょっとばかり出力を間違えたようですね」
「うる、さい……」
シングの指摘は正しかった。いくら赤外套(レッド・ジャケット)の耐電性能が優れていても、電流を完全に遮断することはできない。エーシェにも電撃の影響は確実に及んでいた。腕や足が麻痺を起こし、素早く動くことが困難になっているのだ。しばらく安静にすれば治るだろうが、その暇を相手が与えてくれるかどうか。
しかし。
「ですが、充分です。今日は引き分けということにしておきましょう」

ぶるりと大きく震え、するするとシングはその場をゆるゆると離れていく。エーシェは後を追おうとするが、足に力が入らず、前のめりに倒れてしまう。
「待て。あんたは何が目的で、こんな……」
「私を倒せたらと言ったでしょう？　残念ながら、引き分けはノーカウントですよ。それでは御機嫌よう、エーシェさん」
シングはしっとりした美声で囁くと、壁の隙間を通って路地裏から消えた。
「あいつは、一体……」
エーシェは呆然と呟いた。
既存の生態系とは一線を画す規格外。突然変異体。種を維持する為に、システムの揺らぎは意図的に引き起こされるが、アレはそれでもない。もっと根本的に違うモノだ。
何より、あのシングは人語を介していた。
エーシェが耳にした妖怪の伝承には、人に化けたり不定形で蠢いたりする描写はあっても、喋るという話は聞いたことがなかった。
だとすれば、あれはシングとも違う生物なのだろうか？
「何にせよ、助かった……か」
ようやく昇り始めた朝日を浴びながら、エーシェは静かに安堵の息を吐いた。

＋

昼下がりの午後。執務室の扉が控えめにノックされた。
「入りたまえ」
簡素な机の前で、いくつかの重要な依頼書に目を通していたベルクートは、書面に視線を合わせたまま、淡々と応じた。
「失礼します」
蝶番の軋む音だけを響かせて、人影が音もなく入室した。絨毯を敷いているとはいえ、その下は粗末な板張りだ。常人なら、ただ歩くだけで音が出る。
にもかかわらず、来客の靴音は一切なかった。
そのあまりの静けさを不審に思い、ベルクートは視線を上げた。すると、
「すいません。お仕事中だったのですね」
目の前に見目麗しい少女が立っていた。
外見の年齢は十六、七歳。肩口で切り揃えられた、陽光のように煌めく金髪（ブロンド）。起伏の慎ましやかな、ほっそりとした身体。乳白色の肌と、それを包み込む純白の薄絹（ヴェール・ドレス）の衣装。その瞳は、どこか魔性を思わせる鮮血の彩（いろ）を放っていた。

――先天性色素欠乏症（アルビノ）。
ベルクートの脳裏にその言葉が浮かんだ。しかし、彼女の肌は紫外線による炎症を起こしていないし、焦点も合っているため弱視でもない。白変種だろうか。
（最初は同類かと思ったが……）
煌々と輝く金髪や鮮血色の瞳がそれを否定する。白変種なら体毛は白化するため、金髪にはならない。アルビノのような遺伝子疾患とも違うため、瞳孔は正常にメラニンが定着しているので黒くなる。少女のように瞳全体が赤くなることはない。
アルビノでなければ白変種でもない。ならば、彼女はそういう生き物なのだろう。彼は深く考えるのを止めた。
「今日はありがとうございました」
人外の美しさを持つ少女は、優雅に一礼した。
「依頼料は既に頂いている。礼など不要。ギルドは利用者の要求（ニーズ）に応えるのが我々の仕事だ。たとえ、それが人間でなくともな」
ここにエーシェがいたら、どんな顔をするだろう。
ベルクートの話が真実なら、この少女こそが彼女が戦った影法師……銀色の生きた水ということになる。人間と同等の知性と価値観を持ち、地上のどんな生物よりも優れた擬態能力を有する液体生物。それはいかな系統に属する生命体なのか。
種明かしをしてしまえば、今回の影法師事件はすべてベルクートの捏造である。
実際にはそんな事件は起こっていないし、被害も出ていない。全ては彼女と少女を戦わせるためのお膳立てだったのだ。
「それを受理する貴方も大した器です。さすがは三銃士の孫ですね」
その賞賛に、ベルクートは軽く肩をすくめた。
「よしてもらおう。さすがなのは、むしろ彼女の方だと思うがね」
彼の物言いに、少女は薄く笑った。
「よければ聞かせてくれないか。なぜ、彼女と戦う、などという依頼をしたのだ？」
ベルクートは筆を止め、少女を静かに見据えた。
「自分の力の限界を図るため。失礼ですが、彼女には試金石になっていただきました」
「自分の力を知ってどうする？」
「力の加減ができるじゃないですか。自分の最大と最小の力を理解できれば加減はできます。私の力は少々、人と一緒に生きるには大きすぎるようで」
そう言うと、少女はにっこりと微笑んだ。
「貴方に、もう一度お礼を。ありがとうございました。では、失礼します」
少女は優雅にお辞儀をすると、入ってきた時と同様に音もなく執務室から去って行った。
部屋に心地よい静寂が訪れる。

彼が思い出したように仕事を再開しようとした瞬間、入れ違うように今度はエーシェが部屋に入ってきた。
「ねぇ、さっきの廊下ですっごい綺麗な人とすれ違ったんだけど、あれ誰？」
「君も会ったことがあると思うが？」
新しい書類を一枚取り、それに目を向けたままベルクートは言った。
「ホント？　ちょっと思い出せないな。あんなに綺麗な人なら、忘れる筈ないんだけど」
しきりに首を傾げるエーシェ。もし、彼女に『綺麗な人』の正体を告げたらどんな顔をするだろうか。
それを想像して、ベルクートは静かに笑いを堪えた。

第五話　魔剣　Broken sword

いつの時代にも無法者というのは存在する。
それは人類が社会を形成する上で内包する、必然的な問題だ。
本来、種にとって不必要な要素は自然淘汰によって刈り取られるが、食物連鎖の頂点に立っている彼らはその影響を受け難い。そのため、必要なものと不要なものが検分されないまま社会に組み込まれ、繁栄と共に歪みとして顕現化し、秩序を乱す要因となる。
もっとも、社会的な観点において悪と断じられるそれらの所業も、生態系的な視座から見れば種の多様性を維持するための揺らぎでしかない。もしかしたら、この清濁入り交じった混沌こそが人間性と呼べるものなのかも知れなかった。
とはいえ、社会生物である人類が秩序を乱す存在を容認することは決してない。いつの時代にも、無法者に対抗する勢力というのは存在する。例えば、国家を守護する王国騎士団はその代表格であるし、自治体が運営する自警団もそうだ。
そして間接的にだが、冒険者もその一つに数えられるだろう。
辺境に行けば行くほど治安は悪化の一途を辿り、ならず者による犯罪の頻度は上昇する。
中にはアシュランのように強力な自警団を擁する街も存在するが、その抑止力が効果を及ぼすのはその内側までで、外側に干渉することができない。
理由は明確。辺境の土地は広すぎるからだ。
故に、盗賊と呼ばれる人種は町と町の中間――即ち、街道に出没することが多い。
彼らが狙うのは旅行者や隊商（キャラバン）である。特に隊商は辺境における居住区間の物流の要であり、もし襲撃を受ければ経済的な打撃を被ってしまう。
だからこそ、辺境での移動には冒険者の雇用がつきものなのである。騎士団や自警団の目が届かない地域を、軽快な行動範囲（フットワーク）で補うすることができる上、荒事に長けているため、いざ戦闘になっても的確に対応できるのが最大の強みだ。
事実、冒険者ギルドに寄せられる依頼の六割は護衛や案内に関するものである。本来、翼竜の卵を盗ってくる、などというのは例外中の例外だ。確かに、道徳に反しない限り、何でも引き受けるのがギルドの方針ではあるが、彼らにも出来ることと出来ないことがある。
日頃から何かと不可思議な事件に巻き込まれがちなエーシェだが、普段は護衛に関する仕事がほとんどだ。
似たような依頼はそれこそ毎日のように寄せられるが、彼女はこの業種を嫌ってはいない。辺境を散策するのは趣味だし、隊商が歩んできた異境の話を聞くのは彼女の好むところだ。
今回、エーシェが受注したのはアシュランとリメイラとを結ぶ街道を行く隊商の馬車の護衛だった。

最近、街道では盗賊と思しき集団が目撃されているらしい。
辺境都市周辺の治安を守ることもギルドの仕事の一環と考える支部支配人（ギルドマネージャー）の采配によって、エーシェとランポがその任に就いたのだ。
そして、それは案の定だった。
その日の夕刻。目的地であるリメイラまであと半分というところで、隊商は数十名近い盗賊に囲まれた。使い古された軟革鎧に、鈍く輝く短剣。中には、一風変わった武器を携えている者もいたが、全員がいかにもな出で立ちをしている。
荷台で待機していたエーシェはそこから飛び降り、続くランポに言った。
「ランポ、後ろは任せた！　私はちょっと切り込んでくる！」
「はいはい。それの試し斬りがしたいんっスね。それじゃあ、オイラは先輩が戦いやすいように魔法で牽制掛けとくっス！」
「上出来」
後輩の満足のいく答えに、エーシェは白い歯を見せて笑った。その手には、妖しく輝く銀の太刀が握られている。
「じゃあ、行こっか――『秋水（しゅうすい）』！」
妖刀の名を叫びつつ、エーシェは敵陣の中へ飛び込んだ。

＋

その日のエーシェは、珍しく不安げな表情をしていた。
「どうかな、親父さん」
冒険者ギルドと提携して経営を行っているブルムベア刀剣工房の店主は、エーシェから手渡された長騎剣の状態を見て、巌のような顔をしかめた。
今年で四十五になる彼の目元には年相応の皺が刻まれ、頭髪にも白髪が混じり始めていた。しかし、鍛冶修行で鍛えた筋骨隆々な肉体は若い頃のままであり、寄る年波を感じさせない。実年齢より若く見えるのだ。
店の名前にもなっている灰色熊（ブルムベア）というのは、文字通り熊を髣髴とさせる店主の巨体と毛深さに由来した愛称である。自身の名前ではなく、敢えて愛称を店名にしているあたり、案外気に入っていたのかも知れない。
「お嬢。お前さん、一体何と打ち合ったんだ？」
抜き身の白刃を検証しつつ、訝しげに店主はエーシェに尋ねた。長騎剣の状態は、彼の言うようにあまり芳しくない。縁（エッジ）には刃毀（はこぼ）れが生じており、刀身は傷だらけ。剣腹は歪んで、鞘に収まらなくなっている。人間で例えなるなら満身創痍の容態だ。

「何って、同じ長騎剣だけど……」
「馬鹿を言うな。長騎剣同士で打ち合ったって、ここまで酷い刃毀(はこぼ)れは起きん。本当は破砕剣(バスタードソード)とか長柄斧槍(ハルバート)とやり合ったんじゃないのか？」
「本当だってば！　ちょっとは常連の言うこと信じなさいよ！」
訝しげな店主の態度に、エーシェは唇を尖らせた。
事実、彼女の言葉は嘘ではない。打ち合った武器は長騎剣で間違いないのだ。むしろ、問題があるとすれば、その使い手の方だったのだろう。
（あんにゃろうめ……）
事件は、数日前に遡る。
ある日の早朝。エーシェは影法師と呼ばれる不定形生物と遭遇し、やむをえず交戦する羽目になった。彼女の剣が疲弊したのは、この戦闘に因るものだ。
驚異的な擬態能力を持つ影法師は、エーシェの姿を模倣して現れた。手にした長騎剣はもちろん、声紋、反射神経、太刀筋に至るまで完全に複写して。彼女にしてみれば、正に自分自身と戦っているような感覚である。
その戦闘の最中、エーシェは影法師の長騎剣を魔法で切断し、無力化したが、その破片を回収することはできなかった。行方が気になるところではあるが、どちらかといえば、彼女が戦いを仕掛けてきた理由の方が気掛かりだ。
（単純な話、向こうの剣の方が硬かったってことか）
自分の長騎剣の眺めながら、エーシェは胸中で呟いた。
「それで、どうなの？　治りそう？」
「刃毀(はこぼ)れに関しちゃ研磨すればいいだけだが……軸が曲がっちまっているからな。一度、打ち直さねぇと」
店主は難しい顔をしたまま答えた。ちょっとした刃こぼれなら研磨すれば元通りだが、ここまで歪曲していては鍛造(きた)え直す必要がある。
「……やっぱり時間かかる？」
上目遣いにエーシェが尋ねた。らしくない表情に、店主は白い歯を見せて笑った。
「と言っても、一から作るわけじゃねぇからな。まあ二、三日ってところか。何だ、仕事でも入ってんのか？」
「うん、そうなの。急ぎの奴が一本ね」
「わかったわかった。優先してやってやるよ。で、いつだ？」
そう聞かれて、エーシェは両手の人差し指を付き合わせながら、
「その……明日」
「……そりゃ無理だぜ」
店主は天を仰いだ。

「だよね。うーん、どうしようかなぁ」
陰鬱な溜め息を吐きながら、エーシェは呟いた。武器を持っていない戦士など、釜戸のない料理屋みたいなものだ。戦闘力のみが冒険者の基準だとは考えていないが、やはり頼りなさは拭えない。
「どうしようもクソもねぇだろ。普段から、こそこそと買って行くじゃねぇか。それを使えばいいんだよ」
「宿に置いているのは全部観賞用。誰が実戦なんかで使うもんか。というか、私の部屋にあるのって、大体実戦向きじゃないし」
エーシェは皮肉げに肩をすくめた。
彼女が言う通り、部屋に飾ってあるほとんどの刀剣は非戦闘用の――即ち、ただの芸術品なのである。
装飾過多の剣は実戦には向かない。そもそも戦闘では飾り自体が無用の長物だからだ。
余計な重量になるばかりか、誤って自分の手を傷つけるおそれもある。とはいえ、あまりにも無装飾では無骨すぎて品格がない。それはそれで、彼女の美学が許さなかった。
エーシェの長騎剣は、彼女の養父から譲り受けたものだ王国騎士団にも正式採用されている製法で鍛造された一振りで、儀礼剣としての側面もあるため、シンプルながらも美しい造りになっている。無論、『量産品の中では』という前置きが付くが。
「いざ実戦で使うことを考えると、やっぱりこれ以上の剣は中々見当たらなくてね」
剣の優劣は断定し難い。構造上、切れ味が鋭ければ刀身の耐久力がどうしても低下するし、耐久力が高ければどうやっても切れ味は鈍くなる。
この矛盾した二つの要素を両立させた作品を、俗に名刀や名剣などと呼び讃えるが……なるほど。確かに彼女の剣は、非常に低いレベルでだが、両立できていた良作だったに違いない。
「お譲よ、前々から言おうと思ってたんだが、鑑賞のために剣を買うのはよしてくれねぇか。俺は鍛冶屋だ、芸術屋とは違う。実用に耐える武器を売ることが仕事なんだが、お嬢の買い方は、その沽券を痛く傷つけるんだがな……ところで、今回の依頼はなんだ？　得物が要るってことはあれか、また荒事か？」
「隊商の護衛。場合によっちゃ盗賊狩り」
「ははぁ。そりゃ、使い慣れた武器が良いわなぁ」
顎鬚（あごひげ）をさすりながら頷く店主に、エーシェは力無く頭を垂れる。
「そういうこと。ま、いざとなったら部屋の奴を使うけどさ。でも、できれば使い慣れた奴が良くって。ねぇ、親父さん、倉庫に王国規格の剣とか眠ってないの？」
「ふむ、そうだな……」
腕を組んで思索を巡らせていた、正にその時だ。店主の頭に天恵が降り注いだのは。
「それじゃあ、ちょいと待ってな」

そう言い残し、店主は店の奥へと姿を消した。炭を詰めた大樽を動かす音や、木箱を移動させる音。棚の角に小指をぶつけた店主の悲鳴などが聞こえてくる。

しばらくして、彼は、幾重にも紐で巻かれた細長い布包みを抱えて戻ってきた。

「何それ、秘蔵の剣？」

「似たようなもんさ。で、こいつなんかどうだい。お嬢のスタイルとはちょいと違うが……」

そう言いながら、店主はテーブルの上に布包みを置くと、ゆっくりと紐を解いた。布を剥ぎ取られ、その隠された姿が露わになる。

予想外の中身に、エーシェは目を丸くする。

「これって……カタナ？」

それは美麗な外観の太刀だった。小さく反った独特のライン。滑らかな刀身。美しい波紋と機能美は、彼女もよく知る王国式の鍛造法だ。

だが、繰り返そう。それは太刀だった。

「へぇ、珍しいね。親父さん、カタナなんか作ってるの？」

エーシェが珍しがるのも無理はなかった。騎士団を始め、多くの戦士が手にする武器は剣である。金属鎧が標準的に装備されているこの国では、刃こぼれしやすく、打ち合いに弱い太刀は戦士の間で敬遠されているのが実情だ。

また、太刀の製造法は外来技術であるため、国内ではあまり普及しておらず、手入れの確実性が低い事も理由の一つに挙げられる。

「おう。鍛冶屋としちゃ、一遍くらい造っときたい作品だったからな。商売用の剣を打つ傍ら、ちょこちょこ練習してたんだよ。銘は『秋水』っていってな、俺が作ったものの中じゃ、今のところの最高傑作だ」

店主は胸を誇らしげに語った。

小さく反った裸身は磨き上げられた鏡のように澄み渡り、滑らかな刃紋からは官能的な匂いが漂っていた。装飾の類は施されておらず、唯一の飾りといえるのは金色の鍔だけであるが、それが全体を引き締めるアクセントとなっている。機能美と装飾美が渾然一体と織り成す外観は誇るに値する完成度だ。

しかも、形状はあくまで実戦を想定した造り。これだけの美しさを備えながら、この『秋水』はエーシェの長騎剣以上の実用性を内包しているのだ。

これは魔剣だ、と彼女は思った。

戦士にとって武器とは道具に過ぎない。彼らの真の武器は積み上げられ、研鑽され尽くした戦闘理論であり、それを実現する為の戦闘技術だ。剣や槍は、それらを反映するための手段でしかなく、道具に依存する精神こそが未熟さの証拠となる。

弘法は筆を選ばず。道具が技術に勝ることはない。

……が、稀に例外が存在する。

使い手の技術に依存せず、その性能のみで勝利を引き寄せる魔性の武器。道具が技術を凌駕したその刃を――人々は、魔剣と呼ぶ。
この『秋水』は、既にその領域にあった。
「剣幅一寸。刃長三尺。これなら、お嬢の長騎剣に近い形状だろう。鍛造法も王国採用のグラウデン式だから、感触も似ている筈だ。持って行け」
「これ、くれるのっ？」
ぱっと顔を輝かせてエーシェが飛びついた。もとより刀剣類に執着を持っていたエーシェのこと、『秋水』の魔性に憑かれるのは時間の問題である。精神抵抗など望むべくもない。美貌の虜とは、まさにこのような状態だ。
「やりはしねぇよ。貸すだけだ、貸すだけ」
「売ってって言ったら？」
「売らん。これ以上のカタナを打てたら、考えてやっても良いけどな」
その回答に、エーシェはがっくりうな垂れる。
「むぅ。まあ、いいか。その好意をありがたく受け取ることにする。でもいいの、そんな大事な剣を借りても？」
「何だかんだでお得意様だしな、お嬢は。それに俺は、武器ってのは飾っておくものじゃないと思ってるからな」
「……何それ。私に対するあてつけ？」
唇を尖らせるエーシェに、店主は破顔した。
「はっはっは、そんなつもりじゃねぇよ。まあ、そいつの初陣が、お嬢みたいな腕の立つ剣士で良かったとは思ってるがな」
言いつつ、店主は『秋水』を専用の黒鞘に収めた。それを、彼女に差し出す。
「それがお世辞じゃないことを祈るね」
苦笑しつつ、エーシェは鞘を受け取る。慣れた手つきでそれを腰のベルトに固定すると、踵を返して出口へ向かった。
意外と様になっている彼女の後ろ姿に、店主はひそかに微笑んだ。

＋

――そして現在。
「これ、すごくいい！」
エーシェは満面の笑顔を浮かべて、『秋水』を振り上げた。
空気の抵抗さえ切断する極薄の刀身が、彼女の剣速を更に加速させる。瞬く間に一人を切り

伏せ、接近するもう一人の顔面に峰打ちを喰らわせる。悶絶して地面を転げまわる男を踏みつけて気絶させると、次の獲物目掛けて跳躍した。

（すごいすごい！　何これ！）

確かにこれは魔剣だ。名刀の条件は『悪を斬らずに遠ざける』ことにあるが、この刀はその真逆。力を求め、血を求め、使い手を戦場へ誘う魔性の武器に他ならない。

この『秋水』を握った時から、胸が躍りっ放しだ。徐々に積み重なっていく疲労も、悲鳴を上げる筋繊維も、息苦しささえ快感となる。

戦うことがこんなに楽しいだなんて思っても見なかった！

さながら水を得た魚。エーシェは、彼女を包囲する残り六名を相手に怯むこともなく、必殺の剣舞を繰り出していく。

「むっ！」

その時、絶好調のエーシェが動きを止めた。

新たに接近してきた三人目の盗賊。彼が構えている獣の牙のような武器に、彼女の研ぎ澄まされた危険感知が反応したのだ。

「しゃっ！」

男が振るった剣を、エーシェはいとも簡単に受け止める。太刀筋が甘い。まるで受けてくれと言っているようなものだった。

では、何に彼女の直感は反応した？

「もらった！」

男が野卑な顔で哄笑する。彼女の背筋に悪寒が走った。本能的に剣を引こうとしたが、それが出来ない。まるで、男の剣が噛み付いているように。

そこで、エーシェは敵の正体に気が付いた。

「こいつ、太刀砕（ソードブレイカー）きっ！」

「遅いんだよ！」

そのがら空きの剣腹に、隠し持っていた小槌が叩きつけられた。鈍い音を立てて『秋水』は砕け散る。

無惨に砕かれた『秋水』の欠片が、緩やかな放物線を描いてゆっくり落ちていく。落陽の光を弾いて綺羅綺羅と輝くそれは、大粒の宝石のように美しかった。

「けけ、もらった――おぶぅ！」

男は丸腰になったエーシェを斬りつけようとしたが、それより先に反射的に飛んできた拳に殴られて沈黙した。だが、同時に彼女の動きも糸の切れた操り人形のように停止してしまう。

「よし、何だか知らんが、奴の動きが止まったぞ！　今だ、畳みかけろ！」

頭目の指示に突き動かされるように、残った五人が一斉に躍りかかる。いくら武芸に通じた戦士であっても、丸腰では、これだけの人数を相手に戦えまい。

勝利を確信した頭目格。その慢心故に気付かない。今、目の前で無防備に佇む少女が、台風や地震以上に凶悪な災害だということに。

「あんたら……」

折れた剣の柄を握り締め、エーシェはわなわなと肩を震わせた。その双眸に朱の陽光を蹴散らす清らかな蒼輝が灯る。

「あんたら――何てことすんのよっ！」

エーシェは心の底から絶叫した。彼女は怒りを原動力に精神を神剣機関に接続、摂理の歯車をあらん限りの精神力で流転す。通常の手順をすっ飛ばして事象の支配者へ至った彼女の意志を代弁するかのように、大気は激しく赤熱し、爆発した。

加熱系戦術魔法――【暁】。

盾状に展開した力場内部を多層化し、高温に加熱。開放と同時に連鎖爆発を発生させ、熱と衝撃を周囲に擾乱させる魔法だ。本来は、弩弓や投石といった質量兵器を防ぐための魔法なのだが、近接時にはその熱波が敵を薙ぎ払うという、使い勝手の良い攻守両用の魔法である。

また、盾を三枚重ねた状態の【暁】を『鬣』と呼び、このレベルになるともはや並の防性魔法を遙かに凌駕した破壊力を備えるという。

ちなみに今回、エーシェが展開した盾は九枚。

都合、三回の『鬣』が一斉に起動し、活火山の噴火じみた大爆発を引き起こした。

指向性を持たない熱と衝撃はあっという間に空間へ拡散していくが、それでもかなりの距離まで近付いていた盗賊五人を吹き飛ばすには十分過ぎ、彼らは若くして夜空に瞬く星の一つとなった。

いや、ちゃんと落ちてきたが。

「どうしよう……」

死屍累々。野原に打ち捨てられた丸焦げの盗賊達には見向きもせず、エーシェは折れた剣を見つめて途方に暮れた。

『今のところの最高傑作だ』

そう言った店主の誇らしげな笑顔が脳裏をよぎる。

「どうする……どうする、私！　このままじゃ親父さん、首吊っちゃうかも！」

鍛冶屋にとって作品は自分の子供のようなものだ。それが砕けたとあれば、それは母親が子を失うのと同様の衝撃に違いない。ショックの余り自害することも考えられる。もし次の日、彼の遺体が工房から発見されたら、私はどうしたらいいのだろう？

「先輩、どうしました？」

後方に展開していた盗賊を無力化し終わったランポが、盛大な爆発音を聞きつけたのか駆け寄ってきた。しかし、今のエーシェに彼の言葉に耳を傾けている余裕はない。虚ろな瞳でぶつぶつとうわごとを呟いている様は中々に怖い。

「あの先輩……？」
「膠（にかわ）でくっつければ……いやダメ、そんなんなことで専門家の目を誤魔化せるはずがない……どうしたら、どうしたら……」
その瞬間。
葛藤するエーシェの頭上を一筋の流れ星が駆け抜けた。
その時だ、彼女に天恵が降り注いだのは。
「そうだ、鍛冶師に頼めばいいんだ！」
エーシェはポンと手の平を打った。木を隠すなら森の中。鍛冶師が施した処置ならば、店主も見抜けないのでは……！
「確か、リメイラの村には腕利きの鍛冶屋さんがいたはず！」
そう結論したエーシェは気絶している盗賊たちの手足を縛って街道の端に転がすと、一目散にリメイラの村に向かって駆け出した。
「ちょ、先輩！ 仕事はどうすんですか！」
ランポの制止の声を気にも留めず、エーシェは夕日の向こうへと消えていった。

＋

その早朝。
夜通し走りこんで、ようやくリメイラへと辿り着いたエーシェは、町外れに居を構えている鍛冶屋の家に転がり込んだ。
「……なるほど。ならず者の太刀砕きにやられましたか。それで私に、この太刀を打ち直して欲しいと言うのですね？」
立派な髭を生やした高齢の鍛冶師は糸のように細い目で、差し出された剣とエーシェを交互に見比べ、そう呟いた。
「え、ええ……」
ちょっと目を逸らしつつ、彼女は答えた。嘘は延べていないが、その太刀が借り物だということは伏せている。そこが唯一のしこりだ。
「ふむ。見れば、戦士の出で立ち。武器がないのではさぞや心許ないでしょう。しかし、剣を打ちたくとも、なにぶん年でしてな」
鍛冶には体力がいる。それはブルムベア刀剣工房の店主の筋骨隆々とした肉体を見ればよく分かる。見れば、この鍛冶師はかなりの高齢だ。工房にも火の気がまるでない。恐らく、武器を打たなくなって久しいのだろう。

だがそれでもエーシェは頭を下げるしかない。確かに鍛冶屋は他にもあるだろうが、太刀を打てる職人は彼しかいなかった。
「そこを何とか、お願いします」
エーシェの懇願する顔が、まるで親と逸(はぐ)れた仔犬のような顔をしていたからだろう。老鍛冶師は諭すように答えた。
「……わかりました。何とかしてみましょう。七日後においで下さい。それまでに直せるだけ直してみます」
その言葉は、彼女にとって大金にも勝る言葉だった。
「あ、ありがとうございます！」

エーシェが去り、老鍛冶師の家に静けさが戻った頃。
「引き受けたが良いが……こんな美しい剣を、わしが修理できるものだろうか？」
床に置かれた『秋水』を見つめながら、鍛冶師は一人頭を悩めていた。
何という完成度、何という芸術品か。同じ道に立つ職人として畏敬の念を禁じ得ない。
これだけの名刀を鍛造(きた)え直すには並々ならぬ技術と体力、集中力が要る。全盛期の彼ならばともかく、年老いた現状では修復はとても困難だ。
「とはいえ、引き受けたからには打たねばなるまい。しかし……む、そうか！」
その時だ、彼に天恵が降り注いだのは。
「わしでなくとも、太刀の鍛造に詳しい鍛冶師に頼めばいいではないか」
一世一代のアイディアに上機嫌なる老鍛冶師。思い立ったが吉日。彼は知己の鍛冶師に連絡を取るため、文を認(したた)め始める。
そこへ、二度目の来訪者がやって来た。
「どうも。冒険者ギルドの者なんっスけど、ここにエーシェっていう女の人が尋ねてきませんでしたか？」
「おお、冒険者ギルドの。これはちょうど良かった。是非、この手紙をアシュランまで運んで頂きたい。そのエーシェさんからの頼まれ物でしてね」
「はあ。ということは、ここに来たんですね？　……まあ、これからアシュランに戻るところですし、別に良いですけど。それで、誰に渡せば良いんです？」
来訪者が尋ねると、老鍛冶師は薄く笑った。
「アシュランのブルムベア刀剣工房までお願いします。いや、そこの店主は太刀を打つことが出来ましてな。彼ならば、これを直すことも出来るでしょう。ですが、彼女には内密にお願いしますよ。私が直すことになっていますからね」

第六話　伝説を追う者　Illness

食堂（フロア）には熱気が渦巻いていた。

「さあさ、他に注文はないかい！」

「おばちゃん、肉だ、肉追加！　大至急！　野菜なんざいるか！」

「こっちは酒だ！　いっそ樽ごと持って来い！」

鍋を焦がす炎に食材を刻む音、肉が焼ける芳しい匂いと男達の濁声。食堂が鈩場（たたらば）なら、さしずめ厨房は鍛冶場といったところか。調理（つく）る熱気と食う熱気。それらが渾然と溶け合い、混じり合って生まれた活力の渦が店内を包み込んでいる。

「おーい、パンが切れた！　もっとよこしてくれ！」

「おお、こっちのテーブルにも頼むよ！　……というか、おばちゃんよ。さっきから蛾が落ちてきて鬱陶しいんだけど？」

「ここじゃそれが普通なんだよ。嫌なら外で食うか、別の店に行っちまいな！　さあさ、他にはないかい？」

熱の宴は続く。

ここは辺境都市に近くにある宿場町、リメイラにある大衆食堂だ。こぢんまりとした店内のほとんどの席は、体格の良い男達で埋まっている。

使い込まれた木製のテーブルには揚げ物や葡萄酒の杯が小山のように積まれており、周囲は野太い笑い声や怒声、他愛ない噂話で満ち溢れていた。

天井に吊るされたランタンの周りには奇抜な模様の蛾が集っており、時折、輻射熱で燃え尽きた蛾がテーブルに落ちてきては喧騒に油を注いでいる。

今回、エーシェが受託した依頼は小さな隊商（キャラバン）の護衛だった。

何かと奇妙な事件に巻き込まれがちな彼女だが、冒険者ギルドが請け負う依頼の大半は居住区間を移動する人々の護衛や害獣の駆除である。その意味で、今回の依頼は冒険者の通常業務とも言える内容だ。

現在、隊商は最初の中継点であるリメイラで宿を手配した後、少し遅めの夕食を摂っている最中だった。男たちは今日一日の疲れを癒すために酒を酌み交わし、肉を頬張り、談笑に花を咲かせている。

その場には、エーシェも居合わせていた。男所帯だからか、彼女も同伴するよう各隊員から強い要望があったのである。

同性ばかりの環境が常である者にとって、異性との交流は負荷（ストレス）を解消するいい機会だ。同席するだけでも場が華やかになるし、それが見目麗しい少女ともなれば尚の事。これで酌でもしてくれようものなら、旅の疲れも全て吹っ飛ぶというものである。

この提案は、彼女にとっても迷惑な話ではなかった。食事はコミュニケーションを行うのに最適な場所だからだ。食事や会話を通して構成員の人間性や性格を把握し、問題点を早急に洗い出すことは、一定期間護衛をする上で重要な作業なのである。

とはいえ、最後まで付き合う必要は無論ない。過度に馴れ合うのは二流。周りの空気に流されず、仕事の本質を常に忘れないのが一流だ。

「ごちそうさま」

エーシェは中身がなくなった食器をテーブルに置いた。それも含め、食卓には同じ皿が何枚も重ねられており、塔を形成している。食堂を支配する野郎どもに負けず劣らず、彼女も相当な健啖家のようだ。

「それじゃ、私はお先に失礼しますね」

そう控えめに切り出して、エーシェは席を立った。

「もう寝るのかい？　これからが話の良いところなのにさ」

隣席に座っていた青年が、話し足りなさそうに顔を歪める。

事実、まだ日が暮れて余り時間は経っていない。星の瞬きはこれから強くなる。四つ、五つの子供ならばともかく、酒飲みはむしろここからが本番だ。

「護衛が寝不足になったら本末転倒ですから」

すまなさそうにエーシェは苦笑した。どうやら、譲る気はないようだ。

隊商はリメイラを経由して更に街道を上っていく。途中で、別支部の冒険者と引継ぎを行うが、あと数日間は彼らと共に行動しなければならない。これからの日程を考えれば、万が一に備え、少しでも体力を温存しておくに越したことはない。

「まあまあ、そう言わずに。もうちょっとだけ付き合ってくださいよ」

なおもしつこく言い寄る青年に、エーシェはどうしたものかと思案していると、

「馬鹿野郎、無理強いすんじゃねぇよ」

底冷えするような声が青年を閉口させる。向かいの席に座っている隊商の頭目が、彼に釘を刺したのだ。気を利かせてくれたのだろう。

「エーシェさん、どうぞ先に休んでください」

青年が黙ったのを確認すると、頭目は熊もかくやと思わせるごつい顔に愛嬌たっぷりの笑顔を浮かべ、エーシェを見た。内心で安堵しつつ、彼に微笑み返す。

「それじゃ、お先に」

「明日もお願いしますよ」

頭目の言葉に応えるように、彼女は隊員の面々に一礼して食堂から出て行った。

「……ちぇ。これからが良いところだったのに」

話の良いところで腰を折られた青年が、不満げに唇を尖らせる。それを見た頭目は嘆くように溜息を吐いた。

「オメェは本当に馬鹿だな。エーシェさんは若いが、一流の冒険者なんだぜ。移動中、俺らのくだらねぇ話に相槌打ってくれている間も、ちゃんと神経を張り巡らせて警戒してくれてるんだよ。ああ見えて、ただ手綱引いているオメェよりよっぽど消耗してんのさ」
「……そっか。そいつぁ、気が利かなかったな」
頭目から諭され、青年はバツが悪そうに頬を掻いた。なまじエーシェが聞き上手であるためか、ついつい会話の楽しさに引きずられ、考えが足りなくなっていたのだろう。
「――ま。とは言っても、あの人に勝てる奴なんかそうそういねぇだろうがな」
言いおいて、頭目はにやりと片頬を吊り上げた。
「はあ、どういう意味なんで？」
「あの人は『伝説』の娘だからな。俺らが心配するまでもないってことさ」

＋

「とりあえずリメイラには辿り着けたし、第一関門はクリアね」
肩の凝りをほぐすように伸びをしながら、エーシェは夜道を何気なく歩いていた。宿に戻る前に、身体の火照りを散らそうと思ったのだ。早めに寝たかったのだが、夜風にでも当たらなければ、あの食堂の熱気は取れそうにない。
世界は漆黒に覆われていた。今日は新月なので特に闇の気配が強い。代わりに夜空には満天の星々が輝いているが、月明かりと比べると余りにもささやかだ。
そんな暗闇の中、エーシェの手に光源らしき物は握られていなかった。
衣服以外に身に付けているものといえば、腰に引っ掛けた長騎剣（ロングソード）と軽く羽織った真紅（レッド）の外套（ジャケット）くらいのものである。なのに、彼女の足取りには危うさというものがまるでない。とても些細なことながら、彼女の並々ならぬ力量の一端を感じ取れる挙措だろう。
「このまま何事もなく終わってくれると、私としてはすごく楽なんだけどな」
夜空を見上げながら、エーシェは苦笑を浮かべた。
アシュランを出発して早三日。まだ道程の三分の一も過ぎていないが、ここまでは特に問題らしい問題は発生していない。何かが起こるとすれば、これから先だ。
まあ、大丈夫だろう――とエーシェは思った。それは彼女の希望的観測ではなく、これまでの経験から来る直感のようなものだ。
冒険者ギルドに寄せられる依頼の中で、エーシェが最も好むものは隊商の護衛だった。
物流を肌で感じることができる。異郷の話を聞くことができる。独自のコネクションを作ることができる……など、その理由は多数あるが、最も割合を占めているのは『危険が少ない』というところだろう。

現実問題として、隊商や旅人を糧にする盗賊や山賊の類は実在する。だが、彼らもそう頻繁に出現するわけではない。むしろ、賢い盗賊団ほど闇雲に攻撃を仕掛けないものだ。手を出せばそれだけ周囲の警戒が厳しくなり、狩りが難しくなると知るが故に。

襲いなれた盗賊は長期間、獲物に手を出さない。逆に、がっつきやすい同業者を粛清したりもする。そうやって街道の危険度を限界まで下げてから、護衛の手薄になった隊商の喉元にかぶりつくのだ。それが彼らの常套手段なのである。

そのような性質もあってか、隊商にとって盗賊の襲撃とは青天の霹靂のようなものだ。道中で出会うかどうかは確率論でしか語れない。事前に彼らの動向を把握できれば話は別だが。

当たり外れの激しい連中であるため、護衛を雇っても杞憂に終わることがほとんど。無論、万が一の保険として雇用するが、それでも危険が確実化されないだけ難易度は低い。翼竜の卵を盗りに行かされるような依頼と比較すれば、尚の事だ。

「どっかの冷酷魔人も、毎回こういう采配をしてくれれば良いのにね」

頭の後ろで腕を組み、ここにはいない誰かのことを口走る。深夜まで執務室で仕事をこなす真面目な支部支配人は、今頃、人知れずくしゃみでもしているのかも知れない。

人跡未踏の人外魔境を旅し、未知なるものに多大な関心を示すエーシェだったが、さりとて恐怖心がないわけではない。できることなら危険は避けたいし、それが可能なら安い報酬でも我慢できる時もある。

だが、悲しいかな。エーシェは冒険者ギルドの中でも屈指の実力者だ。ギルドは依頼の高い達成率こそが商品。適材適所――高い能力を持つ者が難易度の高い依頼を請け負うのは、経営方針として半ば義務化されている。

今回はたまたま隊商の護衛にありつけたが、次にやってくるのはどんな難儀な依頼か。ベルクートのことだ。きっと途轍もなく面倒な依頼を斡旋してくることだろう。考えるだけでうんざりしてしまう。

「でもま。あの人なら、どんな状況でも喜びそうだけどね」

彼女の口元に浮かんだのは微笑。誰もが尻込みするような事態に敢えて自ら飛び込む、どうしようもない命知らずな男の事を思い出したからだ。久しく会っていないが、本当の意味での冒険者とは、彼の事を指すのかも知れない。

「……ふむ」

一つ唸って、エーシェはコースを変更して爪先を町の外に向けた。

明かりを持っていないとはいえ、先程のまで歩いていたのは民家の周りだ。目が良ければ、窓から漏れる僅かな光で周囲の様子を確認することもできただろうが、そこから離れれば正真正銘の暗黒が彼女の視界を覆うことになる。

一歩進む毎に視界を塗りつぶしていく漆黒を恐れることなく、エーシェは歩き続けた。

民家を抜け、橋を越え、ちょっとした小川までやって来る。

エーシェが降りた川原にはまるで頭上の星空と対を成すように、たくさんの蛍が明滅を繰り返していた。夜になればまだまだ涼しいが、季節はもう夏に差し掛かっている。水辺に蛍がいても不思議ではない。さしずめ地上の星といったところか。

思わず息を吐きたくなるような幻想的な空間に身を置きながら、エーシェの瞳は至って理知的だった。軽く引っ掛けているだけだった外套の前をしっかりと留め、己が轍（わだち）を振り返りって眼前の闇を凝視する。

「さて、どこまで付いてくるつもりなのかな？」

「……気付いていたか」

闇の向こうで苦むした巌のような声が響く。その瞬間、眼前の闇が――闇しかない筈の空間がゆらりと動き、そこから吐き出されるように中年の男が現れた。

いや、現れたというのは正しくない。彼は初めからそこにいたのだから。

武術や暗殺術には気配遮断というスキルがある。これは文字通り気配を遮断し、存在を他者に気取られないようにする技だ。限りなく希釈化された気配は存在さえも透過させ、相手の視界にありながら感知を妨げるという。

「大したものだな」

「私の後ろだけ妙に静かだったからね」

感心したような男の呟きに、エーシェは肩をすくめた。

男の気配遮断は存在の透過までは行かなくとも、かなり高い領域にある。空間から吐き出されたように見えるのは、気配を消す前と後の濃淡の差が激しいからだ。無論、それを見破ったエーシェの感知力も並の性能ではない。

「なるほど。隠遁の極意は消失ではなく融解か。さすがだな」

男が一歩を踏み出すと、川原に下りてきた。草を鳴らし、音を立てて砂利を踏む。これまでの静穏動作の質から考えて、わざと音を出しているのだろう。

エーシェは反射的に距離を保ちつつ男の容貌を観察した。彼女は夜目が利く方だ。加えて、長く暗闇に晒されているので瞳孔も開ききっている。昼間同然とは言えないが、視界はそこまで悪くない。これは天性のものではなく彼女の積み重ねた修練の賜物だ。

年齢は三十代後半。浅黒い肌に肉の削げたような頬。顎には無精髭が生えており、やや長めの黒髪をうなじで無造作に束ねている。外套で身体を隠してはいるが、張りや皺から察するに鎧を着込んでいるようだ。

「私に何の用？」

「俺はルカイ。流れの傭兵だ。訳あって、人を捜している」

エーシェは無言で男――ルカイの続きを促す。

「金髪碧眼。紅い外套の女だ。冒険者ギルドに所属している。得物は剣と魔法。戦闘にかけてはギルド屈指の実力者らしい。名前は……そう、エーシェだ」

そこで一旦区切り、男は彼女の碧眼を見つめた。
「お前がエーシェか？」
「……さあ。どうだろうね？」
ひゅっ。
エーシェは素知らぬ顔で言い終わった直後、風が動いた。ルカイが音もなく地を蹴り、彼女の眼前に躍り出る。
一瞬にして数メートルの距離を走破し、エーシェの間合いに飛び込んだ。だが、彼女の反応速度も負けていない。手首を掴もうと伸びた男の手を弾き、返礼とばかりにこちらも素早く手を伸ばす。互いに肘や膝で牽制し、体勢を崩そうと刹那の好機を狙い――結局、それが訪れる前に、二人は弾け合うように後退した。
二人の間を、涼やかな夜風が流れていく。
「……お前がエーシェだな？」
確認を込めたルカイの問いかけ。構えを解かないまま、エーシェは応じる。
「そうみたいだね。で、私がエーシェだったら、何だって言うの？」
「俺と戦え。先程のような小手調べではなく、全力で斬り合ってもらいたい」
そう言うと、ルカイは外套を脱ぎ捨てた。使い込んで傷だらけになった軟革鎧（ソフトレザーアーマ）と腰に固定された鞘が露わになる。微かに反った刀身を見るに、得物は太刀か。なるほど、確かに傭兵然とした格好だ。
「冗談。何で、私があんたなんかと斬り合いしなきゃならないのよ」
ルカイの言葉を、エーシェは鼻で笑う。
「戦うことが嫌いなんて殊勝なことは言わないよ。じゃなきゃ冒険者なんてやってないしね。でも、何の利益もない戦いをするほど戦闘狂でもないつもりよ」
エーシェの空色の瞳に睨まれ、ルカイは無言になった。しかし、怯んでいるわけではない。どちらかといえば言葉を選んでいるような沈黙だ。
数秒の後、彼はゆっくり口を開いた。
「正直を言えば。俺は、別にお前と戦いたいわけじゃない。俺が戦いたいのは伝説だ」
その言葉に、エーシェは怪訝そうに眉をひそめる。
「お前も知っているだろう、三銃士（さんじゅうし）の伝説を。いや、違うな。お前は知っている筈だ」
今から数十年前。強さと名声と強敵を求め、ここより遥か北の地にある渓谷に棲む白き翼のドラゴンに戦いを挑み、見事勝利せしめた三人の剣士。人々は賞賛を畏敬の念を込めて彼らを三銃士と呼び、その名は辺境中に知れ渡ることになった。
彼女はその伝説を知っている。いや、誰よりも詳細に識っている。何故なら――
「お前は、その三銃士に育てられたのだからな」
ルカイの言葉に、エーシェは無言で肯定を示した。彼女の養父が三銃士の一人だというのは

動かしがたい事実だったからだ。
十年以上前。伝説の一翼、タキネスに拾われたエーシェは剣と魔法、そして戦い方を徹底的に叩き込まれて育った。その結果、彼女は若くして武人としての才能を開花させ、今や最高の冒険者として名を馳せている。彼女はいわば、三銃士の後継者なのだ。
「でも、それって私に立ち会いを求める理由？　伝説と戦いたいなら、直接、北の渓谷に行けばいいじゃない。あの人（タキネス）ならそこで引き篭もっているよ？」
エーシェの至極当然の意見に、男は苦笑した。
「行ったさ。だが、門前払いだ。無理やり戦うこともできたが、彼は竜の寵愛を受けている。下手に手を出せば、戦う以前にアレの腹の中だ。さすがにそれは、な」
アレとは白翼竜のことだろう。エーシェも幼い頃、戯れで彼女に噛まれたことがある。
ドラゴンは死んではいなかった。倒すのと殺すのは違い、時には殺害よりも不殺の方が何倍も困難である。三銃士は地上最強の種――ドラゴンを相手にそれを成し得たからこそ、伝説と呼ばれているのだ。
だが、とルカイは言葉を続ける。
「タキネスはこうも言っていた。養女（むすめ）は自分に一番近い強さを持つと。もし、俺がお前に勝てたなら、その時は自ら戦ってやろうとな」
「それで、わざわざ私のところまで来たと？　あの渓谷から、こんな辺境まで？」
ルカイは黙って首肯する。
「呆れた。何でそんなに伝説に拘るのよ？」
「挑みたい。自分の力を知りたい。そして、あわよくば超えたい。ただそれだけだ」
彼の言葉に嘘はないのだろうとエーシェは直感した。彼の言い分が解るからだ。剣士の懊悩とも呼べる、強い者と戦う事でしか満たされない名伏しがたき心の渇き。剣を使う者の一人として、彼の行動原理を完全に否定することはできなかった。
いや、それはともかく――
「あのくそじじい。私に厄介事を押し付けやがって……！」
忌々しげに、エーシェは北方の夜空を睨みつけた。当然、ここから件の渓谷など見えるわけもなく、ましてや恨み言が届く筈もないが、やらずにはいられなかった。
「それで、立ち会ってもらえるのか？」
「御免被る」
エーシェは力なく手を振った。
「あの人の厄介事を引き受けるつもりはないよ。何より仕事中なんだよね、今。あんたとやりあってケガなんかしちゃうと、仕事に差し支えるでしょ」
それはルカイとの斬り合いを避けるための言い訳ではない。周囲の評価がどうであれ、自分は常に一流でありたいと願っている。そのためにできることは、請け負った依頼を全身全霊で

果たすことだ。その狭間に、私闘を交えるなどあってはならない。
「というわけで諦めてよ」
「そうか」
淡々とルカイは頷いた。だが、身に纏った闘気は一向に薄れない。いや、むしろ、
「ならば、問答無用で挑むのみだ」
熱く、燃え盛っていた。

＋

刹那、夜陰に銀光が走る。
遅れて響く鞘鳴り。澄んだ音を立てて、二つの銀光が交差した。
「……ほう、止めたか」
完全に鞘から抜ききっていない長騎剣で、エーシェはルカイの一撃を受け止めていた。
「私の仕事が終わるまで待つって選択肢はないの？」
「ないな。ようやく見つけた伝説への足掛かりだ。どうして、見逃すことが出来よう」
「くそ、これだから夢に一直線な男ってのは！　空気読め！」
大きく後退しつつ、エーシェは完全に長騎剣を鞘から抜き放った。外套が翻り、周囲を飛んでいた蛍たちが逃げ惑う。
「自分の都合ばっかり押し付ける男は嫌われるよ！」
「構わんさ。俺が勝てば、二度と会うこともあるまい――参る！」
そう叫んで、ルカイは力強く大地を蹴った。
大気を突き破るような鋭い踏み込みだ。全身をバネにした跳躍は地面すれすれの低空弾道を描き、瞬く間にエーシェに肉薄する。
彼女は剣を正眼に構え、ルカイを迎え撃つ。
繰り出される銀閃の一つひとつを避け、捌き、受け止める。刃の軌跡が重なる度に鮮やかな火花が生まれ、蛍の光に混じって儚く散った。
ルカイの剣閃は鎌鼬（かまいたち）のように鋭く速い。太刀使いに共通した特徴だが、彼のそれは更に一段上のものだ。重みで相手を砕き斬る剣の取り回しでは、いずれ無理が来てしまう。速度で劣るエーシェにとって手数の多い斬り合いは不利だ。
（なら、得物を無力化してしまえば）
ルカイが武器を失えば、傷を負う前に戦いを中断できる。仮に素手で挑んできたとしても、徒手空拳の人間が、剣を持ったエーシェに勝てる道理はない。
エーシェは相手の武器を無力化する手段を検索する。

あった。ついこの間、使ったばかりの戦術が。
「我思う故に我あり！」
それは契約の詞。覚醒する神剣機関。神意の元、摂理の歯車が流転り輪廻る。世界は彼女の足元に跪き、従属し、隷属した。事象は螺旋渦がり、新たな律法が紡がれる。
その瞬間、
「我思う故に我あり！」
ルカイも同様の口訣を唱える。それの意味するところを理解しながら、エーシェは呪紋詠唱を止められなかった。いや、たとえ詠唱を止めたとしても変革した事象は解放を待つばかりの状態だ。今更、どうして後に引けよう。
「我が求めは慟哭――【鵺】！」
展開されたのは流動系の魔法において最強と謳われる戦術魔法。高周波の振動で物体を切断する不可視の斬撃。
以前、エーシェに擬態した不定形生命体が持っていた長騎剣をこれで斬断したことがある。これならば、ルカイの太刀を折って無力化することも可能だろう。
だが、それとほぼ同時に、ルカイの魔法も完成した。
「我が求めは静寂――【柳】！」
展開されたのは空気振動を一時的に停止させる流動系魔法だ。
本来は数秒間、音の伝播を封じるだけの補助魔法である。攻撃力はまったくない。しかし、音を媒介にする【鵺】にとって、音を消す【柳】は最大の脅威だった。
エーシェの指先が振るわれるより早く、無音の空間が彼女を包み込む。
その結果、二人を中心とした半径数メートルの空間から音が消失し、彼女が放った超音波の斬撃は打ち消されてしまった。
エーシェは驚愕に目を見開き、思わず防御の手が緩んだ。ルカイはその隙を逃さない。最も手薄なところへ渾身の剣戟を叩き付ける。
エーシェは剣を立てて何とか防いだものの、勢いを殺しきれず、そのまま川岸まで吹っ飛ばされてしまった。その音さえ、律儀に【柳】は吸収し、世界は無音を保ち続けた。
数秒後、思いだしたように世界に音が戻ってくる。
「……反魔法。くそ、あんたも魔法戦士か」
口に入った砂利を吐き捨てながら、エーシェは呟いた。
「そうとも、お前と同じ属質だ。もっと言えば、お前の養父と同じ属質。伝説に挑もうと言うのだから、同じ力くらいは持ち合わせるさ」
「簡単に言ってくれるわね……」
魔法と剣の同時修得は、一般的に難しいとされる。
人間の精神活動こそを力の根源とする魔法は、精神鍛錬を基礎とする剣術と、修得する相性

そのものは悪くない。ただ、複数の属質は、それらを合わせることで真の力を発揮する性質を持っている。

つまり魔法戦士とは、魔法と剣術の並行使用ができて初めて意味がある属質になるのだ。

エーシェが剣戟を受けながら【鵺】を使ったように。はたまた、ルカイが斬撃を繰り出しながら【柳】を使ったように。

それぞれを単体で使うならば、いっそどちらかを集中して鍛える方が効率的だ。万能は器用貧乏とは違う。両立させる力がないのなら、どちらかに切り替えるべきだろう。

「どうした、エーシェ。お前の力はその程度ではあるまい？」

「悪かったわね、この程度で！」

「まだまだ元気なようだな。……我が求めは灼熱」

詠唱の終了とともにルカイの周囲に四つの火球が生まれた。過熱系の戦術魔法。最も基本的な代物だが、それでも人間を殺すには充分すぎる熱量を持っている。

「行け」

口訣と共に、四つの火球が一斉に掃射された。

「舐めるな！　我が求めは凍結！」

エーシェを取り巻く大気の温度が急激に降下した。熱を奪われた大気は含有する水分が氷結することでダイヤモンドダストを発生させる。熱には冷気。過熱系の反魔法だ。

空気を焦がしながら疾駆する四つの火球を、氷霧のヴェールが包み込む。刹那、大量の水蒸気が発生した。

「しまっ――」

もともと暗闇でろくに開けていない視界が、完全に塞がれた。相手はこれを狙っていたのだ。だが、条件は向こうも同じ。これでは剣も魔法も照準ができない筈だ。

その瞬間、水蒸気を蹴散らして突っ込んで来た何かが、彼女を川の中へ吹き飛ばした。盛大に水柱を上げながら転倒する。

（広域に拡大した流動系の魔法か……油断した！）

濡れた髪をかき上げながら、エーシェはよろよろと立ち上がる。彼女の赤外套は水気に弱い上に、これだけ水を吸ってしまえば死重量（デッドウエイト）だ。肌に張り付いて気持ち悪いし、いっそ脱いだ方がマシに思える。無論、それを許すルカイではないだろうが。

そこで気付く。右手に長騎剣の感触がない。さっきの転倒で、どこかに放り出してしまったらしい。探す暇も、もちろんない。

「詰みだな」

川岸まで歩み寄ったルカイが静かに言う。その指先には集束する稲光（いなびかり）。その意味を理解した瞬間、

「我が求めは迅雷――【武御雷（たけみかづち）】」

ルカイの指先から放たれた紫電が水面を伝い、エーシェを痙攣させた。全身が弛緩し、再び水没してしまう。感電した川魚が腹を上にして流されていくが、彼女はそのまま浮き上がってくる気配はなく、沈黙が川辺を支配した。

「ふむ。威力は調整したつもりだったが……失敗したか？」

ルカイは服が濡れるのも構わず川に足を踏み入れた。彼の目的はエーシェの殺害ではない。勝負が決したのなら、助けるのは人として当然だった。

「しかし、この程度なのか。タキネスの養女（むすめ）というのは……」

彼女の年齢を思えば確かに強かった。だが、それでも若干の失望はある。俺に倒される程度では、三銃士の実力も大したものではないのかも知れない。

そう、ルカイが思った時だった。

「……まだ、終わってないわよ」

ゆらり、とエーシェが自力で起き上がった。ルカイの口元に、思わず笑みが浮かぶ。

「耐えたか。だが、それでも感電の影響は残っているはずだ。無理をするな、勝負は決した」

「まだ終わってないわ」

幽鬼のような表情でエーシェが口を開く。ルカイが指摘する通り、今の彼女は万全の状態ではなかった。膝は震え、全身にまるで力が入っていない。立っているのもやっとだろう。絶縁効果があるはずの外套も、水に濡れていては役に立たなかったようだ。

だが、それでもエーシェの戦意は一向に萎えていない。

「誰が、負けっぱなしで終わるもんですか。もし、養父（とー）さんにバレたら、一年間はこのネタで弄られるわ。そんなのはごめんよ。さあ、さっさと剣を構えなさい」

「そうか。では、今度こそ決めるとしよう」

言われるがまま、ルカイが太刀を構え直す。

水に浸かってしまった以上、自身も巻き込む恐れのある放電系の魔法は使えない。しかし、疲弊した彼女を制するのにもう魔法など必要ないだろう。まして、彼女は愛剣を失っている。通常の剣技だけで充分だ。

充分な筈だ。

「ちょっとだけ、本気出すわよ」

そう言うと、エーシェの双眸が輝きを放った。まるで瞳自体が光を発しているような、鮮烈な蒼輝。瞬間、世界が凄絶な悲鳴を上げた。

「なにっ」

ルカイが初めて動揺する。自らの神剣機関で従えていた空間が、一瞬にしてエーシェに奪われたからだ。もはや、この周辺一帯の空間は彼女の掌中にあり、どれだけ彼が足掻こうと事象を操作することができない。今の彼女は事象の支配者そのものだった。

「ならば！」

魔法は使おうと思ってすぐ使えるわけではない。魔法は支配域下の空間の事象を変革させることから始まる。ならば、魔法が完成する前に勝負を決すればいいだけの話だ。
一瞬で思考を切り替えたルカイは、川底を蹴って走り出す。水の抵抗をものともせず無防備に立ち尽くすエーシェに斬りかかった。
「阻め！」
エーシェは右手を水面にかざした。掌には圧縮した空気。それを水中で開放、巨大な水柱を造り上げる。
次いで、吹き飛ばした水を急速に冷却。一秒も満たない時間で水柱は氷柱に豹変し、即席の盾となってルカイの進行を妨げる。
「なんの！」
ルカイは氷柱を太刀で砕いて、なおも前進。
エーシェは連続して氷柱を生成。ルカイを串刺しにする勢いで、刃が水面から生えていく。
「むぅ！」
ルカイは瞬く間に、四方八方から伸びる氷で形成された檻に閉じ込められてしまう。空間の支配権を奪われ、魔法も使いえない今、反魔法で溶かすこともままならない。
「出してあげる」
エーシェが指を鳴らすと、氷が一斉に溶け出した。彼女自ら反魔法を使ったのだ。氷の檻は急速に固体から液体に戻って膨大な運動エネルギーに転換、河川に濁流を生み出した。それにルカイは成す術もなく流されていく。
「……ごほっ」
川岸まで流されたルカイは飲んだ水を吐き出しつつ、太刀を杖代わりにしてよろよろと立ち上がった。氷水で急激に体温を根こそぎ奪われ、全身が激しく衰弱している。心臓が弱い人間ならショック死を起こしてもおかしくはなかった。
じゃぶじゃぶと水を掻き分け、エーシェがルカイに歩み寄る。その手には一本の透明な剣が握られていた。水没した長騎剣の代わりに、流水を凍結させて作ったのだろう。
「私の勝ちね。文句ないでしょ」
氷の剣をルカイの首元に押し当てながら、エーシェは微笑んだ。

＋

「へっぷち！」
可愛らしいクシャミが夜空に木霊する。
決着がつくと、エーシェとルカイは川原に焚き火を起こして身体を温めていた。いくら初夏

とはいえ、濡れたままでは風邪を引く。何とか傷は負わなかったものの、代わりに熱で寝込んだりしたら本末転倒だ。

「何なんだ、お前のその力は？」

ぼんやりと焚き火を身ながら、上半身裸のルカイが口を開いた。

鮮やか過ぎる逆転劇。ルカイは自分が負けたことよりも、この少女の常識を超えた能力こそが衝撃だった。

「何だって言われてもね。魔法としか言いようがないかな」

すっかり濡れてしまった外套を火に当てて乾かしつつ、エーシェは応えた。

彼女は変わったことはしていない。あれは魔法だ。規模や精度は違えど、修練を積んだ魔法使いなら誰でも使える戦術魔法。それを使ったに過ぎない。

「だが、詠唱を行っていなかったな」

「詠唱は精神集中の補助みたいなものじゃない。やろうと思えば詠唱破棄なんて誰でもできるでしょ。効率が悪いけど」

事実、呪文の詠唱がなくとも魔法は使える。エーシェの言う通り、呪文は魔法を使える精神状態を維持するための方法の一つに過ぎないのだ。

ただし、効率は悪い。詠唱で魔法を使うことを覚えている術者は、それ以外の方法では精神集中がうまく働かない。結果、同じ魔法でも完成までの時間にかなり差が出るのだ。一般的に、詠唱した方が魔法の完成は早いのだが、エーシェの場合、それが逆だ。

「戦術魔法を無詠唱法で実行できる魔法使いなど、ほんの一握りだ。しかも、あれだけの規模の事象変革を無詠唱で起動できるなどと……それは生まれつきのものか？　それとも、三銃士に施された修練の賜物か？」

「生まれつき」

何気ない顔で、エーシェ。

「私ね、魔法使いの家系に生まれなんだ。ただ、ちょっと特殊な家柄でね、色々あってこんな体質になっちゃったの。思うだけで魔法を使える身体にね」

「思うだけで、か」

「うん。いやはや、力があり過ぎるのも考えものだよ。私は小さい頃、感情を昂ぶらせて魔法に失敗した。その時の爆発で一族郎党、みんな死んじゃったんだから」

思うだけで魔法を使えると言うことは、それだけ感情に左右されやすいということだ。

よほどの自制心がなければ、簡単に魔法を暴発させてしまう。現に、幼いエーシェは精神が未熟であるが故に魔法を暴発させ、家族を失ってしまったのだから。

「それからすぐだったかな、養父（とー）さんに拾われたのは」

懐かしい過去を回想するように、ふと微笑むエーシェ。

タキネスと出会ったところが、若くして全てを失ったエーシェの人生の再出発だった。

二度と魔法を暴発させることがないよう、強靭な平常心を養うために、エーシェは徹底的に剣術を叩き込まれた。武芸には精神鍛錬があるからだ。おまけに師範は三銃士の一人。環境としては最高だった。

「今思い出しても、あの修行は厳しかったな。死にかけたことは何度もあるし。魔法も、詠唱なんてしなくても使えるのに全部覚えさせられるしさ。まあ、もう慣れたけどね」

苦笑を浮かべて、肩をすくめる。

エーシェにとって剣や呪文は安全装置なのだ。剣術で戦っている間は相手の命は保障され、魔法も詠唱で実行しているうちはまだ暴走の危険はない。彼女の本当の力は、それらを捨てた先に眠っているのだ。

「自分でも身に余る力だと思うよ。でも、これだけの力を持ちながら結局、養父（とー）さんには一度も勝てなかった」

その言葉にルカイは驚愕する。

自分を圧倒した少女が一度も勝てない男。それが、彼が目指していた『伝説』の力だった。

「……なるほど。俺にはまだ伝説に挑む資格はないようだな」

ルカイは薄く笑うと、音もなく立ち上がった。襤褸（ぼろ）の外套を肩にかけ、川原を後にする。

「ルカイ、あんたはどうして養父（とー）さんに挑もうと思ったの？」

そんな言葉を、エーシェは彼の背中に投げかける。

「言っただろう。ただ、伝説を超えたいだけだ」

今一度、ルカイはその言葉を口にした。

だとすれば、本当にそれだけなのだろう。男というのは幾つになっても伝説や英雄といったロマンが必要な生き物なのだ。

「これから、どうすんの？」

「修行を続ける。どの道、お前を倒さなければ伝説には届かない。お前を倒せる日が来るまで俺の剣に休みはない」

「まったく、そこまでして伝説を超えたいなんて……こりゃ病気だね。でも、今度は私が暇な時にしてよね。一応、これでも引く手数多な冒険者なんで」

「善処しよう」

後ろ手に手を振って、ルカイは夜闇の中に消えた。

「やれやれ、とんだ災難だったな」

言いつつ、口元には微笑が浮かんでいる。

いきなり勝負を挑まれ、こっちの言い分などまるで聞かず、問答無用で斬り合った。

しかし、何故かエーシェは彼を憎むことはできなかった。それは恐らく、彼の行動には必ず彼女の養父が絡んでいたからだろう。

タキネスの元を離れて二年。伝説を目指した男との戦いは、エーシェがしばらく忘れていた

懐かしい人物のことを思い出させてくれたのだ。
そのことを思えば、立ち会いくらい許せるに気なる。結果的に負けなかったし。
「まったく。夢見がちな男ってのは……へっぷち！」
アシュランに帰ったら、久々に手紙でも書くか。
小さくクシャミをしながら、エーシェはぼんやりとそう思ったのだった。

この後。
川に落ちたことが原因で、エーシェはすっかり風邪を引いてしまった。
熱は少々あったが、声枯れも咳もなく、意識もハッキリしていたために隊商の面々には悟られずに済んだ。
幸い、盗賊の類も出現せず、移動中の馬車の荷台で休養を取ったことにより、その日の晩には全快したのだが――
どうやら、菌を他の隊員にうつしてしまったらしい。
風邪は隊員の間で一気に蔓延していった。倒れた人数は一、二名では収まらず、隊商の労働力を一気に奪って行く。最終的に、移動さえもままならない状態に陥り、いきなりのトラブルに頭目は頭を抱えた。
まさか自分が原因だとは言えないエーシェは、助け合いの大義名分の下、病気で倒れた面々の代わりに無心で働いたという。

第七話　閃光の令嬢　Oh My Sister

「へ？　オイラが冒険者になった動機ですか？」

当惑を表に出さないように気をつけながら、ランポは口を開いた。

とある昼下がりの辺境都市。

この街を冒険の拠点として活動しているエーシェは、仕事仲間のランポ、ギルドの受付嬢であるルクレールと共に、馴染みの大衆食堂の隅っこで昼食を摂っていた。

貴族令嬢のような容姿を持つエーシェだが、食器の扱い一つにも気を遣うような小洒落た店よりも、こういう雑多な定食屋の方が性に合っている。他二名も同様だ。

ただ、人がごった返す食堂というのはとにかく暑い。

季節はまだまだ初夏だが、店内は本場さながらの熱気に支配されており、さすがのエーシェも外套を脱いでいる。最近は特に気温が上がってきたためか、その下にはいつもの白い法衣（クローク）ではなく、タイトな革服を着ていた。

仕事柄、何かと顔を合わせることが多い三人だが、彼女たちは私的（プライヴェート）でもしばしば食事をする間柄である。

エーシェの向かいに座るランポは、基本的に後方支援（バックアップ）型の属質であるためか、前衛（フォワード）型の彼女とパーティを組むことが多い。その流れで私生活でも自然とつるむようになり、現在のような関係になっている。公私共に相棒のような存在だ。

隣席のルクレにつても同様である。

受付嬢という職業柄か、エーシェとは駆け出しの頃から交友があった。彼女の明朗な性格と年齢の近さもあってか、ギルドの仲間内では最も友人に近い存在だ。休日は寝るか、武器屋の二択しかないエーシェに、ルクレが第三の選択肢を与えることもしばしばだ。

ともあれ。そんな普段の食事風景に、降って湧いた突然の疑問。エーシェがそれを口にした時のランポの反応が、冒頭のそれだった。

「何でまた、そんなこと聞くんです？」

「明確な理由があるわけじゃないんだけど。ちょっとした興味本位かな？」

パンを小さく千切って口に運びながら、エーシェが続ける。

「冒険者ってさ、結局のところ、民間では対処しきれない厄介な事件の解決が仕事なわけじゃない？　自然とヤバイ依頼に足を突っ込むことになるし、下手したら命が幾つあっても足りやしない。そんな仕事を敢えて選んだからには、何か特別な動機があるのかなと」

彼女の台詞に、ランポは小難しい顔をして腕を組んだ。

「……まあ、母さんの遺言に従ってってところっスかね」

「お母さんの？」

「はい。オイラの狩りの技術は、森で狩人をやっている父さん直伝っスが、魔法は母さんから教わったんっス。母は戦闘魔導士（せんとうまどうし）の血統らしくて」
「へぇ」
エーシェは意外そうに相槌を打った。ランポが狩人の出身なのは聞いていたが、母親が魔法使いの家系だったとは初耳だ。かく言う自分も、似たような出生なのだが。
戦闘魔導士というのは、文字通り戦闘に特化した魔法使いの事だ。
魔法の威力は神剣機関（エインセル・エンジン）の回転数に等しい。術の知識や錬度は効果を上昇させるが、威力に直結しているのは人間が精神の内に宿す神剣機関の出力だ。その回転数は先天的に定められており、増設は不可能とされている。
魔法に特化した子孫を作ろうと、優秀な魔法使い同士の交配を行ったのが戦闘魔導士の成り立ちだ。幾重にも血を積み重ねて生み出された高品質の魔法使いは、王国軍に高額でスカウトされ、戦場で幅を利かせる『兵器』として運用される。ランポもまた、その血を引いた血統種だという。
「へぇ、前々から魔法の構築が上手いなーとは思っていたけど、血の成せる業だったんだね。ランポは放電系の限定だから……もしかして、〈雷神〉の生まれとか？」
「らしいっスよ」
「……マジで？」
エーシェは驚きに目を見張った。その名は、放電系に於いて最強と謳われる一族の異名だからだ。冗談半分で言ってみたつもりが、よもや大当たりだとは。
ランポは、慌てたように訂正する。
「といっても、オイラは正当な血統って訳じゃないっス。母さんは分家の末っ子で、戦闘訓練ばっかりの実家に嫌気が指して出奔した人なんで。まあ、それでも魔法の素質だけは血に約束されていた訳ですが」
神剣機関が遺伝に依るものである以上、宗家と分家では自（おの）ずと性能に差が出るものだ。化物じみた魔法の才能を誇るエーシェでさえ分家の、なおかつ混血（ハーフ）に過ぎないランポの能力を高く評価している。ならば、宗家にはどれほどの力があるのだろうか。
ランポは話を戻す。
「それで、母さんが言ったんっス。折角、オイラにも戦闘魔導士の血が流れているんだから、その才能を人の役立つことに使えって。それで、狩りの技術と魔法が活用できる仕事って何があるかなって思って」
「冒険者ギルドの採用試験を受けたんだ？」
エーシェの要約に、ランポは大きく頷いた。
「はい。冒険者の仕事は野外活動（フィールドワーク）が基本ですからね。狩りの知識も使えるし、敵が出れば魔法も役立ちますから。……まあ、妹からは反対されましたけどね。危ないからって」

セリフの後半の部分を聞くや否や、エーシェは目を輝かせた。
「え、なに？　ランポって兄弟がいるの？」
「……ええ、妹が一人」
「いいなぁ。私、兄弟と一緒に暮らした覚えがないから、そういうのって憧れちゃう」
途端に、エーシェの口調が明るくなる。血の繋がった兄弟がいるという、ただそれだけの事実に対する羨望と憧憬。
「ね。やっぱり妹って可愛いものなの？」
好奇心も露わに、エーシェはテーブルに身を乗り出して問いかける。誰もが羨む美貌と澄み切った空色の瞳に見つめられ、ランポは気恥ずかしくて言葉に詰まった。逃げるように視線を下げると、ぐっと押し上げられた胸の谷間が彼の網膜を直撃する。
「ごくり……」
思わず、ランポは生唾を飲み込んだ。
これまでにもしばしば触れてきたが、エーシェは戦闘者でありながら非常に女性らしい体型をしている。肩や二の腕はかっちりとしていて筋肉質ではあるが、腰回りはキュッとくびれ、下腹部にも無駄な贅肉は一切ない。それとは裏腹に、尻から太股にかけての稜線はふっくらとした丸みを帯びており、どこか肉感的な艶やかさを備えている。
中でも乳房の発育が顕著だ。同年代の平均と比較しても群を抜く彼女のそれは、端的に表現するなら巨乳に分類される代物だ。具体的な数字は敢えて秘するが、身体の起伏を遮る外套の上からでもそうだと判別できるだけに並のサイズではないだろう。しかも、今の彼女はかなりの軽装で、どんと前に張り出た双丘の主張を憚るものは何もなかった。
エーシェも人並みの羞恥心を持ってはいるが、自分のスタイルに対する認識が欠落しているきらいがある。谷間を作るように腕を組んだり、無防備に飛んだり跳ねたりして胸を弾ませるのは無意識の成せる技だ。おかげで、精神的に初心（うぶ）なランポは彼女の些細な仕草の一つひとつにどきまぎしてしまい、いつも内心で悶々としている。
「いやま、可愛いと言えば可愛いんですが、あいつの場合、ちょっと行き過ぎた部分があってですね。そこが肉親としての悩みの種ではあったんですが……えーっと、そ、そういう先輩はどうして冒険者家業に？」
身内の話をするのはやや抵抗があるのだろう。ランポは豊かな胸元の誘惑を振り切って視線を逸らしつつ、お茶を濁すように話題を変えた。
「私が冒険者になった理由、ね」
空気を読んだエーシェは妹に関する詮索を辞め、改めて椅子に座り直した。
「オイラ、先輩の実力なら、王国騎士団だって高く評価してくれると思うンですがね」
「……ま、そういう未来もあったかも知れないわね。それと同じように、武器そのものを執らなかった未来も」

エーシェはじっと自分の掌を見つめた。細くしなやかだが、剣の修練で厚くなり、すっかり硬くなった手のひらを。至るところに傷が残った戦士の手を。

それをぎゅっと握り締め、彼女は淡く微笑んだ。

「それでも、私は冒険者になること選んだ。それが、せめてもの――」

「ふぁーあ」

エーシェが何事か答えようとした時、隣から間の抜けた吐息が聞こえた。彼女の隣に座っていたルクレが大きな欠伸をしたのである。

「……なんか眠たそうね、ルクレ」

見事に話の腰を折ってくれたルクレに、二人は思わず苦笑いしてしまう。

「そうなのよ。ここのところ忙しくて。マリィちゃんが産休でお休みしているから、代わりにルクレが頑張らないといけないんだけど、やっぱり手が回らないんだよね。おかげでちょっと疲れ気味」

ルクレはじんわりと目じりに涙を浮かべながら、疲れた口調で言った。

普段は率先して会話に加わってくる彼女がこれまで無言だったのは、日頃の疲れが溜まっているのが原因らしい。

ちなみにマリィとはルクレの同僚で、ギルドの受付嬢の一人だ。既婚の女性で、一週間程前から産休を取っている。

「昨日も遅くまで依頼書の整理に追われて、あまり寝てないんだよね。これ食べたらまた書類整理かー」

テーブルに置かれた野菜スープをスプーンで行儀悪くかき回しながら、ルクレは軽く愚痴を零す。しかし、支部支配人（ギルドマネージャー）に恋慕する彼女のこと、どれだけ疲労が蓄積しても与えられた役割は果たすだろう。

「あーあ。せめて一人くらい助っ人がいてくれたら、かなり仕事がさばけるのなぁ。こっちがエーシェちゃんたちに依頼したくなっちゃうよ。本末転倒だけど」

ルクレはスプーンを放り出すと、椅子の背もたれに思い切り体重を掛けて伸びをした。本当はスプーンではなく仕事を投げ出したいのだろうが……悲しいかな、想い人の前で職務怠慢は許されない。恋する乙女の試練は続く。

「事務の人手不足も深刻っスね」

うんうんと頷きながら、ずず、と親父臭く音を立ててスープを啜るランポ。人手不足は現場にも言えることなので、手が足りない苛立ちは良く分かる。とはいえ、助っ人の力が中途半端ではかえって足手まといだ。

現場の人員不足はギルド側の徹底した実力主義の採用基準が原因だが、事実、生半可な能力では到底依頼を完遂することはできない。依頼達成率の高さがギルドの売りである以上、現場職員の採用は石橋を叩くが如く慎重に行われる。

おかげで、仕事量は一向に減らず、依頼も尽きる兆しがない。
現場組も今はゆっくりと昼食を摂っていられるが、いつまた困難で厄介な事件を担当させられるか分かったものではなく、ルクレの境遇は他人事ではなかった。
「そーなの。おまけに、文字ばっかり追っているせいで目は充血するし、肩もカチカチのコチコチで……」
ルクレは眉根を寄せ、肩を軽く押えながら首をポキポキと鳴らした。肩凝りの症状は表面に現れないため、傍目には凝っているかどうかの判断はできないが、彼女の重苦しい表情が本当だと語っている。
そこで、ルクレはエーシェを――否、彼女の胸のあたりをじっと見る。
「エーシェちゃんってさぁ、肩凝り酷そうだよね」
「え？　どうして？」
「だって、こーんなにおっぱい大きいじゃない！」
言葉の意図が分からずに首を傾げるエーシェ。ルクレはそんな友人に抱きつき、胸を鷲掴みにした。彼女の小さな手では収まりきれない巨大な肉塊が、むにゅうっという擬音を立てて、いやらしく変形する。
「ぶふぅ！」
ちまちまとスープを飲んでいたランポが、盛大にそれを噴き出した。その先――向かいの席に座っているエーシェは、間一髪、空の皿を盾にして飛沫を防ぐ。
「危なっ！　ちょ、何でランポが噴き出すのよ？」
「げほげほ……いえ、すいません。いきなりだったもんで、つい……」
「ん～、ランポちゃんには刺激が強すぎたかにゃ～？」
気道に入ったのか、激しく咳き込むランポをにやにやと眺めながら、なおも執拗に胸を揉み続けるルクレ。
「ちょ、こら、ルクレ！」
「ん～、ここがええのんか？　ええのんか？」
「じゃなくて！　あんまり強くするとはみ出しちゃうでしょ！」
何が、とは敢えて語るまい。ともあれ、少女達の過激なスキンシップに、ランポはひたすら目を背けるだけだ。二人の語らいは、若い青少年には刺激が強すぎる。
「けしからんおっぱいだよね、相変わらず。それに引き換え、寄せて上げても溝すらできない我が胸の脆弱さよ……」
エーシェの柔らかさを存分に堪能したルクレは、自らの胸をさすりながら席に戻った。乳房に触れてからかっている内は良かったが、段々と越えられない何かを意識してしまい、切なくなったらしい。
「その胸、半分でいいからくれればいいのに」

「私としてもあげたいのは山々なんだけど、人体ってそういう機能ないから。あと、私、肩が凝ったことなんて数えるくらいなんだけど」
「えー、嘘だぁ。そんなに立派なものぶら下げておいて」
じっとりとしたルクレの視線に、エーシェは肩をすくめる。
「本当だって。身体を鍛えているとね、簡単には凝らないものなの。筋肉と肩甲骨の関係だと思うんだけど」
「じゃあ、貧乳なのに肩が凝ってるルクレは、鍛え方が足りないってこと？」
「そういう訳じゃないんだけど……ん？」
その瞬間、エーシェの目が何かを探るように細くなった。
「表の方が騒がしいっスね」
ランポも何か感じたらしい。よく耳を澄ますと、表通りの方から人々の荒々しい怒声が聞こえてきた。他の客も気になっているようで、店内はざわめき、席を立って様子を見に行く者も見受けられる。
「なんだか荒れてるねー。喧嘩かな？」
「女の子の声も聞こえるっスね。ここからだとよく聞こえないっスけど」
都市の名を冠していても、アシュランは辺境の一部だ。住人の数が増えれば、それだけ諍いも増える。特に、交易の中心であるこの街は冒険者や傭兵といった血の気の多い連中が多く、路上での喧嘩はそこまで珍しいことではない。
「放っておいても自警団が止めに入るでしょうけど、このままだと飯（メシ）が不味くなりそうね」
そう言うと、エーシェは席を立った。喧嘩を行うのは自由だが、それを黙認してしまうほど、この街は無法地帯ではない。付近に影響が出るようならば自警団か善意ある第三者が介入して収束させるのが暗黙の了解だ。
「ちょっと様子を見てくるわ。二人はご飯食べてていいから」
「お供は要るっスか？」
エーシェに続くようにランポも腰を上げた。彼女の実力を知らぬわけではないが、もしもということもある。男手はあった方がいいだろう。
しかし、彼女はそれを手で制す。
「いらないわよ。ちょっと見てくるだけなんだから」
ひらひらと手を振って、表通りに繋がる入り口へ歩いて行く。そこでふと、思い出したように足を止めた。肩越しにランポを見て、一言。
「ランポ。私がいない隙におかず盗ったら承知しないわよ？」
「そこまで信用ないんっスか、オイラ」
あんまりなセリフに、ランポは切ない涙を流すのだった。
（折角、心配したのに……）

＋

表通りには、既に人だかりが出来ていた。
輪の中心には体格の良い男が三人。汚れた硬革鎧（ハードレザーアーマ）を着ており、腰には鞘がある。見るからに傭兵といった風情。如何にも荒っぽいことが好きそうな連中だ。
「おやまあ」
その相手を見た時、エーシェは思わず呟いた。
彼らと対峙しているのが、年若い女の子だったからだ。それもたった一人で。てっきり傭兵同士の諍いだと思っていたので、この組み合わせは些か予想外だ。
腰の辺りまで真っ直ぐ伸びた黒髪に、黒曜石のように艶やかな瞳。
華奢な身体を白のワンピースで包んだ少女は、道端にひっそりと咲く白百合を連想させる、素朴な美しさを湛えていた。
どう見ても喧嘩や諍いとは無縁そうなお嬢様。にも関わらず、傭兵三人が放つ威圧感に屈服することなく、凛と対峙している。
エーシェが驚いたのはそこだった。自分のような人間はともかく、年頃の娘が厳つい男達に一斉に睨まれたら、怯えるか立ち竦むかが普通ではあるまいか。
「ねえ、これ、どういう喧嘩？」
エーシェは近くにいた野次馬に尋ねた。
「俺もよくわからないんだが、あの子があいつらに道を尋ねたのがきっかけらしい」
「……道を聞いただけで？」
さすがのエーシェも絶句する。いくら血の気が多い連中が集まるアシュランとはいえ、道筋を尋ねただけで喧嘩沙汰になるなど前代未聞だった。
「冒険者ギルドに行くにはどうすればいいですか、と尋ねたんだそうだ」
それを聞いて疑問が氷解した。エーシェは生温く微笑む。
傭兵にとって、実は冒険者は商売敵のような存在だ。
本来、冒険者が主に請け負っている害獣駆除や護衛などの仕事は傭兵が行っていたのだが、ギルドが成立してからは冒険者側に依頼が集中していく一方である。今では、傭兵の中で安定した収入を得ているのは、実力のあるほんの一握りのみとなってしまっていた。
要するに、冒険者と傭兵は仲が悪いのだ。
仕事が少なくなった傭兵に、よりにもよって冒険者ギルドの道筋を訪ねるのは最大の皮肉だろう。傭兵三人が喧嘩腰になってしまった気持ちも理解できるが、反面、その程度の事で女に手を上げるなど、傭兵としての実力もたかが知れている。

「タイミングが悪かったんだろうよ。けど、あの子も大したもんさ。あんなに怒鳴られているのに、涙一つ出さないんだから」
「女の子は悪くないってことか。なら、さっさと止めてあげれば良いのに」
「おいおい、相手は傭兵だぜ。しかも、三人だ。町民同士の喧嘩ならともかく、考え無しに飛び込めるレベルじゃないって分かるだろ？」
この野次馬の言いたいことも分かる。傭兵の多くは背丈も高く筋骨隆々。例え武器を持たずとも、戦闘経験のない町民が束になって敵う筈がない。怪我人を増やすだけだ。
「でも、このままじゃ痛めつけられた挙句に路地裏コースだね。自警団は？」
「今、何人かが最寄りの詰め所に呼びに行っている」
「それなら安心――って、そうも言ってられないか！」
瞬間、エーシェの姿が消えた。いや、そうとしか見えない速度で走り出したのだ。野次馬が視線を戻すと、傭兵と女の子の間に彼女が入っていた。
少女に向かって振り下ろされた、男の拳を掴んで。
「はーい、ストップ。こんな往来で女の子相手に手を上げるってのは、感心しないね」
「なんだ、てめぇは！」
「善意の第三者」
男の手を離すと、エーシェは少女を庇う様に前に立った。いつものように紅の外套を纏っていたなら、さぞや絵になったことだろうが食堂に置いたままだ。しかし、彼らは冒険者に敵意を持っているようなので、彼女を象徴するあの赤い外套は無くて正解だったかも知れない。
と、思った矢先。
「兄貴、こいつは冒険者です！」
「なんだとぉ……？」
傭兵たちの雰囲気が、より険悪なムードへがらりと変わる。
「テメェら、ヤっちまえ！」
殺(や)るのか、それとも犯(や)るのか――発音の意図は読み取れなかったが、降りかかる火の粉には手加減しないのがエーシェの流儀だ。掴みかかって来る三人の傭兵を、彼女は毅然と迎え撃つ。
男の手が伸びた瞬間、エーシェがそれを払った。それと同時に、素早く相手の懐に滑り込み、高速で反転。発生した回転力を利用して、捻るように男を投げ飛ばす。
ろくに受身も取れないまま、硬い地面に背中から叩きつけられ、男は悶絶した。衝撃で呼吸器が麻痺し、仰向けで激しく咳き込んでいるところへ、とどめとばかりに鳩尾(みぞおち)に踵を叩き込む。泡を吹いて、男は気絶した。
「テメェ、よくも！」
「ぶっ殺すぞ！」
仲間を倒され、すっかり逆上した二人は口々に叫ぶと、エーシェに飛び掛かった。

振るわれる拳。彼女はそれを苦もなく躱(かわ)し、捌(さば)き、叩き落す。完全な徒手空拳のまま、二人をいいようにあしらっている。桁違いとは、まさに彼女のことを指すのだろう。
やがて、傭兵二人は最初に倒された男と同じ運命を辿った。投げられ、鳩尾を突かれた巨大な図体が、力なく地面に仰臥する。
途端に沸き起こる拍手喝采。彼女の圧倒的な強さに、野次馬は興奮状態だ。
剣や魔法を使わずとも、素手だけで相手を制圧する力量。彼女の戦士としての実力は、平凡な傭兵では足元にも及ばない高みにあるのだろう。
「ご助力、感謝いたします」
エーシェの戦いを背後で見守っていた少女が、ぺこりと頭を垂れた。
「災難だったわね」
「ええ、本当に。私(わたくし)はただ道を尋ねただけですのに」
少女は不機嫌そうに顔を歪めた。あんな目に合ったのだから、当然といえば当然だが。
「尋ねた相手も悪かったけどね。ところで、冒険者ギルドに行きたいんだって？」
「まあ、ご存知でしたか」
「あいつらも言っていたけど、冒険者なんだ、私。だから、案内はお安い御用よ。ここで知り合ったのも何かの縁だし、連れてってあげようか？」
エーシェの申し出に、少女は表情を柔らかくした。
「ご親切にどうも。私はフルミーネ。どうか、ミーネとお呼び下さい」
「私はエーシェ。よろしくね、ミーネ」
二人が自然と友愛の握手を交わそうとした、その時。
「待てや、こら……」
エーシェに倒された傭兵の一人が、よろよろと起き上がった。
「腐っても傭兵か。しぶといわね」
舌打ちし、再び臨戦の構えを見せるエーシェ。それを、今度はミーネが制する。
「お待ちになって、エーシェさん。これ以上、貴女が手を上げる必要はありません」
何か言いたげなエーシェを抑え、ミーネは悠然と一歩を踏み出した。そして、雪の様に白い喉が涼やかに言葉を紡ぎ始める。
「――我思う故に我あり(コギト・エルゴ・スム)」
刹那、エーシェは驚愕に目を見開いた。
理由は語るまでもないだろう。ついさっきまで無力な少女だと思っていたミーネが、よもや魔法使いだったとは。しかも、唱えているのは戦術魔法の呪文。三人の屈強な傭兵に囲まれて眉一つ動かさなかったのは、こんな切り札があったからか。
いや、そんなことより。
「ちょっと待って！　町中で戦術魔法の使用は」

「我が求めは迅雷――【武御雷(たけみかづち)】」
エーシェは慌てて制止を呼びかけるが、その叫びはミーネに届くことなく、遂に魔法は完成してしまった。放電系戦術魔法。その代名詞ともいえる紫電の矢が、立ち上がった男の身体に向かって放たれる。回避も防御も間に合わず、男は、今度こそ完全に気絶した。
周囲がしん、と静まり返る。
「いかがです？　これでも、魔法に関しては少々自信があるんですよ」
頬を少し赤らめ、しっとりとミーネは微笑んだ。習い事の成果を初めて家族に披露する幼女のような印象。結果に関わらず、頭を撫でてやりたくなる衝動に駆られてしまうが、この時のエーシェにはそんな余裕はなかった。
「あー、うん。それは見れば分かる。とにかく逃げようか」
彼女にしては珍しく冷や汗をかきながら、ミーネの手を取って走り出す。ミーネが魔法を使った時点で、野次馬も蜘蛛の子を散らしたように去っていった。
ミーネは困惑気味に尋ねる。
「エーシェさん、何故、私たち逃げなければなりませんの？　悪漢を退けるのが、悪いことなのでしょうか？」
「ううん。それ自体は正しい事よ。でも、その手段が問題だったの」
よく分からない、とばかりにミーネは首を傾げる。
「えっとね、別にアシュランに限ったことじゃないけど、町中での戦術魔法の使用は全面的に禁止されてるんだよ」
エーシェが言っていることは真実だ。都市の多くでは、居住区内部における戦術魔法の使用を全面的に禁止している。
理由は唯一つ。危険だからだ。
魔法に比べれば、不届き者が懐に隠し持っている光物など脅威には程遠い。短刀などより、遠距離から飛来する火球や電撃の方がよほど物騒なのだから。
「まあ、そうでしたか。一つお尋ねしますが、使うとどうなってしまうのです？」
「自警団に捕まる」
エーシェは即答した。
魔法は禁じたからといって禁止できる力ではない。だからこそ、その禁を破った者に対する抑止、捕縛、管理を担う存在が必要となる。その権限を、街を守る一環として領主から与えられたのが自警団と呼ばれる組織なのだ。
「自警団には〈剣十字〉っていう特務部隊が編成されてるんだけど、そいつらがまた化物揃いでね。ちょっとした魔法でも徹底的に叩かれる。そのおかげで魔法犯罪はほとんど起きてないけど、安全のために魔法使いは魔法を使うのを自粛しているんだ。どうして使わざるを得ない状態に陥らない限りはね」

「……申し訳ありません」
エーシェの言葉を聞き、自分の取った行動が如何に軽率だったか気付いたのだろう。ミーネはしゅんと落ち込んだ。それに、エーシェはウインクで応える。
「いいってば。魔法を犯罪に使う奴は埃も立たないくらい叩かれるけど、こっちは正当防衛。話せば分かってくれるよ。彼らも鬼じゃないからね」
「でも、逃げるんですね？」
「逃げる。捕まらないに越したことはないから。それに、実は私も前科持ちなんだ」
そう真顔で言うエーシェに、ミーネはくすりと上品に笑った。
「あ、まずい」
何かを見つけたのか、エーシェは急に角を曲がると建物と建物の隙間に入り込んだ。隙間は狭く、二人は抱き合うような格好で身を潜める。
「ど、どうされたんですか？」
ミーネはくぐもった声で質問した。彼女の身長はエーシェよりも頭一つ低い。その為、抱き合うような体勢になると、顔が胸の谷間にすっぽり埋まってしまうのだ。
「自警団と鉢合わせしそうになった。通り過ぎるまで待って」
エーシェの視線は隙間の外へ注意深く向けられている。ふくよかな胸の谷間に挟まれて窒息しそうなミーネを気遣う余裕はないらしい。
自警団の制服が表を通り過ぎたのを確認すると、エーシェは安堵の息を吐いた。
「よし、もう良いわね――って、ミーネ！」
自分の胸の中でぐったりしたミーネを見て、エーシェが悲鳴を上げた。急いで隙間から這い出ると、彼女を締め付ける柔らかい牢獄から解放する。
「ご、ごめんね。苦しかった？」
「い、いえ、お気になさらず。それにしても、あの、立派な胸をお持ちですね」
ミーネは酸欠で顔を真っ赤にしながら、自分を圧殺しかけた二つの膨らみに羨望の眼差しを向けた。今日二度目の好奇な視線に、エーシェはくすぐったそうに身をよじる。
「無駄に大きいだけだよ」
「それが何よりも羨ましいのですが。私も、もう少しばかり膨らんでくれれば……」
ミーネは物悲しげに自分の胸元をさすった。
清楚なワンピースから見受けられる膨らみは至って控えめだ。エーシェとしてはこれくらいのサイズの方が可愛い思うのだが、当人の思惑は違うらしい。
「やはり、殿方は大きいほうが喜ばれるのでしょうか」
「どうだろうね。まあ、うちの後輩君は大きいのが好きそうだけど」
エーシェは、軽装する度に真っ赤になってオロオロするランポを脳裏に思い浮かべた。別に見られてもどうでもいいエーシェだが、目を背ける寸前、彼がどこを見ているかぐらい知って

いるつもりだ。まあ、それが男子全般の見解かどうかは不明だが。
「さて。じゃあ、冒険者ギルドに行きましょうか。あ、聞きたかったんだけど。ギルドに何の用なの？　依頼？」
「いえ、私の兄が冒険者をやっておりまして、その様子を見に来たのです」
応えたミーネの表情が僅かに曇る。
「私は反対したのですが、どうしても冒険者になると言い張って。私は、故郷の森で父と母と兄の四人で仲良く暮らしていければ幸せだったのに、私に黙って辺境都市へ行ってしまったのです」
「ふぅん。じゃあ、お兄さんを説得しに来たの？」
相槌を打ちつつ、エーシェは困ったような顔をした。事務を担当するルクレと同様に、現場の人手も決して多いとは言えない。もし、ミーネの目的が兄を連れ戻してしまうことならば、ギルド的には大きな損失を抱えてしまうことだろう。
そんなエーシェの内心を読んだのか、ミーネは安心を促すように付け加える。
「いいえ。兄が冒険者としてやっていけているのであれば、連れ戻す必要はありません。私は本当に様子を見に来ただけなのですよ」
「……そっか。お兄さん想いなんだね」
「はい。お慕いしております」
ミーネはぽっと頬を赤らめた。
「森を去ってからというもの、私は一日たりとも兄のことを忘れた事はありません。常に想い続けるのは兄のことばかり。無茶をしていないか、食事はちゃんと摂っているか、変な女性に付きまとわれていないか……心配で心配で、胸が張り裂けそうになります。特に、女性関係が悩みの種です。兄は純粋で、心優しい方ですから。悪女に言い寄られても、断る事ができないでしょう。もし、私以外の女に現を抜かしているようなら、私はその女を抹殺して兄の正気を戻さねばなりません。私は兄を信じていますが、男性が女性の色香にとても弱いことも知っております。若さ故の過ちは誰にでも起こり得る事。兄が道を踏み外す前に、それを是正するのが私の役目なのです。元を正せば私の身体の貧相さが元凶。あと少し、もう少し胸が豊かだったら、兄を森に引き止めて、蜜月のような日々を過ごせましたのに」
熱っぽい瞳で兄を語るミーネに、エーシェは薄ら寒いものを感じた。これでは兄を想う妹というよりも、男の浮気を病的なまでに懸念する恋人のようだ。同僚の誰が兄に当たるかは知らないが、実家ではさぞかし気苦労が多かったことだろう。
「……あ。申し訳ありません。私、どうしても兄のことになると、自制が効かなくなる性質のようでして」
はっとしてミーネがこっちの世界に返ってくる。羞恥に染まる彼女を見て、エーシェは乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

「そういえば、エーシェさんも冒険者でしたね」
「……ああ、うん。一応ね」
「では、同僚にランポという方はおりませんか？」
――時が止まった。
彼女がその名を知らないはずがない。仕事の同僚であり、相棒であり、ついさっきまで一緒に食事をしていた少年の名前を。
ミーネが兄に対して並々ならぬ感情を抱いているのは先程の言動から明らかだ。そんな彼女に自分とランポの関係を説明して良いのだろうか。勿論、エーシェとランポは色気のある関係ではないが、何と言うか、誤解しそうな気配が充満している。
かといって黙ったままでは不自然だ。エーシェは脳を最大限に稼動させ、差し障りない説明文を思考する。
「あー、うん。知ってるヨ？　同じ職場だからね、知っていても可笑しくないデショ？」
「どうして問い返していらっしゃるのかよく分かりませんが、やはり兄とエーシェさんは同僚の関係ですか」
「……やはり？」
エーシェは得体の知れない寒気を感じながらも、続きを促す。
「先程、エーシェさんに抱きしめられた時、僅かに兄の香りがしたので。かなり近しい間柄なのだろうな、と邪推していたのです。まあ、御同僚なら仕方ありませんね」
「あんたは犬かっ」
「いえ、それほどでも」
にっこりと微笑むミーネ。目の錯覚だろうか、どこか作り物めいている気がする。
ここにきて初めて、エーシェは助ける人間を間違えたと理解した。そもそも魔法を使えるのなら、ただの傭兵くらい敵ではなかったのだ。兄に対する執着といい、人間相手に戦術魔法をぶっ放す冷酷さといい、何と言うか、この娘からは非常に危険な匂いがする。
ミーネは二人が同僚であることを「仕方ない」と言った。仕事の関係なら接触する異性の存在も仕方ないと。
だが、実際はそうではない。仕事以外でもよくつるむし、一緒に食事をするような関係だ。そこに恋愛感情などという甘っちょろい概念は介在しないが、ただの同僚ではないことも確かである。
もしそのことがばれたらどうなるか、考えただけでも身震いしてしまう。
（こりゃ、さっさとギルドに案内して別れた方が良さそうね）
できるだけ穏便に事を済ませよう。
そう決心したエーシェだったが、向こうの通りから見知った人影が近付いてくるのが見えた瞬間、頬を引き攣るのが分かった。

噂をすれば何とやら。駆け寄ってきたのはミーネの兄、ランポその人である。
思わずエーシェはこめかみを押さえた。事態が悪い方向に転がらないことを祈らずにはいられない。たとえそれが焼け石に水だとしても。
「先輩！　帰りが遅いから心配しましたよ！」
主の帰りを待ちわびた飼い犬のような笑顔。エーシェはもう泣きたくなった。
「先輩が喧嘩で負けるわけないでしょうけど、こんなに遅いのは妙だと思って、あっちこっち探してたんっスよ？」
「……心配してくれてありがと。ところでランポ、隣にいる女の子、誰か分かる？」
「へ？」
エーシェの姿しか眼中になかったのか、ランポは彼女に指摘されて、ようやくミーネの存在に気が付いた。
ランポは驚きの声を上げる。
「ミーネじゃないっスか！　なんでアシュランに？」
「お兄様のことが心配になりまして。如何お過ごしかと、様子を見に来たのです。お怪我などはされておりませんか？」
無視されて面白くなかっただろうに、ミーネはそれをおくびにも見せず、上品な笑顔で兄の問いに答えた。
「まさか。ケガなんかするはずないっスよ。オイラはまだまだ未熟で、いつも先輩に守られてばかりっスから。ね、先輩？」
ミーネの眉根がピクっと痙攣し、唇が引き攣った。
「お食事などはちゃんと摂られていますか？」
「それも心配無用っス。さっきも、先輩と一緒に食べたところっスから。ね、先輩？」
「……変な女性に言い寄られてはいませんか？」
徐々に低くなっていく声。妹から滲み出るほの暗いオーラに気付くことなく、ランポはどこか照れたようにエーシェを見た。
「むしろ、オイラが先輩に付きまとっているようなもんっスよ。ね、先輩？」
「……この馬鹿たれ」
後で張り倒してやる。エーシェは真剣にそう思った。
「……エーシェさん？」
底冷えするような声。振り返ったミーネの表情はまるで幽鬼のようだ。
「貴女は信用できる方だと思っていましたが……既に、お兄様を誑かしていたんですね。この女狐め、その大き過ぎる胸が元凶か……！」
コーホー、と危なげな呼気を放ちつつ、ミーネの周囲がぐにゃりと変質する。
神剣機関の駆動。摂理の歯車が動き出す。事象変異空間の固定。世界が悲鳴を上げ、跪き、

ミーネの前に従属する。
今の彼女は事象の支配者であり、領域（レイヤー）内の分子運動を完全に掌握している状態だ。この拘束された空間から支配権を奪還するのは、エーシェの力を以ってしても困難で、ランポに至っては事情が分からず首を捻っている。
「いや、ちょ、まっ……私は別にランポのことなんか、これっぽっちも！」
かつてない速さで神剣機関に接続しつつ、エーシェは苦し紛れに説得を始めた。彼女の領域がじわじわと空間を侵蝕して束縛を解除していくが、まだ八割以上の領域がミーネの手の内にある。とてもじゃないが、魔法の停止は不可能だ。
ミーネの指先に眩い閃光が集束した。放電系の魔法はその威力に応じて色が変わると言われており、通常は青、弱いもので紫、最高出力の場合は眩い白色になる。
そして、彼女が紡ぎだしたのは、まごうことなき白い雷光だった。
かっとミーネが目を見開く。
「問答無用です！　母から受け継いだ〈雷神〉の御業、冥土の土産にお受けなさい！」
「ひ、人の話を聞けぇぇぇぇ！」
本日二度目の雷鳴が、アシュランに轟いた。

＋

その翌日の冒険者ギルド。
小鳥が囀り、曙光は爽やか。ほんのり漂う紅茶の香りと朝の清廉な空気に満ちた執務室に、ベルクートの溜息が控えめに響き渡る。
「……私の部屋で倒れるのは止めてくれないかね？」
彼は手元の資料に目を通しながら呆れたように呟いた。
鋭い視線の少し先。部屋の中央に設けられているソファに、しなだれかかるように腰掛けたエーシェの姿がある。
「事情は説明したでしょ。疲れてるんだから、もう少し休ませてよ……」
「ならば自分の部屋で休めばよかろう。それと、ギルドの方にも自警団が訪ねてきたぞ。町中で魔法戦など……ギルドの看板を汚すような真似は謹んでくれ給え」
「私だって、好きで魔法戦したんじゃないやいっ」
不貞腐（ふてくさ）れたように頬を膨らますエーシェ。
前日、真夏の積乱雲の如く雷を落としまくるミーネを放っておけず、エーシェは必死の思いで彼女を無力化した。その後、雷鳴を聞きつけた自警団と接触してしまい、再び町中を遁走。罵詈雑言を喚き散らすミーネを抱えて逃げるのに、彼女は保有する体力のほとんどを使い尽く

してしまっていた。
「……ようやく逃げ切ったと思ったら、今度は、私が無実であることを説明するのに一晩丸々掛かったし。おかげでほとんど寝てないの。この後、依頼人と顔合わせがあるから、それまでちょっと休ませてよ」
そこで大きく口を開く。口元を押さえようともしない豪快な欠伸に、ベルクートは顔をしかめた。少しはレディらしく振舞え、という指摘は何年も前からしているが、未だに彼の悲願は達成されていない。恐らく、これから先も達成されることはないだろう。
「体調管理も仕事のうちだろう。これが我が支部屈指の猛者とはな」
「今回ばかりは被害者だってーの。……ところで、さっきから何の資料を見てんのよ?」
「これか?」
紙面を指差され、ベルクートはそれを掲げた。
「ルクレール君に受付業務を任せ切りという訳にはいかないからな。新たな受付嬢を募集したのだよ。資料を見る限りでは、中々優秀そうだ」
「へぇ。どんな娘?」
興味が湧いたのか、エーシェは眠そうな目を擦って執務机まで歩み寄った。ベルクートから書面を受け取り、その氏名欄を見た瞬間、彼女は机から崩れ落ちた。
「志望動機は、兄の貞操を女狐から守るためだそうだ。女狐とは誰の事なのだろうな?」
「……マジで勘弁して」
ベルクートの含み笑いを聞きながら、エーシェは切ない涙を流して床に突っ伏した。
氏名欄に誰の名が書かれてあったのか、言うまでもないだろう。

終章　風の軌跡　Voice of wind

目が覚めた時、少女は火葬場の中にいた。

崩落した屋根。瓦解した壁や柱。視界を閉ざし、吸えば肺を蝕む火の粉混じりの黒煙。肌を焦がす熱風。何より、全てを灰燼に還そうと踊り狂う炎の群れ。

そこは死体処分場などではない。装飾や洒落っ気が全くない荘厳な石造りの建造物は、彼女が産まれ、家族と共に数年の時を過ごしてきた生家である。

その家が炎上していた。

屋敷全体が紅蓮の炎に包まれ、調度品は炭化し、焼け焦げた異臭を放つ死体がいくつも放置されたそこは――なるほど、火葬場と同質の地獄であろう。

少女は焼け落ちた部屋の中で、仰向けになって倒れていた。

まだ幼い容姿。外見から読み取れる年齢は七、八歳。腰まで届く癖のない金髪と青空を宿したような碧眼をした、端正な顔立ちの少女である。

まだ柔らかく、ふっくらした輪郭。傷も染みもない処女雪のような肌を瀟洒（しょうしゃ）な黒のドレスで包んでおり、凪の水面のように澄ました美貌はどこか不自然に大人びていた。

良し悪しはあるが、子供というおは生命力の塊だ。なのに、少女にはそれがない。ただそこに在るだけの人型。子供の姿のまま大人になったような女の子。それが、一種の違和感として浮き彫りになっている。さながら、そうのように造形された人形のように。

特にその表情だ。炎の熱が地面を伝って彼女の背中を焦がしていたが、身動ぎどころか苦悶さえ浮かべない。痛みを感じないのか、それとも痛みなどどうでもいいのか。それが彼女の無機質さに拍車を欠けている。

「……死んじゃうの、かな」

他人事のように、少女の唇が動いた。

彼女は未だ火中に在る。このまま行動を起こさねば、いずれ火達磨になるか、あるいは酸欠に陥って死亡するのは明白だった。そして、小さな骨の塊を残して灰となり、土くれに還る。このままではそういう運命を辿ってしまうだろう。

それでも、その瞳には何の感情も浮かばない。

「……それでもいいよね」

そう呟くと、少女はゆっくりと目蓋を閉じた。

身体は動く。大きな怪我も負っていない。そこから立ち上がり、炎を避け、出口へ歩き出すだけの体力も残っている。

だが、生き伸びる意思だけが徹底的に欠落していた。

それこそ、繰り手がいなければ自ら動くことはない操り人形のように。

視界に暗闇が戻ってくる。身を焦がす熱と充満した死臭だけを感じ、彼女は静かに闇の世界に没頭した。やがて、熱と煙による緩慢な死が、生き残ることを諦観した若き生命を冥府へと誘うだろう。

その直前。

一陣の清らかな風が少女の頬を優しく撫でた。

身体を焙る熱風ではない。煤や灰の混じった風塵でもない。南風にも似た涼やかな風。海を渡り、草原を駆け抜け、蒼天を巡った大いなる空の息吹が。

あまりにも場違いな風に、彼女は思わず目蓋を開く。

「……誰？」

問いかけるが返事らしきものはない。周囲一帯は相変わらず死を生産し続ける炎と煙で満たされており、とてもじゃないがあのような風が吹く気配はない。

気のせいだったのか。

熱さで感覚が狂ったのか、それとも死に際の幻だったのか。何にせよ、生きる事を放棄した彼女には関係のない出来事だ。どうせこのまま炎に飲まれ、思慮なき灰燼へと還るのだから。

そう、関係ない筈なのに――

「くっ」

小さく呻くと、少女はゆっくりと上半身を起こした。暑さでかなり水分が流れ出ていたものの特に身体に異常はない。立ち上がることも歩くこともできる。

あの風にどんな効果があったのか。彼女の瞳には僅かに生き伸びる意思のようなものが感じられた。相変わらずの無表情だったが、そこには確かな生気が宿っている。

「……呼んでいるの？」

応える声はない。だが、その沈黙が肯定と語っている――気がした。

少女はのろのろと立ち上がると、先程の不思議な一陣の風を追って炎が燻る廃墟の中を歩き始める。

崩壊した天井の隙間から覗く、墨汁をぶちまけたかのような漆黒の空には、ぽっかりとした黄金の欠落があった。今宵は満月だ。差し込む月明かりと炎のおかげで、彼女の周囲は昼間のように明るい。歩くのには困らなかった。

それに、ここは少女の家だ。配置は手に取るように分かる。彼女は火の手が弱く、かつ進み易い道を的確に選び、出口に向かって着々と歩を重ねていく。

やがて、少女は地獄から抜け出した。

美しい森と湖に囲まれた湖畔の屋敷――燃え盛るアジュールの館から。

屋敷の正門には初老の男性が立っていた。

彫りの深い整った顔。厚い胸板に広い肩幅。白髪混じりの黒髪を首の後ろで束ね、口と顎に髭を短く蓄えている。

鋭い眼光にピンと伸びた背筋。鍛え上げられた肉体を覆うように紅い外套を巻きつけ、腰のベルトに長騎剣の鞘を引っ掛けていた。
燃え落ちる我が家に、もはや興味はない。興味があるのは先程の風。そして、示し合わせたように待っていたこの男の存在のみ。
「あなたが呼んだの？」
男のところまで身体を引きずるように歩み寄ると、少女は静かに尋ねた。
彼は苦むした巌のような声で答える。
「いや。俺じゃない。俺も呼ばれた方さ」
意味不明の回答。だが、彼女にはそれがどういうことか何となく理解できた。恐らく、彼もあの風を感じたのだ。そして、ここまで導かれた。自分と同じように。
「……そう」
少女は納得するように小さく頷くと、脱力して膝をついた。あの風から与えられた、わずかばかりの力が底を尽きたのだ。
糸の切れた人形は動けない。彼女は力と意識を失って地面に倒れた。
その寸前、身体を支えるように伸ばされた男の手の温もりを感じながら。

＋

次に目が覚めた時、少女は森の中にいた。
むせ返るような土と草の匂い。耳をくすぐる梢のざわめき。しっとりと肌に纏わりつく湿気を孕んだ空気。死と灰しか生み出さない先ほどとはまるで違う、瑞々しい生命力に満ち溢れた場所だった。
木々の隙間から覗く空はまだ暗澹（あんたん）としており、月も欠けていない。つまり、気を失ってからそこまで時間が経っていないということを物語っている。
少し離れた位置の夜空に一条の細い黒煙が見えた。恐らく、そこが彼女の生家があった場所なのだろう。正確な距離は分からなかったが、ここからだと一キロ以上は離れているとみて間違いない。
少女は大きな樹の根元の窪みに体を横たえていた。それを覆い隠すように質素な毛布が掛けられている。着の身着のままで屋敷から逃げ出した彼女に、家財や寝具を持ち出す余裕はない。となれば、この毛布はあの男が掛けたものだろう。
毛布をどけて起き上がると、少し離れたところで火打石と格闘している男を見つけた。手元には薪が組まれている。焚き火を起こしているのだろう。火打石の不備かそれとも男の技量か、なかなか火が点かないようだったが。

「目が覚めたか」
少女が傍まで歩み寄ると、男は苦笑して迎えた。
「腹が減っているだろ？　俺も飯にしたいところなんだが、もう少し待ってくれよ。こいつがなかなか頑固者で、なっ！」
そう言って、男は再び石を打ち合わせることに集中する。だが、彼の頑張りに反して、一向に火は点かない。暗闇に、火花だけが儚く飛び散っている。
それを見かねた少女は男の隣にちょこんと腰を下ろすと、白い指先を薪に向けた。
きしりと歪む空間。力場で小さく区切った範囲内の分子運動を急激に加速させ、一気に空気を過熱する。すると、薪の一部が瞬く間に発火した。
男の目が驚愕に見開かれる。
「その年で魔法が使えるのか。大したもんだな」
掛け値なしの賞賛に、けれど少女はつまらなげに応えた。
「……別に。魔法に年齢は関係ない。むしろ、自己の世界に没頭しやすい精神構造を持つ子供の方が魔法に対する適正が高いと教えられたわ。もっとも、よほど飛び抜けた素質がなければ幼少時に魔法を使うことはできないでしょうけど」
「それは遠まわしに、自分は天才だと言っているのか？」
にやりと意地の悪い笑みを浮かべた男に指摘され、少女は赤面してぷいと視線を逸らした。
それを見て、彼は声を上げて笑う。
「まあ、何にしても助かった。火が点いてしまえばこっちのものだ。まあ待っていろ。すぐに飯を作ってやる」
「……メシって何？」
小動物のように小首を傾げた少女に、男は眉をひそめた。
「……飯は飯だろう？」
「それは食べ物の種類？」
そのセリフを聞いて、男は合点がいったとばかりに頷いた。
「そうか。あんな豪勢な館に住んでたんだもんなぁ。俺の言い回しが理解できなくても無理はないか。飯っていうのは、要するに食事のことだ」
「じゃあ、どうしてきちんと食事と言わないの？」
「どうしてだろうな。俺も理由は知らん。気付けばそう呼ぶようになっていた。それに、こういうのは慣れの問題だ。今更変えることはできんさ。いいから待ってな。口に合うかは分からないが、それなりに食えるものを作ってやるから」
そう言うと、男は脇に置いておいた食材を取り出した。少女は大きな目を瞬かせる。
「メシ、は解ったわ。でも、その前にもう一ついい？」
「何だ？」

「あなたが取り出した、その兎は何なの？」
彼女は男が取り出した食材を指差す。それは、まだ死んで間もない二匹の兎だった。
「さっき獲ってきた飯の材料だが」
「……あなたは兎でメシを作るの？」
「まあ、割と。なんだ、兎を食べるのは初めてか？」
恐る恐る頷く少女に、男は彫りの深い笑みを浮かべた。
「俺がガキの頃は、腹が減る度に山で獲って食っていたもんだがね。これが環境の違いって奴なんだろうな」
男の言った通り、火が点いてからは早かった。慣れた手つきでテキパキと兎を捌き、竹串に刺した肉に塩と胡椒で味付けをして、こんがりと焼き上げる。
「ほら」
男は焼き上がった串焼きの一つを少女に差し出した。
美味そうな肉汁が串を伝い、芳しい香りが鼻腔を刺激する。うっすらと立ち昇る湯気と柔らかそうな肉質は、思わずかぶりついてしまいたくなる程の出来上がりだ。
しかし、彼女はそれを受け取ろうとはせず、代わりに怪訝そうな眼差しを男に向けた。
「……お皿は？　あとナイフとフォーク」
「串焼きなんだから必要ないだろ。手で持って、そのままかぶりつけばいい」
「下品な食べ方」
文句を言いつつも、少女は肉汁が滴る串を受け取って、おずおずと口をつけた。程よい塩味と胡椒の刺激、旨みの溶けた脂が舌の上に広がる。歯応えも柔らかく、肉に少し歯を立てればそのまますっと裂けていくようだ。
「……美味しい」
目を瞬かせ、少女はぽつりと零した。
「不味いとは思わないが、お前が普段食べていた料理の方が美味いだろう？」
「ええ。家の料理は材料も手も凝っていた。でも、どうしてかしら。こんなに粗野で大雑把な料理なのに、それに負けないくらい美味しい。きっと新鮮味が隠し味になっているのね」
冷静に分析しながら串焼きをぱくつく少女に、男は興味深げな笑みを浮かべた。
「……何？」
「さっきから思ってたんだが、子供の癖に結構難しい言葉が使えるんだな」
「そうかしら。屋敷には同年代の人間はいなかったから、よく分からないわ。私って、そんなに変わって見える？」
不思議そうに首を傾げる彼女の問いに、男は堂々と頷いた。
「そういう風に澄ました感じが、ちょっと違和感がある。外見はまだ子供なのに大人と話しているような感じだ。どうやら、お前さんはかなり特異な環境で育ったみたいだな」

「あなたがそう言うなら、きっと私は普通じゃないのね。そんな自覚ないのだけど」
少女は僅かに頭を垂れた。
普通、自らの特異性を指摘されて得意げになる者は少ない。他人と自分の差異について何かしら思い悩むものだ。彼女は確かに早熟だが、それと心の強さは無関係である。むしろ傷つきやすさは歳相当だと言えるた。
少女の肩を優しく叩いて、男は励ますように笑った。
「普通はそんなもんさ。自分が何であるかなんて自覚している方が珍しいんだ。そう気に病むなよ、これは俺の失言なんだからさ」
見る者を安心させる穏やかな笑み。それが宿す不思議な包容力に胸を衝かれた少女は、不意に目頭が熱くなるのを感じた。
――楽しい。
食べることも、話すことも、笑うことも。
それらは生きることと密接に関わっている。燃え落ちる屋敷の中で死を受け入れてしまっていたら、きっと味わうことはなかった感覚だろう。
もし、あの不可思議な風が吹かなかったら？
そう考えると涙腺が緩んでしまう。あの時は死のうと考えていたのに。そうしなければならないと、ずっと思っていたのに。今は、彼のちょっとした優しさがとても心地良かった。
この時、少女は自分の本当の気持ちを知った。
自分は死にたくなどなかったのだ。
「どうしたんだ、いきなり泣いたりして」
心配そうに顔を覗きこむ男に、少女は目じりの涙を拭って尋ねた。
「……聞かないのね」
「何を？」
彼はとぼけたように問い返した。
「何で屋敷が燃えたのか。あそこで何があったのか。私は何者なのか」
その言葉に男は口を噤んだ。
少女はとっくに気付いていたのである。生家を失った彼女に余計な心労を掛けないために、敢えて問い質さなかった彼の優しさを。
「私も聞きたいことがたくさんあるの。何で、あなたは正門にいたのか。どうして私を助けたのか。あなたは何者なのか」
少女は男の黒瞳をじっと見据えて言った。
「教えて」
彼はしばし黙考すると、再びあの微笑を浮かべた。
「……そうだな。そろそろ自己紹介をしてもいい頃合だ」

＋

「俺の名前はタキネス。傭兵稼業を営む流れ者だ。まあ、傭兵と言えば聞こえはいいが、結局は一ヶ所に留まれない風来坊と言ったほうが正しいだろうな」

初老の男――タキネスは焚き火に薪をくべながら、己が素性を語った。

「ここへは、風の音を聞いてやってきた」

「風の音？」

少女は鸚鵡返しに尋ねる。

「そうだ。こうやって耳を澄ますと、風が囁いてくるんだよ」

タキネスは遠くの物音を聞くように、手に耳に当てた。

「こっちへ来い。面白いものがあるぞ……ってな。でも、それは声じゃない。まるで俺の導くように、風が身体を吹き抜けていくんだ」

少女は炎上する屋敷での事を思い出していた。

熱風が吹き荒れる火葬場の中で、彼女の頬を撫でた一陣の清涼なる風。それが何なのか知りたい。ただそれだけの好奇心から身体を懸命に動かし、彼女は地獄から抜け出したのだ。

最初はタキネスが呼んでいたと思った。けれど、事実は違う。呼ばれたのだ。彼も彼女も。あの不可思議な風に。

風にどんな意図が合って二人を巡り合わせたのか――いや、それ以上に、風に意思などあるのか。それを理解することは何人にも不可能だろう。正に空気を掴むような話だ。

「これまでにも、その囁き声を辿って色んな場所を冒険したものさ。ある時は俺一人で。ある時は掛け替えのない仲間と一緒にな」

タキネスは懐かしい思い出に浸るように、顔を綻ばせた。

「思い返せばロクでもないことの連続だったが、あれはあれで充実した日々だったよ。荒野の真ん中で人食い沼にも遭遇したし、北のほうの渓谷でドラゴンとも戦った。蛮族の儀式に巻き込まれたかと思えば、常霧の谷で遭難したこともあったな。まさに、波乱万丈を体現したかのような毎日だったよ」

しかし、と彼は言葉を区切った。

「さすがに寄る年並みには勝てん。旅を続けるのも疲れてきてなぁ。ぼちぼち古巣に帰ろうと考えた時に、ここに呼ばれたってわけさ」

「じゃあ……あの時、屋敷にいたのは偶然なのね」

「その通りだ。だけど、俺もお前も風に呼ばれた。考え方によっちゃ、この出会いは必然なのかも知れないぞ」

それを聞いて少女は複雑な心境に陥った。これを運命と言うのなら、あの地獄も必然だったということになるのだから。
「それで、あそこで一体何があった？」
真顔に戻るタキネス。
「憶測に過ぎないが、あの火災は魔法によるものだ。ただの火事にしては建物全体が炭化する時間が速い。とても高度な過熱系戦術魔法……恐らくは【不知火（しらぬい）】か何かが使われたのだと俺は思っている」
少女の肩がぴくりと震えた。タキネスはそれに気付いたが、そのまま話を続ける。
【不知火】は過熱系で最強の戦術魔法だ。いや、威力と効果範囲に限定するなら戦略魔法級の威力を持っていると言えるだろう。だが、これは強力な反面、軍部でも使用を制限する規制があるが……何故、そんな物騒な魔法を使わなければならなかったのか。そして、そんな凶悪な魔法を何に使ったのか」
そこで一旦言葉を区切ると、タキネスは改めて少女を見つめる。
「お前さんは何者だ？　あそこで何があった？」
彼女は顔を伏せ、己が両手を見やった。煤や泥で汚れた、けれどほっそりとした綺麗な手のひら。それをぎゅっと握り締め、何かを決意するように頤を上げる。
「私はエーシェ。エーシェ＝アジュール」
少女の名を聞いたタキネスは、僅かに眉をひそめた。
「アジュール。戦闘魔導士の家系だな」
「……知っているの？」
意外そうに問いかける少女――エーシェに、タキネスは顎を引く程度に応えた。
「ああ。俺の知り合いに貴族社会に鼻が効く奴がいてね。そいつから聞いたことがある。貴族であり戦闘魔導士でもある一族。いや、むしろ、より効率の良く高品質魔導士を生み出す実験を行うために貴族の権限を求めた異端の一族だってな」
そう言うと、タキネスはあらかじめ集めておいた薪を焚き火にくべた。ぱちっと音を立てて枝が爆ぜ、炎の勢いが強まる。
「戦闘魔導士の家系は、高品質の子孫を作り上げるために様々な試行錯誤を繰り返す。例えば〈雷神〉の血統なんかは、配偶者は必ず放電系に特化した神剣機関を備えてないと駄目なんだそうだ。そうやって才能の純度を高めることで、あの驚異的な性能を発現させたんだろうな」
まるで戦ったことがあるかのような口調だった。いや、彼の経歴を考えればあっても不思議でない。もちろん、彼の語ったことが全て真実ならばの話だが。
「大概の戦闘魔導士は神剣機関の適正を特化させたり、単純に回転数を増やしたりすることに主軸を置く。だが、アジュールの家系は違った。アジュールは神剣機関の性能よりも、それを制御する人間の精神面を強化に着目した」

魔法を心技体で表すなら、神剣機関を駆動させる原動力である精神を心、魔法を有効に活用する術と知識が技、神剣機関が体となる。

通常、戦闘魔導士は心技体の体である神剣機関に手を加えようとする。精神や技術は後天的な強化が可能だが、回転数だけは先天性の素質によるため増設が不可能だからだ。

魔法戦において神剣機関の回転数は絶対だ。どれだけ優れた技術を持とうと、回転数で劣る魔法使いは劣勢を強いられる。回転数の差は攻撃力の差として現れ、それは精神力や技術で覆されるようなものではないからだ。だからこそ、戦闘魔導士はより多い回転数を持つ者と血を重ね、子孫の回転数の増加を図るのある。

その意味で、心技体の心――術者の精神力に拘るアジュールの品種改良法は、戦闘魔導士という観点から見れば異端と呼べるものだった。無論、魔法という能力そのものにおいて精神は重要な要素だが、戦いに関しての優先順位では神剣機関の回転数に勝るものはない。何より、精神という曖昧で不透明な概念を、どのような手段で強化するのか疑問視する声もある。

故に、そこから先をタキネスは口にするべきか迷った。彼が耳にした噂は、お世辞にもいい噂とは言い難い内容だからだ。

公には認められてはいない薬物の投与と人体実験。その過程で生まれた新薬の独占。それを黙認させる権力を求めて貴族社会に参入したという。

「そこまで知っているなら話が早いわ」

エーシェは言い淀むタキネスを見て、どこか自傷気味に口を開いた。

「私はアジュールが生み出した最高傑作。あなたが言う通り、積み重ねた血と薬物による精神変革によって生み出された魔法使い。あなたが私を早熟だと言ったのも……恐らくはそういう経緯があるからよ」

「魔法を無詠唱で起動できたのもか？」

タキネスは彼女が焚き火を点けた時のことを思い出した。

「ええ。でも、詠唱を省略するくらいなら誰でもできるでしょ？」

「速度を無視すればな」

一般的に、魔法は詠唱法を用いた方が早い。詠唱という技法そのものが、人間の精神を神剣機関に接続する予備動作として考案されたものだからだ。無詠唱法は、水中や猿轡等の拘束で言葉が使えない状態では有効だが、詠唱法よりも起動に時間が掛かってしまう。

――にも関わらず。

エーシェの無詠唱起動は速度的に考えて異常だった。枯れ木を発火させるのに費やした時間はたった二秒。詠唱法で同じ事を行えば十秒はかかるだろう。思っただけで魔法が使えるようなものだ。

「だが……なるほどな。アジュール一族が目指したのはそれか」

タキネスは納得言ったように頷いた。

無詠唱で、しかも詠唱法よりも早く魔法を構築できる魔法使い。ならばそれは、詠唱を必要とするあらゆる魔法使いにとっての天敵だ。どれだけ神剣機関の回転数が高くても、起動できなければ意味はないのだから。

魔法使い殺し（マジック・キラー）とも呼べるこの能力の獲得には、神剣機関よりもそれと接続する精神力の適正が物を言う。アジュール一派は薬物を使用し、試行錯誤を繰り返した結果、思うだけで魔法が使える特異な精神構造を持った成功例（エーシェ）を生み出した。

倫理や人徳的な問題は常に付き纏うだろうが――もし、薬物に依る精神操作の技術が完全に確立し、無詠唱魔導士の大量生産が可能になったら、現代の魔法戦は一変するだろう。彼らのやろうとしたことは戦史的にも多大な影響を及ぼすものなのだ。

――だが。

「でも、それもおしまい。私が、みんな燃やしちゃったから。そう、みんな、ね」

そう言って、エーシェは再び目を伏せた。まるでその時の事を反芻するように。

「あなたは言ったわね。屋敷をあんなにしたのは【不知火】級の戦術魔法が原因だって。その通りよ。あの火災の原因は私よ」

「……何故そんなことをした？」

どこか咎めるように、タキネスは言った。

「何故、お前さんは家族に弓を引いた？　お前さんにそれを決断させるほど、あの屋敷の環境は酷いものだったのか？」

エーシェは力なく首を横に振った。

「お父様もお母様も、使用人も、みんな優しかったわ。私は貴重な成功例だから外に出ることは許されなかったけど、それでも何の不満もなかった。私は、幸せだったわ」

でも、とエーシェは言葉を続ける。

「もう幸せではいられない。あれを見ちゃったから……」

そう言うと、エーシェは寂しげな笑みを浮かべる。彼女が初めて見せた微笑みは、どうしようもないほど悲哀で満ちていた。

「今日は私の八歳の誕生日なの。それを祝うために、屋敷の使用人は祝宴の準備で忙しく走り回っていたわ。私も待ちきれなくて、ずっとそわそわしっ放しだった」

まだ一日も経っていないにも関わらず、どこか遠い日の思い出を語るようにエーシェは語り出した。

「そんな私を宥（なだ）めるためでしょうね。お父様は八歳になった記念だと言って、私を屋敷の地下室まで連れて行ってくれたわ。私は、屋敷に地下室があることさえ知らなかった。何があるのかって聞いたら、お父様は笑って答えたわ。実験場だって」

「実験場……」

「そういう名前の牢獄よ。何人もの人間が閉じ込められ、鎖で縛られていたわ。うわ言を繰り

返す者。筋肉が膨張した者。皮膚が爛れた者。獣のように吼え猛る者……彼らがどこの誰かは知らないけれど、お父様は彼らで薬物の実験を行っていたらしいの」

タキネスは嫌なものを見たように眉を顰(しか)めた。

「お父様は言ったわ。彼らがいたから何の後遺症も残らない薬を作ることができた。彼らが私の代わりに苦しんでくれたから、私は何も苦しまずに八歳になれたんだよって。そして、それに一番貢献したのが――私の姉だったそうよ」

「……姉？」

「私には、セルリカという五つ上の姉がいたの。でも、お父様からは私が生まれて直ぐに亡くなったと聞かされていたわ。私もそれを信じて疑わなかった」

閉鎖的な環境下で育ったエーシェにとって、周囲の人間から与えられる情報は絶対だ。そもそも疑うという思考自体、これまでの彼女にはなかったのかも知れない。こればかりは性格的な問題であり、精神の早熟さとは無関係だ。

「でも、現実は違った。姉は生きていて、地下に幽閉されていたの」

「何の為に？」

「薬品は個人に応じた調整が必要不可欠よ。でも、もしそれが魔薬(まやく)の類だったら、おいそれと貴重な素体に投与できない。いくら薬品の完成度が高いといっても、未調整で投薬して悪影響が出たら取り返しが付かないから……でも、極めて近い体組織を持つ肉親なら、同一の薬でも同じ効果が期待できると思わない？」

彼女の言わんとすることが解って、タキネスは息を呑んだ。

「そう、姉は私専用のモルモットだったの。私に与えられる魔薬を調整するために、私と同じ血と身体を持つ素体が必要だったのよ」

アジュール家に生まれた最高の素体であるエーシェは、同様の性能を備えた姉、セルリカのスペアだったのだ。

貴重な素体に未完成の薬を投与することに不安を覚えていた頭首は、エーシェの出生に狂喜した。先に生まれたセルリカに徹底的な薬物投与を実施することで魔薬の完成度を高め、妹のエーシェこそを完成体にしようと考えたのだ。たとえ実験でセルリカが壊れてしまったとしても、その成果はスペアであるエーシェに活かされるのだから。

「……惨(むご)い事をする」

「私もそう思ったわ。八歳になって浮かれていた自分が酷く滑稽に思えて、のうのうと生きている自分が許せなくなって……何より、生まれた順番が逆だったなら、繋がれていたのは私の方だったかも知れないって考えると、恐くて震えが止まらなかった」

その時の事を思い出したのか、エーシェはドレスの裾を握り締め、苦しげに俯いた。

「姉は、まだ人として生きていたわ。他の人たちと違って薬の最終調整が主だったから。私は鎖を解いてとお父様に進言したけれど、まだ利用価値があるからと聞き入れて貰えなかった。

お父様は姉を道具としてしか見てなかったのよ。その時、私はアジュールの行いが人の道から外れている事を理解して、姉を助けようと決意したの」

パーティからこっそり抜け出したエーシェは地下室に戻った。厳重に錠前が掛けられた扉を魔法で切断して、再び監獄へ足を踏み入れた。そこに繋がれている実験体を、自分の代わりにモルモットになった姉を助けるために。

「でもそれは、屋敷に鬼を放つ結果になってしまった」

不意に、エーシェの瞳が青く輝き始めた。自分の肩を抱き、まるで何かに怯えるように全身が小刻みに震える。彼女の胸中を代弁するように瞳は弱々しく点滅を繰り返し、周囲の空気が不穏なものに変わった。

「私の助けなんて、姉は望んでいなかった。当たり前ね、私が生まれたせいで姉はあんな目に遭ったんだから。姉の全てを奪った私が手を差し伸べるなんて、あのひとにとって屈辱でしかなかったでしょうに」

エーシェは忘れることができなかった。憎悪と嫉妬、殺意。それらが入り混じったどす黒い感情を湛えた瞳を。指し伸ばした手を弾かれた平手の痛みを。

「鎖から解き放たれた姉は直ぐに私を殺そうとした。圧し掛かられて、首を絞められて、凄く恐くて……本当はそうしたくないのに、神剣機関が勝手に動いて……！」

エーシェの震えが増した。顔は青ざめ、全身からどっと脂汗が吹き出る。まだ刻まれて間もない心の傷跡（トラウマ）から滲み出た記憶の鮮血が彼女の精神を瞬く間に汚染し、忌まわしい情景が脳裏を駆け巡る。

覆い被さった姉を突き飛ばし、ほうほうの体（てい）で地下牢から逃げ出すエーシェ。それを、姉は鬼の形相で追いかける。痩せ細り、薬でボロボロになった身体が急激な運動に耐えられる筈もないが、彼女は止まることはなかった。

苦痛と怒りに顔を歪め、獣のような声を上げる何かに追われる悪夢。屋敷の中で安穏と暮らしてきたエーシェが始めて体感した恐怖がそれだ。

やがて、エーシェは恐怖に駆られ、【不知火】を放ってしまう。普段の彼女なら、それは人間を殺すには過ぎた力だと気付いただろう。しかし、彼女はあまりの精神的重圧から恐慌状態に陥っていたため、正常な判断が下せなかった。

「あ、ああ、あああああっ！」

きゅっと瞳孔が縮小する。瞬間、周囲の空間が大きく歪むのを感じた。その歪みは事象変革の前触れだ。魔法の系統はともかく、範囲が問題だ。周辺一帯が魔法の効果範囲に設定されている。種類によっては、あの屋敷と同じ轍（てつ）を踏みかねない。

「いかん！」

タキネスは慌ててエーシェを抱きしめた。厚い胸板。逞しい腕に大きな掌。その力強い抱擁に一瞬、エーシェの息が詰まる。

「落ち着け」
耳元で囁くように呟かれ、エーシェの肩がピクリと震えた。
「エーシェ。もう思い出さなくていい。あの火事はお前のせいなんかじゃない。お前は、何も悪くないんだ」
優しい声音。いつ魔法が起動しても可笑しくない状況で、怯えることなく、恐れることなく自分を抱きしめた男の暖かな言葉。それに、エーシェの胸は熱くなり、不安定だった瞳の蒼輝が消失した。
「……ごめんなさい。少し、取り乱したわ」
小声だが、はっきりとした口調にタキネスは安堵の息を吐いた。
(なるほどな、これが原因か。だとすれば自業自得もいいところだ)
思考と直結した魔法機能は、同時に術者の感情に大きく左右される欠陥を抱えていたのだ。これでは、術者の精神が不安定になれば精度を欠き、暴発を引き起こす危険性もある。
術者が何事にも揺らがぬ強靭な精神を持ち合わせていた場合、それは最強の技能として機能するに違いない。しかし、いくら早熟でもたった八歳の少女にそれを要求するのはとても酷なことだろう。
屋敷の火災は、真実を知ったエーシェの精神が動揺し、昂ぶった感情が神剣機関を暴発させたものだ。絶望の波が膨大な熱量に変換され、屋敷を焼き払ったのだ。誰一人として抵抗することはできなかったであろう。
皮肉なことだ。魔法の高速化を望んだ一族がその技能によって滅ぼされたのだから。
考えようによっては、アジュールの滅亡は必然だったのかも知れない。発想はそのものは一目を置く価値があったが、感情の昂ぶりで暴発するようでは、兵器としては役に立たないのは明白だ。アジュールの術が兵器としての性能が実証されないのであれば、彼らがやってきたことは犯罪でしかない。貴族の一員だとしても、いずれは法によって裁かれていただろう。
(……この娘は、長生きできないかもしれないな)
漠然とタキネスは思った。
幼年期の子供は些細なことで精神の調和が崩れる。知識や言葉遣いがどうであれ、未だその時期にあるエーシェにとって、アジュールの力は爆弾と変わりない。このままではいずれ暴走し、周囲はおろか自らも滅ぼしてしまうだろう。アジュール家の人々が彼女を閉鎖的な環境で育てていたのも、可能な限りそれを避けるために違いない。
もし、この少女を大人にする方法があるとすれば、それは――
「ちょっと」
少しくぐもった声が、腕の中から聞こえた。
「もう大丈夫だから……その、離してくれないかしら。苦しいわ」
「おお、すまない」

慌ててタキネスが腕を解くと、エーシェは顔を赤くして離れた。
「もうちょっと加減しなさい。窒息死するところだったわ」
「いや、すまん。思ったより抱き心地が良くてな。離すのが惜しかったんだ」
「……もしかして、あなたって幼女趣味（ペドフィリア）？」
軽口に応じるだけの余裕も戻って来ている。どうやら完全に落ち着いたようだ。
「……結局、私は死に損ねたのね」
「だとしたら、それが天命だ」
「てん、めい？」
聞き慣れない言葉だったのか、エーシェは鸚鵡返しに繰り返す。
「この世界の誰かが、お前さんを必要としているということさ」
「よく、解らないわ」
言っている意味が分からないのか、エーシェは首を傾げた。
「傭兵って稼業についていると良く分かる。自分よりずっと能力のある戦士が、流れ矢で命を落とすことは珍しくない。逆に、自分よりずっと能力の劣った戦士が英雄になることもある。能力が結果に反映されていないんだ。普通に考えると可笑しいだろう？」
「……確かに、そうね」
この世は弱肉強食。強い者が生き残り、弱い者はその糧になる。
それが生存競争の基本原理だ。しかし、時として窮鼠は猫を噛み殺す。実力が反転し、弱者が強者へ成り代わる機会というのは少なくない。
それは何故なのか？
多くの場合、そういった現象は運という架空の要素で解決される。完全に実力が離れた相手から勝利をもぎ取るには、自身の性能以外の加護がなければ理論上不可能だからだ。
結末だけを考慮すれば、鼠こそが真の強者だったと評する者もいるだろう。運はあくまで付随的な要素であり、結果論に過ぎないと。
だが、戦いに身を置く者は運という要素を否定しない。むしろ、重く見る傾向にある。理由はタキネスが言った通りだ。そういう未知の概念が関与していなければ説明が付かないことが多すぎるのだろう、実戦というものは。
「世界には視えない大きな力が働いているのさ。その力を持つ誰かにとって必要だと判断されれば、能力という大きな垣根を越えて生かされる。風は声なんだ。自分を生かそうとする何かの声。自分という存在を必要としてくれる想い。時に、それが生きていく活力や進むべき指針になる。そう考えることで、生き残った者は自分を納得させるんだ。だから――」
エーシェが生き残った事には何らかの意味があるのだと、タキネスは優しく諭した。
「……私は生きて良いのかしら？」
理由はどうあれ、結果的にエーシェは大勢の人間の命を奪った。たとえそれが、彼女を生み

出した環境の所為だとしても、彼女が人を殺したという事実は消えない。天命という人間の秤から逸脱した力で生かされたとしても、罪を背負った自分を社会が受け入れてくれるとは限らないだろう。本当に自分には生存するだけの価値があるのだろうか。

そんな思いの詰まった、生きて良いかという問いかけだった。

「お前さんは生きたくないのか？」

問われ、エーシェは首を横に振る。

「だったら生きればいい。俺に言えるのはそれだけだよ」

そう言って、タキネスはエーシェの髪を優しく撫でた。彼女は喉を撫でられた猫のように目を細める。

「……うん。私、生きることにする。生きて、何のために生かされたか、それをはっきりさせたい」

エーシェは決意するように呟いた。

その数秒後。彼女は意外な形でそれを知ることになる。

＋

タキネスがそれに反応できたのは、戦闘者として培った経験と直感のおかげだった。

「くっ……！」

彼はエーシェを抱きかかえると、その場から跳躍した。その刹那、見えない何かが先程まで二人がいた空間を貫き、地面を吹き飛ばす。

降り注ぐ土砂からエーシェを庇いながら、タキネスはそれが高密度に圧縮された空気の塊に依るものだと看破した。

――即ち、魔法。

立て続けに降り注ぐ不可視の風の剣は地面を抉り、穿ち、陥没させる。暴風がのた打ち回って焚き火を吹き消し、視界を闇で閉ざした。

タキネスは木々の隙間を縫うように疾走する。夜目が利くのか、その足取りはしっかりしている。それどころか、魔法の着弾点まで見切っているような身のこなしだ。

「火事に引かれて集まった盗賊か？」

言いつつ、腰に下げた長騎剣の柄に手を添えた。すると、反対の手で抱えたエーシェが悲痛な声を上げる。

「盗賊なんかじゃないわ！　空間の軋みが凄い。律法が滅茶苦茶。ここまで事象を螺旋渦（ねじま）げるなんて、並の神剣機関の回転数じゃない！」

「だろうな。ここまで高出力なのは久しぶりだ」

タキネスは大きな樹の根元に駆け寄ると、エーシェを背後に庇って抜刀する。
傷だらけの刀身が月下に晒され、鈍い銀色の光沢を放った。それを正眼に構え、切っ先を森の奥に潜む襲撃者に向ける。
「無理よ、魔法使いを相手に剣なんて！」
「そうでもないさ。魔法は障害物のない平地で使うのが最も効果的な方法だ。森の地形を利用すれば、剣士にも十分好機は――」
言うより早く、眼前の木々の枝を折りながら空気の塊が突っ込んできた。
「ちっ！」
「護って！」
エーシェの叫びと同時に、二人を囲む空気が密度を高めて硬化する。空気の弾丸と空気の盾がぶつかり合い、局地的な突風を巻き起こした。
「すまん、助かった。お前さん、戦術補助魔法も使えるんだな」
「これでも戦闘魔導士の血統よ。小さい頃から魔法は叩き込まれているわ」
「これは愚問だったな」
実に今更な問いかけに、タキネスは苦笑した。
おまけに、さっきの防御魔法の精度から察するに神剣機関数の出力も桁外れに高い。回転数は平均の三倍以上。最高傑作というのもあながち誇張ではないのだろう。
だとすれば、異常なのはむしろ襲撃者の方だ。そのエーシェを以ってして「並じゃない」と言わしめる回転数。彼女と同程度の出力を保有していると見て間違いないだろう。
――同程度だと？
嫌な予感がタキネスの胸中を埋め尽くす。エーシェの言う通り、この場に盗賊が現れるのは都合が良すぎる。まして、そんなならず者の集団に戦闘魔導士並の神剣機関を備える魔法使いが同行しているとは思えない。考えられる可能性があるとしたら――
タキネスがその答えに辿り着くのと同時に、襲撃者が茂みの向こうから姿を現した。
ろくに手入れもされていない痛んだ金髪。痩せこけた身体。薄汚れた、みすぼらしい衣装。それとは対照的に爛々と輝く空色の瞳。
襲撃者は、エーシェととてもよく似た顔立ちの少女だった。
「……そうか」
隣でエーシェは呆然と呟くと、力なく膝をついた。思考が深い絶望に彩られ、身体から覇気が根こそぎ奪われる。
解った。解ってしまった。自分が生き残った理由。自分が生かされた理由。
「私は、あなたに殺されるために生かされたのね……セルリカ姉さん」
にやり、と襲撃者――セルリカは笑った。
「そう。きっとそうね。そうに決まっているわ」

セルリカが魔法を起動させるのと、タキネスがエーシェを射線軸上から突き飛ばすのは同時であった。
通常の何十倍にも圧縮された空気の弾丸が迸り、背にしていた巨木の幹を深々と穿つ。硬い樹皮が粉々に砕け、その破片がタキネスの頬を切った。
それに構わず、彼はセルリカを剣の射程に捉えるべく地面を蹴る。
セルリカの青い凶眼がタキネスの姿を捉えた。その刹那、世界が彼女の要求を実装する。我が求めは迅雷。人間を殺すには十分すぎる電気エネルギーが、彼女の掌に集束していく。
「はっ！」
それが放たれるより早く、タキネスは長騎剣を投げ槍のように投擲した。
まさかそんな使い方をするとは思っていなかったのか、セルリカは魔法を解除して回避行動に移る。その隙にタキネスは一気に距離を詰めた。
射刀術。本来、投擲に適していない構造の武器を正確に投げる技術だ。剣士は近接戦闘しかできないという思い込みを利用し、意表を突く攻撃法でもある。無論、避けられれば剣を失うだけだが、今回は功を奏した。
武器を失ったタキネスは素手でセルリカに肉薄する。硬く握り締められた拳が、少女の頬骨を打たんと振り上げられ――
「ぐぅ！」
硬質化した空気の層に阻まれ、逆に吹き飛ばされた。
（この展開速度……間違いない。エーシェと同じ、アジュールの申し子！）
慣性を殺しつつ着地するタキネス。そこを三発の砲撃が襲った。彼は形のない空気の着弾点を音で把握し、危なげなく回避する。
「……消えろ」
流動系の魔法では埒が明かないと判断したのか、セルリカは過熱系魔法に切り替える。
風ほどの即効性はないが、炎には広範囲に作用する展開力がある。点の攻撃は避けられたとしても、面の攻撃ではそうはいかないだろう。
（いかんな）
タキネスは逡巡した。一旦、距離を取って熱による被害を減らすか。それとも、真紅の外套の耐熱効果を信じて懐に飛び込むか……。
だが、一度相手から離れてしまうと遠距離魔法の格好の的になってしまう。武器を喪失した以上、射刀術で意表を突くこともできない。とはいえ、接近するにしても外套の耐熱温度以上の熱量をぶつけられれば間違いなく即死だ。
（くそったれ）
悩めば悩むほど生存の可能性は下がっていく。彼は、これまでの経験と直感から最良の選択を選出し、その結果を動作に反映させようとした。

――その時。
「やめて！」
エーシェの声に、セルリカの動きが止まる。
「やめて、姉さん！　この人は関係ないわ、姉さんが殺したいのは私でしょ！」
タキネスを庇うようにエーシェが駆け寄った。小さな腕を目一杯広げて、少しでも彼の盾になろうとしている。
「いかん。離れていろ、エーシェ！」
「嫌っ！」
タキネスは切迫した声は耳に痛かったが、エーシェはそこを動かなかった。
もう怯えるわけにはいかない。恐がるわけにはいかないのだ。たとえ、自分の天命が彼女に殺されることであっても、あの暖かい一時をくれた彼をアジュールの因果に巻き込む事だけは絶対に阻止しなければ。
「あ、あは、ははは……！」
セルリカは哂った。エーシェの懸命な献身を蔑む、怨嗟の篭った声で。
「そう。そうですとも。私の目的はあなた。あなたなのよ」
一歩、セルリカが足を踏み出した。
「あなたさえ生まれなければ、私がアジュールの最高傑作だった。最強という名誉も、家族の愛もみんな私だけのものだったのに――あなたが、あなたが生まれたせいで全て奪われた！」
血を吐くような叫びだった。人間を呪い殺せるような濃厚な憎悪を受け止め、その手の感情とは無縁だったエーシェの心は萎縮してしまう。
恐い。逃げ出したい。
だが、背後の存在が彼女を後押しする。彼女は歯を食いしばって懸命に地面に縫い付けた。
「あなたが生まれたその時から、私の地下に閉じ込められた。あなたを完成させるための実験体として。魔法が使えないように薬で精神を抑制されて、逃げ出さないように手足も鎖で拘束されて」
それを証明するように、手足の枷からぶら下がる鎖がじゃらりと音を立てた。
「私はあなたに全てを奪われた。だから――」
あなたの全てを奪ってやる、と。獣のような瞳が語っていた。
「……どうして生きているの？」
「どうして。どうしてだと思う？　私はあなたの魔法を受けた。あんな至近距離で。あはは、不思議。まったくもって不思議ね、エーシェ」
異様に興奮しているのか、それとも薬の後遺症なのか、彼女の口調はどこかたどたどしく、猟奇的な響きがあった。
「でも、現に生きている。だとすれば、それが私の天命なんだわ。だから大人しく私に殺され

なさい。そして、私の……私の居場所を返して！」
絶叫と共に、セルリカの右手に太陽が生まれた。赤々と燃え上がる小石ほどの光球は、規模こそ違えど、アジュールの屋敷を焼き払った戦術魔法と同系統のものだ。
戦術魔法――【不知火】。
それは超高温に加熱した気体を圧縮して、プラズマを生成する魔法だ。その火球が保有する熱量は、直撃はおろか余波に触れただけでも炭化してしまう規模だという。恐らくは、個人が使えるものの中でも最強の位置するものだろう。
エーシェが息を呑む。逃げそうになる心を押さえ込んで、瞬時に思考を走らせる。世界への要求。我が求めは凍結。しかし、空間がセルリカの支配下に置かれている今、彼女の影響力は少ない。せめて、タキネスを護れるだけの魔法を捻出しなければ――
しかし、エーシェの奮闘も虚しく、セルリカの魔法が先に完成した。
放たれる火球。怒涛の勢いで迫る光と熱。生半可な冷却系では防げない。幾重に冷気の盾を作ろうと、薄氷の如き儚さで蒸発していく。
これまでか。
エーシェは瞳を閉じた。
思えば、これが妥当な結末だったのだ。姉や、多くの実験体の人生を奪い、屋敷の人間の命を奪った咎人の最期など、やはり死を代償とすることでしか収拾がつかないのだろう。
「……それでもいいよね」
炎上する屋敷で呟いたのと同じ言葉。生き残る事を諦観した人形の言葉。風が吹こうと吹くまいと、辿るべき結果は一緒だったのだ――
「いいわけあるか、馬鹿たれが」
彼女の内心を否定するように、初老の男の声が遮った。
それは、どんな奇跡だったのだろう。
怒涛と押し寄せる光と熱が、二人に接触する直前、見えない壁に阻まれたように進行方向を変えた。
続けて、轟音と爆風。これも二人に触れることなく、周囲の梢を大きく揺さぶって通り抜けていく。あまりの出来事に、エーシェは言葉も出ない。
光が晴れると、辺りは焦土と化していた。木々は焦げ、葉は燃え落ちている。しかし、唯一無傷の場所があった。それはエーシェとタキネスが立っている、半径一メートルにも満たない円形の空間だ。
セルリカの顔が険悪に染まる。
「……魔法無力化（マジックキャンセラー）、ですって？」
「これでも一応、属質は魔法戦士なんでな。まあ、これしか使えないんだが」
絶対的な終焉を退けた老剣士は、何気ない口調で言った。

「何にせよ、俺の意志が届くところで魔法は意味を持たない。俺は、お前さんたち魔法使いの天敵なんだよ」
エーシェは胸を撫で下ろした。己の生命が助かったことにではなく、タキネスがセルリカの魔法で死ぬことはないという事実に。
「それだけの能力があるなら安心ね。タキネス、早くここから離れて。あとは姉さんと、私の問題だから」
「嫌だね」
鼻を鳴らしてタキネスは言った。
「お前さん、死ぬ気だろ。そんなのは認めないぞ。そんなのがお前の天命だったなんて、俺は絶対認めない」
「そんな――」
「おい、あんた。セルリカって言ったか？」
何か言おうと口を開くエーシェを遮り、タキネスはセルリカに視線を向けた。
「あんたも知っているだろ。アジュールの屋敷は全壊した。生存者も見込めない。生き残ったのはあんたたち二人だ。居場所を奪うとか、奪い返すとか言う必要はない。もうあんたを縛るものはないんだからな。二人とも被害者なんだよ」
「だから何？　何だって言うの？　屋敷が燃えて、もう実験体として苦しめられることはないから、その娘を許せって言うの？」
一拍置いて、セルリカは忌々しげに言い放つ。
「何を今更！　その子は私の人生だけじゃない、私の帰る場所さえも奪ったのよ。許せるわけがないでしょう！」
「エーシェが悪いわけじゃない。この子が直接、あんたを苦しめたわけじゃないだろう。全てはお前の家族がやったことだ。全てを、この子のせいにするのは間違っている」
「黙れ！」
激情の赴くままに今一度、セルリカは火球を構築する。夜闇を打ち消す眩い光輝がその掌に宿った。しかし、その光が放たれることはない。代わりに、
「ごふっ……」
という、何かが水気のあるものが吹き出す音がした。
セルリカは口元を押さえて蹲った。指の間から赤黒い液体が溢れ、零れ落ちる。血だ。尋常ではない喀血の量。
掌にベッタリと着いた血を見て、セルリカは震えた。
「忌々しい、本当に忌々しい……薬に蝕まれたこの身体。何で、あなたなんかのために、私はこんな……こんな苦しい思いをしなければならないの？」
そう口走るセルリカの言葉には、これまでのような憎悪は含まれていなかった。

あるのは深い悲しみ。癒し難い哀しみの吐露だ。
「幸せだったのに……お父様やお母様、優しい使用人に囲まれて過ごした日々は、本当に幸せだったのに……あなたが生まれた瞬間、手のひらを返したように突き放して！」
セルリカの目じりに涙が浮かんだ。堰を切ったように、感情が暴発する。
「私が何かした？　少し先に生まれた、ただそれだけでしょう？　なのに、私だけこんな目に遇うの？」
感情の起伏に呼応するように、彼女の神剣機関がうねりを上げた。加熱、冷却、流動、放電――あらゆる系統の魔法が数秒のうちに構築され、二人に向かって放たれる。
だが、当たらない。まるで魔法そのものが意思を持っているかのように、二人に当たるのを嫌がるかの如く、虚空に逸れる。
「……ごめんなさい」
エーシェの目じりにも涙が浮かぶ。
「ごめんなさい、姉さん！」
「あなたが謝ったところで時間が返ってくるの？　私が奪われたものは戻ってくるの？」
口の端から血を流しつつ、セルリカは魔法を撃ち続けた。唯の人間ならとうに百人は殺せる熱と、氷と、風と、稲妻が迸る。だが、そのどれも二人にはかすりもしない。
あらゆる事象を遮断する無縫の天衣。それは絶対的な距離として二人をを隔てていた。
「私だけ奪われ続けるなんて、もうたくさん。たくさんよ。あなたから何かを奪わないと私は……ただ奪われるために生を受けたようなものじゃない！」
だから、エーシェを殺したいのだとセルリカは言った。せめて、彼女の人生を台無しにした人間の生命を奪うことで、自分の人生を意味のあったものにしたいのだと。
「もうやめて、姉さん！　殺される。私はあなたに殺されるから……！」
魔法を遮断する絶対領域から飛び出そうとするエーシェの肩をタキネスは押さえ込む。少女の身体能力しか持ち合わせていない彼女は、その戒めから逃れることができなかった。
「離して、タキネス。このままじゃ姉さんが！」
魔法がセルリカの負担になっているのは確実だ。これ以上、魔法を使い続ければ薬で虚弱化した彼女の身体は致命的なダメージを負ってしまう。
暴れるエーシェを押さえ込みながら、タキネスはかぶりを振った。
「もう遅いんだ。セルリカは貴重な実験体だったんだろう？　だったら、薬物投与を行う過程で簡単には死なないように延命処置が施されていた筈だ。これほど衰弱して生きていられたのは、何らかの作用があったからだ。だが、アジュールの屋敷は燃えてしまった。もう、処置を行うことはできない！」
はっとエーシェは息を呑んだ。セルリカの青ざめた顔。口端から流れる血。魔法を撃つ度に消えていく生命の灯火。彼女に待っているのは緩慢な死だけだ。

「だったら余計に私が死ぬべきでしょう！　私の命で、姉さんの生が意味あるものに変わるのなら、なおのことじゃない！」
エーシェは尚もタキネスの腕の中でもがいた。しかし、どれだけ暴れようと抱きとめる力は一向に弱くならない。まるで岩の中にでも閉じ込められたよう。自分の意思で動く事はできず、自分以外の意思に支配されていく。
拘束とはそれだけで責め苦になる。意思が反映できないこと。行動をまっとうできないこと。長い年月の間、ずっと地下牢に閉じ込められていたセルリカは、どれだけの悔しさを味わっただろう。
「離して！　私は、姉さんに殺されるために生かされたの！　そう決めたの！」
「駄目だ。お前さんはセルリカの死を背負わなきゃならない」
「タキネス！」
エーシェの怒声。親の仇を睨むような目つき。だが、タキネスはその表情を変えない。
「お前が死んで何になる。二人とも死んで何になる。もし、お前さんが姉から何かを奪ったというのなら、その罪をずっと背負っていくことが償いだろうが。生き続けることが彼女の生に本当の意味を与えるんだ！」
「姉さん……！」
エーシェは下唇を噛んだ。強く。血が滲むほどに。精神（こころ）の痛みを肉体の痛みで掻き消そうとするように。痛みで折れそうになってしまう心を懸命に繋ぎとめる。
震えるエーシェを抱きしめ、タキネスは囁いた。
「俺も一つ罪を犯す。お前の姉を……殺すよ」
戦士の静かな誓いと時を同じくして、豪雨の如く降り注いでいた魔法が止まった。

＋

横たわるセルリカにエーシェが駆け寄った時、彼女は既に事切れていた。
長期間に及ぶ薬物投与と閉鎖環境による拘束。癒し難い絶望による精神の破綻。彼女の身体は手の施しようがないほどにボロボロだった。
タキネスの言う通り、アジュールの一族は貴重な実験体を維持するたに、何らかの延命処置を施していたに違いない。
とても一人では生きられない欠損した肉体と精神。彼女の死は、エーシェと対立したとの時から決まっていたのだろう。
そのアジュールの屋敷も人々も今はない。エーシェの暴走によって崩壊した。
セルリカを殺したのはやはり自分なのだ、エーシェは思う。自分が生まれたせいで、彼女は

時間や居場所、健康な肉体を奪われたのだ。
セルリカには一片の非もない。エーシェにだって非はないだろう。誕生は罪ではない。同時に死もまた罪ではない。この世に悪があるとすればそれは、それらを弄んだ人類という生き物の悪心に他ならない。
この人は、何のために生まれてきたんだろう。
そう思うと、エーシェの胸は激しく締め付けられた。自分が居場所を奪い、自分が生きる為に奪われ続けた少女。彼女が満足して死ねるのなら自分は死んでも良かった。それで少しでも償えるのなら、命など惜しくはなかった。
……でも、それは本当に償いになるのか。
たとえ、エーシェがセルリカの手に掛かったとしても、結局、彼女の奪われた時間や健康は戻ってこない。自分を犠牲にして生まれた彼女を破壊したとしても、手元には何も残らない。それでは――彼女の人生は無意味そのものではないか。
「姉さん……私は、あなたのおかげで生きています。生きていけます」
エーシェは膝をついて、セルリカの瞳をそっと閉じる。始終、憎しみしか映さなかった顔が初めて安らかなものに変わった。
「でも私、一人になっちゃった。一人になっちゃったよ……」
セルリカの頬にぽつりと水滴が落ちる。エーシェの想いが涙となって溢れ出した。
孤独を背負って生きることが果たして償いになるのだろうか？
姉の死を意味のあるものにするために、エーシェに死は許されない。生き続ける以上、ある種の孤独は彼女の心を蝕んで行くだろう。あるいは、それこそが彼女に与えられた罰なのかも知れなかった。
「エーシェ。俺と一緒に行こう」
泣き崩れるエーシェの肩を、タキネスがそっと叩いた。
「お前さんの能力は自身を危険に晒す。思考と神剣機関が直結したお前さんは、ちょっとした感情の揺らぎで不安定に陥り、暴発すれば、己はおろか周囲の人間まで巻き込む危険を孕んでいる。そんな状態では、姉の代わりに生き続けることなんてできないだろう」
事件の原因はアジュールの所業によるものだが、エーシェがその不安定な能力で屋敷と大勢の命を焼き払ったのは事実だ。
恐怖や憎悪といった原感情に免疫のない彼女は、常に暴走する危険性を孕んでいる。屋敷の人間はそうならないように細心の注意が払って接していたのだろうが、もう彼女を保護する者は存在しない。その問題を解決しない限り、これからのエーシェとそれを取り囲む人々に安寧の日々は訪れない。
「お前さんの能力は俺が何とかしてやる」
「……ありがとう。でも、あなたを殺すかも知れないわ」

エーシェの気遣いに、けれどタキネスは苦笑を浮かべた。
「おいおい、俺以上の適任者なんかそうそういないぞ。なんせ、魔法が効かないからな。俺と一緒に来るのが一番良いんだ」
魔法使い殺しを唯一育てられる魔法殺し（マジック・キラー）（マジック・キャンセラー）。果たして、対極を成す能力の持ち主同士が都合よくこの場に介するだろうか。二人の出会いは本当に偶然なのか。仮に誰かの意図が介入したとして、それを証明する手立てなど二人には……人類にはありはしない。
知り得る者がいるとすれば、それはきっと――
「俺はきっと、そのために風に呼ばれたんだ」
タキネスはエーシェの髪を優しく撫でた。
「俺には罪がある。お前の姉を殺した罪が。その罪は、お前を育て上げることでしか償えないと思っている。俺に罪を償わせてくれよ、エーシェ」
エーシェはタキネスに抱きつくと、胸に顔を埋めて大声で泣いた。胸の奥から溢れ出す想いを全て吐き出し、嗚咽交じりに言葉を紡ぐ。
――ごめんなさい。
自分が奪ってしまったあらゆるものに。
エーシェはごめんなさいと、謝らずにはいられなかった。

＋

――そんな、懐かしい夢を見た。

「……さん」
誰かが呼ぶ声が聞こえる。ゆっくりと浮上する意識。思考と身体がシナプスで繋がり、一体となって運営を再開する。
「起きてくださいまし、エーシェさん」
今度はきちんと聞こえた。自分を呼ぶ誰か。声音と口調が記憶を刺激し、関連ある情報を脳が反射的に提示する。目蓋の裏に浮かんだのは、上品でお嬢様っぽい外見だが、内面は嫌みったらしい女の子の仏頂面だった。
すっと眠気が飛ぶ。
「……なによ、ミーネ」
目が覚めた時、エーシェは冒険者ギルドの受付席に腕を組んで座っていた。向かいの席では依頼書を手にしたフルミーネが呆れ顔をしている。
「よく依頼の説明中に眠れますね」

「あぁ、えっと……？」
目を擦りながら、エーシェは事態を把握しようと頭を回転させた。のろのろと脳を走る電気信号が巡回を始め、数秒で該当する事柄を記憶野から引っ張り出すことに成功。論理的思考を開始する。
十分な情報が発掘されると、エーシェはそうそうと内心で頷いた。
彼女はいつものように依頼を受注しにギルドにやって来ていたのだが、パーティ人数の関係でミーネと口論になったのだ。そして、あまりにも埒が明かなかったのでミーネは支部支配人に伺いを立てに行き、それまで瞑想でもしようかと瞳を閉じたところで――記憶がぷっつりと途切れていた。
「ありゃ。寝ちゃってたのか」
「呆れて物も言えません。本当に上級冒険者なんですか、あなたは？」
「私だってね、そんな大層なもんにはなりたくなかったわよ。それなのに、ちょーっと功績が残ったからって、ベルクートの馬鹿たれが……まあいいや。それで、どうだったの？」
姿勢を直しつつ、エーシェはミーネにと問いかける。しかし、彼女は被りを振った。
「無理ですね。やはり、この依頼に二人も割けません」
伺いを立てる前と同じ結論に、エーシェは渋い顔をした。
「えー、どうしてよ？　パーティの最小単位は二人編成（エレメント）でしょ。ギルド所属の冒険者は、可能な限り二人以上の編成を行って、迅速かつ多角的に依頼の解決に当たるのが規則でしょ？」
それに文句はない、とミーネは頷いた。
「その通りです。しかし、上級冒険者には例外的に、単独で依頼を受託する権限を与えられていますね？」
「うっ、そりゃまあ……」
淀みなく口上を述べるミーネに、エーシェは面白くなさそうに唸った。
ギルドでは、冒険者の実力と功績に応じて階級を設定する方針を取っている。客観的に評価された階位は文字通り冒険者のレベルであり、依頼もそれを基準に斡旋される仕組みだ。
これには二種類の意味がある。一つは冒険者の技術や能力といった数値化し難い概念にある程度の形状を与えることで、冒険者の力量を把握し易くするため。
もう一つは、それを目安に適切なレベルの冒険者を適切な難易度の依頼に派遣することで、派遣側のミスを軽減するためだ。
エーシェは、その最高位の冒険者の一人なのである。
「上級冒険者が特例的に単独行動の権限が与えられているのは、本来、二人以上で対処すべき事件を一人で解決するだけの能力を持っているからです。噛み砕いて言えば、あなたが単独で仕事を行うことで余った人手を他の依頼に回せるわけですね。それにより労働力を分散させ、効率よく依頼を処理することができる、と」

「でも、それって経営者の論理だよ。いつだって現場は人手が足りないのに」
「それを何とかするのが手腕というものでしょう。私は、アシュラン支部でも随一と称されるエーシェさんの力量を鑑みて、今回の依頼は単独（ソロ）で十分だと判断しましたし、ベルクート様も同意見です」
そこで一旦言葉を区切り、ミーネはにやりと意地の悪い笑みを浮かべた。
「決して、お兄様とパーティなんか組ませてなるものか、といった私的な感情による独断ではありませんから、安心してください」
「……そのセリフを言わなきゃ言い包められたのに」
「これからもこういうことが起こるかもしれませんね。ふふふ」
ですが、とミーネは真顔に戻る。
「実際、今回の依頼はエーシェさんの実力があれば余裕だと思いますが。田畑に出現した野犬の掃討なんて一人で十分でしょう？　何で、お兄様を同行させたがるんです？」
事実、そういう討伐依頼はよほどの大物でない限り下位の冒険者の担当だ。上位の冒険者のエーシェが担当することはまず無いだろう。どうしてもという場合は今回のように人数の制限を受けてしまう。ミーネが首を捻るのも当然といえた。
「――風が吹いたからかな」
呟いたエーシェの顔は、同姓のミーネがどきりとするほど綺麗な微笑だった。
「……風？」
「うん。風がさ、この依頼（ヤマ）は面白くなりそうって囁いたんだよ。だからまあ、一人よりは二人かなって」
そう言って、エーシェは照れたように頬を掻いた。
まあ、他に理由がなくはない。以前、ランポに問われた事。どうして冒険者になったのか、その理由を話してもいいと思ったからだ。
姉（セルリカ）の死を背負って往き続けることがエーシェの贖罪（しょくざい）である。
しかし、それはただ生きることに固執することではない。幽閉され続けた姉の代わりに彼女が感じることができなかった『世界』というものを見ようと思ったからだ。
風の声に耳を傾け、面白そうなことと関わって生きたい。渓谷で白翼竜と共に隠居しているくそじじい――タキネスのように。
だから冒険者になった。風の吹くまま、風の囁くままに多くの人々と知り合い、多くの事件に関与し、多くのものを得る。姉の分まで世界を感じられるように。
エーシェの旅路は風の軌跡なのだ。そして、これからも風を追って歩いていく。
その隣を歩くのは……まあ、とりあえずはランポで我慢しておこう。いずれ新たな風が吹くかも知れない。
「よく、解りませんわ」

そう言って首を傾げるミーネに、思わずエーシェは吹き出した。
かつてのエーシェもその言葉に全く同じ反応をした。それが胸を締め付けるほど懐かしく、微笑ましく、とても切なかった。
――姉さん。私は、生きているよ。
「人の顔を見て笑うとは失礼千万ですね。おまけに涙まで流して……もう許せません！」
わなわなと拳を振るわせ、ミーネが受付から立ち上がった。隣席で別の冒険者に指示を出していたルクレールが慌てて彼女を羽交い絞めにする。
「ちょっとエーシェちゃん、ミーネちゃんをからかわないでよ。これ、お客さんから苦情来てるんだから！」
「違う、違うのよルクレ。これにはちょっとした事情があって――」
「問答無用！」
雷鳴が迸り、ギルドのあちこちから悲鳴が上がる。
それに巻き込まれる寸前、ギルドからひらりと脱出したエーシェを一陣の涼やかな風が吹き抜けて行った。